久遠の神話

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
久遠の神話

【Ｎコード】
Ｎ２９７９Ｖ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
十三人の剣士達。生き残る一人だけが願いを適えられる。
この戦いを動かしているのは誰か、そして何故剣士達は戦う運命にあるのか。現代を舞台としたバトルファンタジーです。

第零話　炎の覚醒その一

ごくありきたりのリビング。木の床のその部屋のやはり木のテーブルに座ってだ。彼は今はトーストを食べている。

彼の後ろの台所ではエプロンを着た四十代の女がだ。黒いフライパンで何かを焼いている。そうしながらだ。彼に尋ねてきた。

「ねえ」

「何だよ」

「あんたベーコンエッグ食べるわよね」

こう彼に問うたのだ。細長めの顔に垂れた奥二重の目、眉は黒く一文字でそれぞれ斜め上にあがっている。唇はしっかりと横にあり鼻は高めでいい形をしている。髪は耳が隠れるまで伸ばし黒い。その彼がだ。

トーストを食べながらだ。こうその女に言うのだった。

「ああ、今焼いてるんだよな」

「ええ、そうよ」

その通りだとだ。女も彼に答える。

「まずはお父さんのをね」

「ああ、親父のなんだ」

「お父さんはハムエッグが好きだから」

見ればだ。実際にフライパンにあるのはハムエッグだった。白身と黄色い卵の部分に赤いハムの色もある。そこから美味そうな匂いもあがっている。

「それでまずはね」

「親父のなんだ」

「次にあんたよ」

彼だというのだ。

「あんたの次はね」
「あいつだよな」
「和歌子は起きたの？」
「起きたんじゃないの？」
彼の返答は実に素っ気無いものだった。
「そろそろ朝練の時間だしさ」
「ちょっと見てきてくれる？」
母は焼いたハムエッグを皿に移しながら彼に言う。
「今からね」
「えっ、何でだよ」
「遅刻したら駄目じゃない」
それでだとだ。彼に言うのだ。
「部活っていってもね。だから起こしてきて」
「あいつが勝手に起きるだろ」
不機嫌になった声でだ。彼はトーストを食べながら母に言葉を返す。
「そんなの別にさ」
「嫌なら別にいいわよ」
彼の返答にだ。母はこう返すのだった。
「その代わりね」
「ベーコンエッグなしだっていうんだよな」
「普通の目玉焼きになるわよ」
つまりだ。ベーコンを入れないというのだ。ベーコンを入れないと何になるか、何の変哲もない目玉焼きになってしまう。見事な恫喝であった。
「それでもいいのね」
「目玉焼きになるのかよ」
「それでどうするの？」
こう問い返す母だった。
「どっちがいいの？」

「ベーコンエッグに決まってるだろ」
彼の返答はこれだった。
「目玉焼きとベーコンエッグじゃな」
「全然違うわよね」
「わかったよ。今起こすよ」
彼は嫌々といった顔でだ。携帯を胸のポケットから出してだ。
そのうえでだ。メールを入れたのだった。
それを済ませてからだ。母に言った。
「起こしたぜ」
「あんたねえ」
「携帯でもいいだろ」
こうだ母に話すのだった。
「そのアラームの音で起きるんだからな」
「それはそうだけれど」
「じゃあいいよな」
「まあね。それじゃあいいわ」
憮然としているがそれでもだ。母は妥協した。
その印にだ。ベーコンを数枚出した。そしてだ。
そのベーコンをフライパンに出してだ。焼きはじめた。
それを焼いて卵も二つ落としてだ。それでだった。
彼にだ。こう言うのだった。
「はい、できたわよ」
「じゃあ食うか」
「全く。何でそう横着なのよ」
ベーコンエッグを皿の上に置きながらだった。我が子に言う。

第零話　炎の覚醒その二

「あんたって昔から」
「無駄なカロリーは使わないんだよ」
「それを横着っていうのよ」
そんな話をしながら彼の前に皿を持って来た。黄色い気味のベーコンエッグが実によく焼けている。しかも美味そうな匂いも出している。
それを出してだ。また言う母だった。
「大学生になってもそれは変わらないのね」
「部活じゃ速さの中田って言われてるさ」
だからいいとだ。そうした口調だった。
「部活で動いてるからいいんだよ」
「そういう問題じゃなくてね」
また言う母だった。言いながら台所に戻ってだ。またフライパンを使っていた。
そうしながらだ。母は彼に言うのだった。
「こうした場合は動くものでしょ」
「わざわざあいつの部屋まで行ってかよ」
「ええ、そうよ」
「いいじゃないか、別にな」
またこう言う彼だった。
「起こしたんだからな」
「これで起きなかったらどうするのよ」
「またメール送るさ」
そうするとだ。中田はあっさりと答えた。
「それだけさ」
「本当に直行らしいわね」
母は彼の名前を呆れた声で言った。

「そういうところ誰に似たのかしら」
「多分爺ちゃんだな」
「お父さんに？」
母から見ればそうなる。それだからこその言葉だった。
「お父さんに似たの」
「そうなんだろうな」
「そういえばお父さんって横着だけれど」
「だから俺は爺ちゃん似なんだよ。顔もね」」
「そうね。顔はそっくりね」
母もそのことは認めた。
「それに剣道をやってるのもね」
「爺ちゃんに教えてもらったからな」
「お父さんも変なこと教えたわね。けれどね」
「けれど？何だよ」
「お父さんそこまで横着じゃないわよ」
それは違うというのだ。
「流石にね」
「じゃあうちの親父は」
「お父さんは丁寧でしょ」
今度は夫をこう言うのだった。彼女にとって父は二人いるのだ。
「それも凄くね」
「そういえばそうか」
「だから。あんたは横着過ぎるのよ」
こう言って我が子を叱る。またベーコンエッグを焼きながら。彼はその間にフォークとナイフを使って自分のベーコンエッグを食べている。
「本当にね」
「横着上等だよ」
「開き直ったわね」
「だから無駄なカロリーは使わないんだよ」

「剣道でもそうなの？」
「そっちは速さの中田だよ」
また自分の仇名を言ってみせたのだった。
「そうなんだよ」
「そっちはカロリー使ってるのね」
「そうじゃないと勝てないからな」
「必要だから使うのね」
「そういうことだよ」
言いながらコップの中の赤い野菜ジュースを飲む。
「必要な時は使うからいいんだよ」
「それで生きていくのね」
「ずっとな」
「適当ね」
「適当か？」
「そういうのを適当っていうのよ」
我が子にだ。半ば叱る様にして次げるのだった。

第零話　炎の覚醒その三

「全く。まあいいわ」
「あいつが起きればそれでいいよな」
「美和子がね」
そのだ。彼女がだというのだ。
「本当にそろそろよね」
「起きなければまた携帯でメールを送る」
「そうしてね」
「ああ、そうするさ」
そんな話をしながらだった。中田はジュースを飲みベーコンエッグを食べていた。そこにだ。
中田によく似ただ。中年の男性が来たのだった。白いカッターに黒と青のストライプのネクタイに黒のスラックスという格好である。
その彼がだ。中田の顔を見てこう言った。
「何だ、御前だけか」
「あいつはもうすぐ起きてくるさ」
「そうか。美和子ももうすぐだな」
「そうなったら俺も何もしなくていいしな」
「全く。御前はなあ」
中田に対してだ。その中年の男は呆れる様に話すのだった。
「昔からだよな」
「いいじゃないか。別に誰も困ってないだろ？」
「さっきもその話したのよ」
母がだ。男に言ってきた。
「適当ってね」
「ものぐさなのはよくないぞ」
「そうそう。まあ今言ったから」
「ならいいか」

「またね。それじゃあ今から」
「ああ、今朝は何なんだい？」
「ハムエッグよ」
それだとだ。母は彼に話す。
「お父さんの好きなね」
「おっ、いいな」
ハムエッグと聞いてだ。彼、即ち中田の父は笑顔になって言った。
「じゃあそれ食べて元気をつけて行くか」
「そうしてね。今日も頑張ってね」
「母さんもだよな」
「ええ。スーパーのパートね」
所謂共働きだ。パートでもそう言っていい。
それにだ。母も行くというのだ。
「頑張って来るから」
「無理はしないようにな」
「お父さんもよ。課長になったんだから」
「いやあ、中間管理職は大変だよ」
苦笑いしながらだ。サラリーマンに相応しいことを話す。
「何かっていうと頼りにされてな」
「仕事が回ってくるのね」
「残業も多いしなあ」
「そうよね。だからね」
「無理はするな、ってな」
「そういうことよ。くれぐれも気をつけてね」
母は父、自分の夫に強い声で話した。
「過労にはね」
「働き過ぎて疲れたら何にもならないからな」
こうも言う父だった。
「だからな」
「そうよ。気をつけてね」

「じゃあまずは」
その為にだといってだった。
彼はだ。そのハムエッグを食べる。そしてだった。
野菜ジュースも飲む。そうしながら妻に話した。
「朝から一家団欒といきたいんだがな」
「最後の一人が今に来るさ」
中田は明るく笑って話した。
「今すぐにさ」
「だといいんだがな」
「まあ美和子はねえ」
ここで母がまたベーコンエッグを皿の上に置いてから話す。
「朝が弱いから」
「低血圧だからな」
「そうそう、それよ」
母は息子の言葉に応えた。そのうえでの言葉だった。

第零話　炎の覚醒その四

「お母さんに似てね」
「お袋もそうだったのか」
「そうよ。低血圧なのよ」
自己申告による言葉である。
「これでもね」
「けれど母さん毎朝ちゃんと起きてるじゃないか」
「努力してるのよ」
それでだというのだ。
「それでなのよ」
「努力だったのか」
「そうよ。朝は気合よ」
母はここでこうしたことも夫と息子に話した。
「起床ラッパで起きるのと同じよ」
「それじゃあ海軍だよな」
中田は母の今の言葉に首を捻って述べた。
「帝国海軍だよな」
「今の海上自衛隊もそうよ」
「ラッパで起きるのかよ」
「そうよ、それは今も同じよ」
「ラッパでなあ」
「そう、ラッパでね」
起きるのが海上自衛隊だというのだ。
「それは陸自さんや空自さんも同じだから」
「何処もラッパか、自衛隊は」
「そうよ」
まさにその通りだと応える母だった。
「それが自衛隊なのよ」

「ラッパってまだ使ってたんだな」
「使わないと思ってたの？」
「今は放送とかあるだろうにな」
これが中田の意見だった。
「それでも違うんだな」
「違うわよ。とにかくね」
「とにかく？」
「美和子は？」
妹の話がだ。また出て来た。
「まだ起きないの？」
「いい加減またメール送るか」
面倒臭そうな顔でだ。中田はまた携帯を出した。
それからだ。メールを送ろうとする。しかしだ。
ここでだ。セミロングのあちこちに癖のある黒髪にだ。縦に大きく切れ長めになっている目に白のブラウスと黒いミニスカートにハイソックスのだ。少女が来た。小柄でだ。体型もまだ幼い感じである。
その少女が来てだ。中田達に話すのだった。
「おはよう」
「やっと起きたわね」
母がだ。その少女にやれやれといった口調で話した。
「全く。毎朝遅いわね」
「低血圧なのよ」
こう返す少女だった。その癖の強い髪を手で触りながら。
「それでなのよ」
「毎朝そう言うわね」
「だって本当のことだから」
「全く。早く御飯食べなさい」
母は少女にまた言った。
「用意できてるから」

「朝御飯何なの？」
「トーストとベーコンエッグよ」
実際に皿の上にあるその二つを少女の前に出してだ。そのうえで言うのであった。
「はい、これ」
「有り難う、お母さん」
その少女美和子は笑顔で母の言葉ニ応えた。
そのうえでだ。まずはトーストと手に取って千切って口の中に入れてだ。それを食べながら中田に顔を向けて話をするのだった。
「さっきのメールお兄ちゃんよね」
「俺の他に誰かいるか？」
「残念だけれどいないわ」
トーストを食べながら兄に話す。話す間に野菜ジュースをコップの中に入れている。
「あんなメール送るのはね」
「だろ？すぐにわかっただろ」
「起きろって一言だったから」
それでだ。わかったというのだ。

第零話　炎の覚醒その五

「何かね。お兄ちゃんっていつもね」
「いい加減だっていうのか？」
「っていうか本当に無駄なカロリー使おうとしないわね」
「いざって時の為に節約してんだよ」
妹に対してもだ。言葉は同じだった。
「そうしてるんだよ」
「そういうのを世間ではね」
「ものぐさっていうんだな」
「そうよ。まさにそれよ」
トーストを食べ続けながら話す。
「それ以外の何者でもないじゃない」
「何か俺いつもそう言われるな」
「言うわよ。実際にそうだから」
それでだというのだ。
「まあ起こしてくれたのはね」
「感謝しろよ」
「有り難う」
御礼自体はあっさりと述べた。そうしてだった。
トーストの次はベーコンエッグを食べてだ。彼女は言った。
「とにかく。これ食べて歯を磨いてね」
「それで顔を洗ってだな」
「シャンプーもしてよ」
父に応えて話す。
「それから学校に行くわ」
「色々とやることがあるんだな」
「女の子はそうなのよ」
こう父にも話すのだった。

「それで朝の部活の後でね」
「御化粧もよね」
「それもしないといけないから」
今度は母に応えての言葉だ。
「本当に色々としないとね」
「朝練の後でシャワーを浴びたらどうだ？」
兄が妹にこんなことを提案した。
「それならすっきりするだろ」
「それも悪くないけれど」
だがだ。それでもだというのだ。
「そこまではね」
「しないのか」
「夕方の部活の後はすぐに帰ってお風呂だし」
これが美和子の日課だ。風呂も毎日なのだ。
「朝はシャンプーだけで充分よ」
「家でやるそれだけか」
「朝練はそんなに汗かかないし」
そうした事情故にだ。部活の前のシャンプーだけで充分だというのだ。
「だからね」
「俺はまあ。あれだけれどな」
「御風呂は一日を終えてよね」
「ああ、それだよ」
中田の風呂はそうしたものだった。
「やっぱりそれがいいだろ」
「まあ私はそれだとね」
「気持ち悪いか？」
「だからなのよ」
それでだとだ。美和子は話すのだった。
「朝起きたらね」

「シャンプーなんだな」
「朝からシャンプーの匂いさせてる女の子っていいじゃない」
「いいか？」
「清潔な感じでね」
自分で言う美和子だった。
「いい感じじゃない」
「そうか？俺は別にな」
「そういう鈍感なのが駄目なのよ」
今度は目を怒らせて言う美和子だった。
「全くね。そんなのだからね」
「何だってんだよ」
「彼女できないのよ」
少し意地の悪い笑顔になっての兄への言葉だった。

第零話　炎の覚醒その六

「このままずっと彼女いないで通すの？」
「そんな奴いるかよ」
「ゲイの人だったらそうでしょ」
「俺はゲイじゃないからな」
そのことはムキになって否定する。
「俺だってちゃんと募集してるさ」
「募集してるだけじゃないの？」
「今度はそう言うのかよ」
「だって。実際に彼女いないじゃない」
この現実をあくまで冷酷に話す美和子だった。
「そうでしょ」
「そのうちできるさ」
「そのうちかよ」
「そうだ、そのうちだよ」
こう妹に返すのである。
「だから大丈夫なんだよ」
「だといいけれどね。それはそうとよ」
「今度は何だよ」
「お兄ちゃん旅行行かないのよね」
美和子は話を変えた。そこにだ。
「そうよね」
「ああ、残念だけれどな」
そうだとだ。彼はまたとーストを食べながらそうだと話す。
「合宿だからな」
「大学の部活って多くない？」
「そんなに多いか？」
「この前あったばかりじゃない」

そのだ。部活の合宿がだというのだ。
「それでまたって」
「大会が近いからな」
それでだとだ。中田はトーストにマーガリンを塗りながら話す。
「それでだよ」
「大会ね」
「ああ、今年こそはってなってるからな皆」
「八条大学の剣道部って強いからね」
「ああ、余計にな」
「だからよね。成程ね」
それを聞いてだ。頷く彼女だった。
その話をしてだった。父と母も息子に話した。
「なら留守番頼むな」
「御願いね」
「犬の散歩と猫の餌御願いね」
「しっかりしてくれよ」
「わかってるさ。あいつ等のことは任せてくれよ」
ペット達のことはあっさりと受けるのだた。
「それじゃあ楽しくな」
「金沢だからな。土産は期待しておけよ」
「お魚たっぷりだからね」
「それはいいな」
魚と聞いてだ。彼もだ。
笑顔になってだ。こう両親に言う。
「北陸って魚が美味いからな」
「だからな。楽しみにしておけよ」
「是非共ね」
「それじゃあ。楽しくやってきてくれよ」
笑顔で話してだった。彼は学校に向かうのだった。
バイクで大学まで行き講義を受けてから部活に入る。まずは黒い

ジャージを着て走った。それが終わってから同じ部の仲間達とこんなことを話すのだった。
「なあ、聞いたんだけれどな」
「何だ？」
「どうしたんだよ急に」
「何かフェシング部に凄い奴がいるって聞いたんだけれどな」
こう仲間達に尋ねるのだった。
「何ていったかな」
「ああ、牧村か」
「あいつのことか」
すぐにだ。この名前が出て来た。

第零話　炎の覚醒その七

「二年のだろ?学部は知らないけれどな」
「あいつのことだよな」
「そうだよな」
「ああ、牧村っていうんだな」
話を聞いてだ。中田は納得した顔になった。ランニングの後の整理体操をしながらだ。仲間達の話を聞いてそれで頷くのだった。
「そういうんだな」
「強いけれど相当無愛想な奴らしいな」
「口調が全然変わらないらしいな」
「そんな奴か」
「学部は。ええと」
「何処だった?」
学部の話になるがそれはだった。彼等の記憶にはなかった。
「まあ。わからないけれどな」
「とにかくそういう奴だよ」
「強いけれど無愛想でな」
「付き合いにくい奴みたいだな」
「世の中色々な奴がいるからな」
中田はこう言うだけだった。
「無愛想な奴もいるよな」
「で、そいつ酒飲めないらしいしな」
「甘党らしいぜ」
「それもかなりな」
「ああ、俺も甘いもの好きだぜ」
中田は甘いものの話を聞いてだ。笑いながらこう話した。
「アイスでもチョコでもな。何だってな」
「御前それに酒も飲むしな」

「ビールでもワインでも飲むよな」
「アルコールが強い酒は駄目だけれどな」
それでもだ。飲むことは飲むというのだ。
「けれど好きだぜ」
「結局甘いものも酒もいけるんだな」
「御前はそうだよな」
「ああ、ただ付き合うのは女だけだぜ」
陽気なままこうしたことも言う彼だった。
「男は駄目だからな」
「そっちは両方じゃないよな」
「まあ。流石にな」
「それが普通だよな」
「俺はホモは駄目なんだよ」
そうだと話す彼だった。
「ああいうのはどうしてもな」
「我が国はそういうのは寛容だけれどな」
「歴史上結構そういう人も多いしな」
「織田信長とか武田信玄とかな」
「上杉謙信もそうだよな」
彼等にそうした趣味があったのは判明している。織田信長が森蘭丸を傍に置いていたのも武田信玄が高坂昌信を傍に置いていたのもそれが理由だ。上杉謙信も直江兼続を育てたのもそうした理由もあったのだ。
「俺はそっちの趣味ないけれどな」
「俺も」
「俺もだよ」
「そういうのはな」
こう口々に話す彼等だった。
「俺達も酒も甘いものもいけるけれどな」
「付き合うなら女の子だよなあ」

「今度コンパあるよな」
「中田、御前もそれ出るよな」
「今度のコンパ」
「ああ、確かあれだろ」
中田もだ。コンパと聞いてだ。これまで以上に明るい笑顔になって仲間達に応えるのだった。そうしてそのうえでこうしたことを言うのだった。
「アーチェリー部とのだよな」
「ああ、それだよ」
「アーチェリー部の娘達とな」
「スタープラチナで合コンだよ」
「絶対に来るだろ」
「俺のライフワークだからな」
笑顔のままだ。こんなことも言う中田だった。

第零話　炎の覚醒その八

「コンパに参加して遊ぶのはな」
「ああ、じゃあ行くか」
「御前の名前書いておくからな」
「それじゃあな」
「さて、どんな娘がいるかな」
明るい顔のまま話す彼だった。
「今から楽しみだぜ」
「おい、休憩終わりだ」
部長が彼等に言ってきた。
「今度は筋トレやるぞ」
「わかりました」
「じゃあ次はそれですね」
「ああ、それするぞ」
こう彼等に話すのである。やたら背の高い茶髪の青年だ。青いジャージを着ていてそれがかなり似合っている。その彼が部長だった。
「身体はほぐしたよな」
「はい、休めました」
「充分過ぎる位に」
「それならやるぞ。いいな」
こうしてだった。彼等は今日はそのままトレーニングを続けるのだった。
そしてその後でだ。彼等はだ。
合コンの日を迎えた。その日にカラオケ屋に入った。その店に入るとだ。
まずは星達が目に入った。そしてその次にはだ。
横浜ベイスターズの帽子を被った小柄な娘がカウンターに見える。黒のショートヘアの可愛い娘だ。しかしその表情はというと。

「ああ、ベイスターズ負けたか」
「うわ、今日も酷い点数だな」
彼等はカウンターの壁のそのスコアボードを見て言う。
「こっちは完封で向こうは二桁か」
「凄い惨敗だな」
「よくここまで負けるよ」
「全くだな」
こうだ。彼等は呆れながら言うのであった。
「広島相手に何処まで負けてるんだよ」
「今鯉が勝ったら阪神抜かされるよな」
「せめて。ここで勝ってくれないとな」
「困るんだけれどな」
「全く。ベイスターズもなあ」
「こんなのじゃな」
「今年も最下位か？」
不吉な、横浜ファンにとってはそうした言葉が出て来た。
「ここんところずっと最下位だからな」
「しかも負け方酷いしな」
「いい選手はどんどん出て行くからな」
「フロントは駄目だしな」
「もうどうしようもないだろ」
「暫くずっと最下位か？」
こんなことを話しているとだった。カウンターのその娘は。
無言だがそれでもだ。彼等をむっとした顔で見据えた。そうしてだ。
彼等にだ。その不機嫌な声で問うのだった。
「あの」
「ああ、何だ？」
「どうしたんだ？」
「御部屋はどこにされますか？」

こう彼等に尋ねるのである。
「それで」
「ああ、そういえば部屋何処だった？」
「予約入れてたよな」
「そうだったよな」
「予約ですか」
その不機嫌な顔で応えるカウンターの娘だった。
「今日の予約は五号室ですが」
「そうそう、そこそこ」
「五号室だよ」
「そこだったよ」
「わかりました」
声もだ。実に不機嫌なままだ。そしてだ。
彼等をその五号室に案内する。そこはパーティーができるだけ広かった。
まだ灯りは点いておらず暗い部屋にだ。壁に付けられている席がありテレビもある。そしてマイクに分厚い曲の番号が書かれた本、そうしたものが置かれていた。

第零話　炎の覚醒その九

その部屋に案内してだ。女の子は彼等に言ってきた。
「それじゃあ」
「ああ、後で女の子も来るからさ」
「その娘達も案内してくれよ」
「頼んだからな」
「わかりました」
やはりだ。不機嫌な返答だった。
「それでメニューは」
「ああ、じゃあこれにするか？」
一人がだ。壁にあるその貼り紙を見て言った。そこには二百円でだ。お楽しみメニューと書かれている。その貼り紙を見ての言葉だった。
「これにな」
「ああ、それ止めておけ」
「絶対にな」
ところがだ。周囲はだ。その彼にこう言うのだった。
「そのメニュー横浜が負けると酷いからな」
「もう頼んだ酒に絶対に合ってない料理が出て来るんだよ」
「カレーに日本酒とかな」
「えげつないからな」
「狙ってはいません」
それは否定する女の子だった。
「安心して下さい」
「いや、それでも最悪の組み合わせになるだろ」
「ましてや今日横浜負けてるから」
「それじゃあな」
「絶対にそうなるだろ」

「今日も」
「そうかも知れません」
しかもだ。否定しないのだった。彼等のその言葉を。
「ですが味は手抜きしません」
「いや、それでも酒と野菜スティックとかはな」
「絶対に勘弁して欲しいから」
「だから他のもの頼むよ」
「何があってもな」
「そうですか」
そう言われてだ。女の子はだ。その話を終わらせてあらためてメニューを聞いてオーダーに書いてだ。それからこう彼等に話した。
「それでは。後でなのですね」
「ああ、後でな」
「女の子達が来るからさ」
「安心してくれよ」
「わかりました」
小さく頷いて応える女の子だった。そのうえでその場を後にするのだった。
そうしてだ。帰るのだった。それを見届けてからだ。
彼等はそれぞれの席に座る。その中で中田は言うのだった。
「もうすぐだよな」
「ああ、女の子達だよな」
「そうだよ」
こう友人にも返す。
「それと酒に食い物な」
「食い物はともかく飲み放題歌い放題だからな」
「たっぷり楽しめるぜ」
「そりゃいいな。じゃあ心一杯飲むか」
笑顔でだ。中田は言った。
「これからな」

「それで女の子だけれどな」
一人がその相手のことを話してきた。
「一人面白い娘がいるらしいな」
「面白い？」
「ああ、留学生らしいんだよ」
その娘がだ。面白いというのである。
「髪の毛の色とかそんなのが凄いらしいんだよ」
「可愛いのかよ」
「可愛いっていうか美人らしいな」
「それもかなりな」
「へえ、美人か」
その話を聞いてだ。中田はすぐに笑顔になった。そのうえでだ。
女の子達が来るのを待った。そして程なくしてだった。
「お待たせ」
「元気にしてる？」
「どうなの？」
女の子達の明るい声が部屋に入って来た。見ればだ。

第零話　炎の覚醒その十

派手で露出の多い、所謂勝負服を着てアクセサリーも身に着けた女の子達がやって来てだ。そのうえで中田に対して声をかけてきた。

その彼等にだ。中田の仲間達が笑顔で応える。

「今来たところだよ」

「丁度今な」

「あのベイスターズの帽子の女の子に案内されたんだよな」

「そう、明日夢ちゃんにね」

「この部屋って言われてね」

「すっごく無愛想にね」

この言葉も付け加えられる。

「いつもっていうか横浜が勝ってたらね」

「凄く愛想いいんだけれどね」

「けれど。今日は負けてるから」

「しかも惨敗だから」

それでだというのである。

「今日は機嫌悪いのよね」

「それもかなりよね」

「まあ。いつもだけれどね」

「横浜が負けるのはしょっちゅうだから」

「何だ。知り合いなんだ」

剣道部員の一人がここでこう彼女達に言った。相手は彼等の向かい側に座ってきている。そのうえで話を続けるのだった。

「あの娘と」

「っていうか明日夢って名前だったんだな」

「はじめて知ったよな」

「そうだよな」

「いい娘よ」

このことは保障する彼女達だった。
「確かに狂信的な横浜ファンだけれどね」
「それでもいい娘よ」
「明るくて仕事もできるし」
「このお店の娘さんでね」
「ってこの店の娘さんだったのかよ」
「そうだったんだな」
彼等のはじめて知る真実だった。
「誰かって思ってたけれど」
「そういう娘だったのかよ」
「そう、このビルのオーナーさんの家でね」
「スタープラチナの看板娘なのよ」
「アルバイトとは少し違うから」
「そのことはわかっておいたらいいわ」
こう笑顔で話していくのだった。そうした話をしてからだ。
あらためてコンパに入る。その場にだ。
銀色の見事な髪を後ろに伸ばし束ねてだ。そうしてである。
緑のエメラルドの如き目はやや切れ長で二重である。睫毛が長い。
顔立ちはほっそりとしていて鼻立ちが整っている。色は何処までも白い。
長身ですらりとしている。長い足を黄色いスラックスで包んでいる。そのブラウスは薄いレモン色だ。その彼女がだ。中田の前に座っていた。
中田は本能的にだ。彼女に声をかけた。
「あのさ」
「はい」
その銀髪の美女もだ。彼に応えてきた。
「君だよね。その留学生って」
「私がどうかはわかりませんが」
美女はこう前置きしてから中田の言葉に応えてきた。

「私は確かに留学生です」
「やっぱりそうなんだね」
「ギリシアから来ました」
こう答えるのだった。
「あの国からです」
「ギリシア人なんだ」
「そうです」
中田の言葉にだ。こくりと頷いての言葉だった。
「国籍はそうなります」
「わかったよ。それでこの国に来たんだ」
「はい。ただ」
「ただ？」
「父が日本人でして」
それでだというのだ。

第零話　炎の覚醒その十一

「名前は日本の名前になっています」
「えっ、名前はそうなんだ」
「銀月聡美といいます」
こう名乗るのだった。
「これが私の名前です」
「それで部活は」
「はい、アーチェリー部です」
「そうだよな。アーチェリーは向こうにいた時から？」
「ずっとやっています」
このこともだ。美女、即ち銀月聡美は話した。
「長い間」
「長い間って？」
「遥かな昔から」
不意にだ。聡美はこんなことを中田に話すのだった。
「そうしています」
「あのさ、遥かな昔って」
中田はすぐにその言い方に突っ込みを入れた。
「幾ら何でもさ」
「はい？」
「ないんじゃないかな」
笑ってだ。こう聡美に話すのだった。
「だって俺達大学生だよ」
「だからですか」
「そんなさ。遥かって」
笑いながら聡美にまた言う。
「大袈裟だよ」
「あっ、そういえば」

聡美もふと気付いた顔になってだ。それで言葉を返してきた。
「私大学生ですから。日本の」
「で、幾つなの？」
「二十になります」
「何だ。俺と同じ歳じゃない」
「ええと。お名前は」
「中田っていうんだ」
笑顔で名乗る彼だった。
「中田直行っていうんだ」
「中田さんですか」
「そう、宜しくね」
「わかりました」
「それで銀月さん」
中田の方から聡美に対して言う。
「あんた趣味とかあるの？」
「趣味ですね」
「やっぱりあれかなアーチェリーかな」
「はい、それと」
「それと？」
「スポーツなら何でもです」
少しおずおずとした調子で中田に話す。
「しています」
「スポーツ大好きなんだ」
「兄も好きですし」
「ああ、お兄さんいるんだ」
「双子の兄です」
兄弟もいるとだ。中田に話す聡美だった。
「ギリシアにいます」
「ふうん、そうなんだ」
「兄はスポーツの他に音楽も好きで」

「何か凄いね」
「占いもします」
兄のことをだ。聡美は中田に問われる前に話していく。
「ただ私はスポーツ以外は」
「音楽は駄目なんだ」
「しない訳ではないですが兄程は」
「成程ね。お兄さん凄いんだ」
「かなり」
「ううん、羨ましいなあ」
中田は聡美の話を聞いて心から憧れの言葉を述べた。
「俺ってさ。音楽とかは好きだけれど」
「御自身でやられるのは」
「駄目なんだ。絵は好きだけれどね」
「絵、得意ですか？」
「芸術学部じゃないけれど自信はあるよ」
「今度見せてくれますか？」
「よかったらね」
気さくに返す。彼にしてもまんざらではない。

第零話　炎の覚醒その十二

その彼にだ。聡美はこんなことを言った。
「あの」
「うん、何かな」
「これからです」
「これから？」
「何があっても絶望しませんか？」
こう彼に問うてきたのである。彼のその目を見ながら。
「中田さんは。何があっても」
「ああ、絶望ね」
今度も笑いながらだ。そうして返す中田だった。
「俺ってそういうのとはさ」
「縁がないんですね」
「うん、ないんだ」
陽気そのものの声での返事だった。
「全然さ」
「じゃあ何があっても」
「そういうのはないよ」
また答える彼だった。
「何時でも明るくユーモアが俺の信条なんだよ」
「明るくですか」
「くよくよしたって仕方ないじゃない」
「そうですね。本当に」
「だからそれはないから」
こう聡美に話すのである。
「安心してよ」
「わかりました」
「で、銀月さんはどうなの？」

中田は聡美にそのまま話を切り返した。
「絶望したことっていうか。そんなことは」
「気にしていることはあります」
俯いた顔になってだ。聡美は言ってきた。
「ずっと」
「ずっと？」
「友人のことで」
そのだ。友人のことでだというのだ。
「私の姉の様な存在の。友人のことで」
「ふうん、そのお友達のことで」
「はい、気にしています」
そうだとだ。中田に話すのである。
「そのことがどうしても」
「友達思いなんだね」
「大切ですから」
だからだというのである。
「それで」
「で、その人って今どうしてるのかな」
中田は自然に聡美に尋ねた。
「日本にいるのかな」
「はい」
聡美は中田の今の問いに小さくこくりと頷いて答えた。
「います」
「そう、この国に」
「ただ」
「ただ？」
「日本の何処にいるのかは」
それがだ。よくわからないというのだ。
「そこまでは」
「？それってやばくない？」

中田は聡美の話、彼女の国籍も踏まえて考えてだ。怪訝な顔で述べた。
「その娘。女の子だよね」
「そうです」
「女の子で。留学生なのかな」
「そうなります」
「留学生の娘が住所不定って」
「この町にいるのは間違いないですが」
聡美はこうも話す。
「八条町ですね」
「うん、八条町だよ」
町の話にもなった。彼等が今いるのはその町なのだ。兵庫県の神戸市にある。そこに八条大学もありだ。そうして通っているのだ。

第零話　炎の覚醒その十三

「で、その人ってこの町にいるんだ」
「それはわかっています」
「その娘の家は」
「部屋はあります」
聡美は既に部屋という言葉も知っていることが今の言葉でわかった。
「そこにいる筈なのですが」
「それでもなんだ」
「何時行ってもいません」
「放浪癖あるんだね」
「そうです。簡単に言うと」
「厄介だね。っていうかその娘もやっぱりうちの学校の生徒さんだよね」
部屋と聞いてだ。中田はこう考えて問うた。
「そうだよね」
「そうです。それも私と同じです」
「それで大学に通ってなくて」
「することがありますから」
聡美は不意にだ。こんなことも言った。
「ですから」
「することって？」
そしてだ。中田もだ。こう彼女に問い返した。
「何それ」
「あっ、それは」
「どうも訳ありな娘みたいだけれど」
「何でもありません」
言葉を打ち消した。慌てた動作でだ。

「気にしないで下さい」
「そうなんだ」
「はい、それで」
「それで？」
「中田さんは剣道をやってますね」
「そうだよ。これでも腕には自信があるからさ」
中田は剣道の話になると明るい笑顔になって話をはじめた。
「ボディーガードでも何でもできるよ」
「そうですか。そこまで」
「これでも負け知らずなんだぜ」
「そうそう、こいつ強いよ」
「動きも速いししかも二刀流でさ」
「相当なもんだから」
中田の周りにいる剣道部の面々が酒やピザを手に言ってきた。無論彼等も剣道部である。
「ただ。性格は軽いからさ」
「そこは注意してくれよ」
「結構いい加減だから」
「おいおい、それはないだろ」
仲間達の言葉に中田は困った顔になって言い返す。
「俺はこう見えても真面目だぜ」
「何処がだよ」
「何処が真面目なんだよ」
彼等は茶化すように笑ってだ。彼に言う。
「御前が真面目だったらそれこそだよ」
「世界中真面目な人間だらけだろ」
「いつも適当だからな」
「何をするにしても」
「俺は必要なこと以外には力を使わないんだよ」
ここでもこんなことを言う彼だった。

「セーブしてるんだよ、セーブ」
「手抜きはセーブって言わないだろ」
「ったく、何から何まで手を抜くんだからな」
「本当に大事な時以外は手を抜くからな」
「それをいい加減っていうんだよ」
彼等のこうした言葉を聞いてだ。聡美は笑わなかった。本来ならば笑う、それもくすりとした笑いになるところだがそれでもだ。彼女は笑わなかった。
真面目な顔で聞いてだ。こう言うのである。
「そうですか。そういう方もまた」
「また？」
「またって？」
「なるのですね」
聡美の言葉だ。
「そうなのですね」
「なるって？」
「一体何に？」
「あっ、何でもないです」
まただ。周りに言われて言葉を打ち消す聡美だった。

第零話　炎の覚醒その十四

そして誤魔化す為かだ。彼等にこんなことを言ってきた。
「それでお酒ですが」
「ああ、飲み放題だからさ」
中田が笑顔で彼女に答える。
「好きなだけ飲んでいいからさ」
「ワインもでしょうか」
その飲み放題にワインもあるかどうかというのだ。
「それもあるでしょうか」
「ああ、ギリシアじゃ」
「はい、ワインです」
それが主に飲まれるというのである。実際にギリシアでは昔からワインがよく飲まれている。中田もそれは知っていてそれで言うのだった。
「それが一番よく飲まれます」
「だからだよな。勿論な」
「ワインもですね」
「好きなだけ飲めるよ」
「では。そうさせてもらいます」
「ワイン注文しようぜ」
中田は早速周りに言った。
「それでワインで乾杯しようぜ」
「ああ、それじゃあビールだけでなくな」
「ワインも頼んでな」
「そうして飲もうか」
こうした話をしてだった。彼等は早速ワインを頼んで飲むのだった。
無論聡美も飲む。その飲む量はかなりのものだった。

中田もワインをボトル単位で飲む彼女にだ。驚きを隠せずに声をかけた。
「飲むねえ」
「好きなので」
「それでそれだけ飲むんだ」
「はい」
その通りだとだ。聡美は答える。
「飲めます」
「そうか。それにしても飲むよな」
「そんなに飲んでますか？」
「あんたボトル三本目だよ」
聡美は自分からグラスに赤いワインを注ぎ込んで飲んでいる。既に二本空になっている。しかもさらにだ。三本目も空けているのだ。
中田もワインを飲んでいる。だが彼はまだ一本目だ。それを飲みながら聡美に話すのだ。
「それでまだ飲むんだよな」
「五本は」
「俺四本が限度だけれどな」
「ワインお嫌いですか？」
「あまり酒は強くないんだよ」
中田がこう言うとだった。周りはすぐに顔を顰めさせてこう突っ込みを入れた。
「いや、ワイン四本って凄いだろ」
「ただ飲むのが遅いだけでな」
「やっぱり凄いだろ」
「立派な酒豪だぜ」
「そうか？自分ではそうは思わないけれどな」
中田は自覚のない調子で自分でグラスに酒を注ぎながら応える。
「そうか？」
「そうだよ。今も飲んでるしな」

「御前も大して変わらないよ」
「まあいいじゃないか。とにかく飲んでな」
そうしてだというのだ。
「楽しくやろうな」
「そうですね。ただ」
また彼に言う聡美だった。
「何があっても」
「何があっても？」
「気持ちを確かにされて」
それでだというのだ。
「今の様に」
「何かわからないけれど俺はいつもこうだよ」
中田は笑いながら聡美にも言葉を返す。
「変わらないさ」
「そうですか」
「ああ、じゃあ楽しくな」
こんな調子でだ。中田は酒を楽しんだ。これが聡美との出会いだった。そしてそれから数日後だ。彼の家族は旅行に出た。快適な一人暮らしがはじまる筈だった。

第零話　炎の覚醒その十五

しかしその彼のところにだ。不意にだ。携帯のメールで連絡が来たのだった。
「おい、マジかよ」
「あの、とにかくです」
「病院だよな」
「すぐに来て下さい」
こう連絡が来たのだった。
「ご家族が」
「何でこうなるんだよ」
携帯をすぐに切ってだ。彼は忌々しげに言った。
そしてそのうえでだ。部活に向かう途中でユーターンする。その彼に友人達が声をかける。
「おい、どうしたんだよ」
「何があったんだよ」
「悪い、今日は無理だ」
こう彼等に返す。背を向けたうえで。
「明日はちゃんと来るからな」
「病院がどうとかって」
「まさか」
「何もないさ」
否定の言葉だった。否定になれない状況だとしても言ってしまった。
「別にな」
「そうか。それじゃあな」
「安心して行って来い」
「そうしろよ」
「ああ、わかった」

友人達の言葉を受けてだ。そのうえでだった。
彼は自分のバイク、ホンダワルキューレに乗りだ。そのうえでだ。
病院にまで向かう。そこに飛び込むとだ。すぐにだった。
「中田直行さんですね」
「はい、そうです」
こうだ。入り口で待っていた医者に答える。連絡してきた人ダと察した。
「俺がその中田です」
「そうですか。それでなのですが」
「親父は!?」
まずはだ。父から問うた。
「それでお袋は。美和子は」
「ちょっと待って下さい」
明らかに我を失っている彼にだ。医者は穏やかに告げた。
「まずは中に入りましょう」
「病院の中に」
「はい、話はそれからです」
「わかりました」
中田も医者の言葉に頷く。そうしてだった。
二人で病院の中に入った。その中は。
白く広い。受付もかなり多くの看護士が詰めている。その中を見てだ。
中田は少し落ち着きを取り戻してだ。その白い世界を見て医者に言った。
「それで、ですよね」
「はい、三階です」
「三階ですね」
「そこにおられますので」
落ち着きを取り戻した彼への言葉だ。
「では今から」

「わかりました。それじゃあ」
二人はエレベーターに乗りそこから三階に来た。それでだった。
三階もまた白い世界だった。ただし廊下はクリーム色と言っていい。
そのビニールの廊下を進みながらだ。医者に問うのだった。
「で、親父達は」
「何とかです」
「何とか!?」
「一命は取りとめました」
最悪の事態はなかったというのだ。
「幸いなことに」
「そうですか」
その言葉を聞いてだ。中田は安堵した。しかしその安堵した彼にだ。
医者はだ。さらに言ったのだった。
「ですが」
「ですが?」
「意識は戻られていません」
「三人共ですか?」
「はい」
医者は沈痛な顔で答える。その白髪を整えた眼鏡の顔が曇っている。
その曇った顔でだ。彼に話すのだった。
「意識不明です」
「じゃあまさか」
「脳は無事です」
脳死でもないというのだ。

第零話　炎の覚醒その十六

「そして内臓も損傷していますが」
「それでもですか」
「回復は可能です。また骨折や靭帯は損傷していても」
「身体も何とかですか」
「ですが。傷が深く」
そうしてだというのだ。
「意識は戻られていません」
「ですか」
「御会いになられますか？」
そうした状況でもだ。そうするかというのだ。
「そうされますか？」
「御願いします」
すぐにだ。答えた彼だった。
「そうさせて下さい」
「わかりました。それでは」
「それで部屋は」
三人が何処にいるか。話はそこに移った。
「何処ですか？」
「あの部屋です」
廊下を進む、やや駆け足で進みながらだ。医者は自分の横にいる中田に対してすぐ前の右手に見える部屋を指し示して述べた。
「あそこです」
「あの部屋ですね」
「それでは」
「はい、それじゃあ」
こう話してだ。そのうえでだ。
中田は自分でその扉をすぐに開けてだ。部屋に入った。

部屋の中も白くカーテンもベッドも白だった。そしてそこにいる者達も。

三人はそれぞれのベッドの中にいた。その中でだ。

酸素マスクを付けてだ。点滴を受けていた。頭には包帯が巻かれ目を閉じている。そのうえで一言も話さず横たわっているのだった。

中田はその家族達を見てだ。自分の隣に来てくれた医者に尋ねた。その顔は家族を見ている。そうしながらの言葉だった。

「あの」

「はい」

「回復しますよね」

「それは」

医者の今度の返答はよいものではなかった。

沈んだ声でだ。彼に言うのである。

「どうも」

「無理なんですか！？」

「現状を維持するだけでも」

「維持するだけでも」

「かなりの費用が必要ですが」

「手術になると」

「億単位です」

それだけのだ。費用が必要だというのだ。

「それでも宜しいでしょうか」

「億って」

「それだけあれば。回復の為の手術を行えます」

「三人共そんなに酷いんですか」

「正直命が無事で後遺症も見られないだけ奇跡です」

医者は真剣な面持ちで話してきた。

「まさにです」

「そうなんですか」

「あの、それで」

「お金。三人分ですよ」
「はい、それで億単位です」
「それで何億ですか？」
医者に顔を向けてだ。今にも壊れてしまいそうな表情で問うた。
「何億必要なんですか？」
「三億でしょうか」
「三億ですか」
「やはりないですよね」
「とても」
その額を聞いて。予想していたが苦い顔になってだ。
首をしきりに振りだ。そのうえで答える彼だった。
「ありません」
「維持費は」
「そっちはどうなるんですか？」
「これだけで。保険もあって」
中田その維持費の話もするのだった。
「どうでしょうか」
「それ位なら何とかなります」
額と保険のことを聞いてだ。中田は安堵した。本当に最悪の事態はだった。

第零話　炎の覚醒その十七

しかしだ。これではとだ。そのこともわかって医者に答えた。
「ですが。手術費は」
「何となればいいのですが」
医者もだ。心から願う口調だった。
「ですがそれは」
「そうですよね。とても」
「奇跡を願いましょう」
最早だ。それしかないというのだ。
「そうしましょう」
「そうですか」
中田は項垂れるままに話を聞くだけだった。そのうえでだ。
絶望しきって病院を後にする。そのままバイクに乗りだ。彼はあてもなく走った。
目的地も決めずだ。ただただ走った。彼は何かあるとそうして気分転換を図るのだ。しかし今はそうしてもだ。とてもだった。
心が晴れない。全くだ。それであてもなく走り続ける。
その中でだ。彼は呟くのだった。
「どうすればいいんだよ」
家族のことをだ。呟くのだった。
「本当によ。三億なんてよ」
そのことをまた言うのだった。
「稼ぐか？どうして稼ぐんだ？」
何もかもがわからなくなっていた。考えが堂々巡りになっていく。
その堂々巡りの中バイクを進ませだ。夕刻から夜、そして真夜中になった。
真夜中にバイクを進ませ続ける。周りの車は殆んど見えない。灯りだけが闇の中に見える。その灯り達も今は目に入りはしなかった。

その闇の中を絶望の中に進んでいく。その彼の耳にだ。
不意にだ。何かが聞こえてきた。
『欲しいですか？』
「何だ？」
『欲しいですか？』
耳ではなく。頭の、いや心にだ。直接彼に言ってきていた。
『それが』
「金がかよ」
中田はその心に直接尋ねてくる声に問い返した。
「金が欲しいかっていうんだな」
『どうなのですか？』
また問うてきた声だった。
『貴方は』
「欲しいさ」
まさにそうだとだ。彼は即答した。
「三億な」
『そうですか。欲しいのですね』
「けれどそんな金何処にあるんだ？」
そのことをだ。彼は声に言い返した。
「ないだろ。どうしようもないだろ」
『あります』
そうだとだ。声は言ってきた。ここでだ。中田はその声の質に気付いたのだった。
「あんた、女か」
『そうなります』
「そうか、女なんだな」
そのことにだ。今ようやく気付いたのだ。絶望しきっている心がだ。気付くことを遅らせてしまっていた。
「それなら直接話したいんだがな」
『残念ですがそれはできません』

「訳ありかい？そもそも何で姿を見せないんだい？しかも」
『しかも？』
「バイクで走ってる俺にこうして声をかけられる」
その有り得ないことからだ。中田は声に対して言った。
「あんた、何者だよ。若しかして」
何かというのだ。その声の主は。
「人間じゃねえだろ」
「それは」
「何だ？地縛霊とかそんなのか？」
半分冗談混じりにだ。声に言った。
「生憎そういうのはお断りだぜ」
「違います」
しかしだ。声はそうした存在ではないというのだ。
「私はそうした存在ではありません」
「悪霊じゃないのかよ」
「はい、そうではありません」
こう言うのだ。

第零話　炎の覚醒その十八

「それは約束します」
「じゅああんた何者なんだ？」
「確かに霊的な存在です」
「霊的ねえ。精霊か何かか」
「そう考えて頂いていいです」
「わかった。じゃあ精霊って考えてな」
そのうえでだとだ。声に言う彼だった。
「あんたは俺に何か用なのかい？」
「貴方は今お金が欲しいですね」
「さっきも言ったと思うけれどな」
「必要ですね」
「三億な」
それだけの額が必要だということをだ。声に話すのだった。
「それだけ必要なんだよ」
「わかりました。三億ですね」
「出せるかい？三億」
出せる訳がないと思いながら声に問うた。
「それだけの金な。どうだい？」
「若しも貴方がです」
「俺が？」
「これから剣を手にして戦われるならです」
「何だ？殺しでもしろっていうのかよ」
そう考えてだ。中田の顔が曇った。
ヘルメットの中の顔をそうさせてだ。声にこう返した。
「悪いけれどそうしたことはな」
「いえ、殺人ではありません」
「何だよ、じゃあ何なんだよ」

「貴方が望まれるならです」
前置きを強調してだ。そうして言ってきた声だった。
「私は貴方に剣を授けます」
「それで戦えっていうんだな」
「魔獣達と戦い倒し」
「魔獣ねえ。話が洒落にならない方向に進んでるな」
「そして他の剣士達ともです」
「戦って勝てばだな」
「その都度お金が入ります」
そこまで聞いてだ。中田は話をまとめてこう言った。
「成程ね。それで三億ね」
「どうされますか？」
「他の剣士ってのが気になるけれどな」
それでもだとだ。中田は言った。
「魔獣を倒したら金が入るんだな」
「黄金としてですが」
「わかったぜ。じゃあ黄金、金貰うぜ」
「では。剣士になられますね」
「ああ、なるさ」
バイクを運転したまま声に答える。
「そうさせてもらうな」
「わかりました。それでは」
「で、剣だよ」
話が決まったところでだ。中田は早速声に尋ねた。
「剣は何処だよ」
「剣ですか」
「契約成立だろ？じゃあ早速」
「はい、丁度いい具合にです」
どうかとだ。声の具合が変わってきた。
「魔獣が来ました」

「何処だよ。何処に出て来たんだよ」
「前に」
「前？」
「はい、前から来ます」
声はこう言うとだ。実際にだ。
「貴方の前からです」
「前から・・・・・んっ！？」
目をこらすとだ。そこにだ。馬がいた。
しかし只の馬ではない。首がある筈の部分には人間の上半身がある。若い濃い髭の男がだ。首の場所に生えていたのだ。
その姿を見てだ。中田はすぐに言った。
「あれってよ」
「おわかりですね」
「ケンタウロスだよな」
「はい、ケンタウロスです」
「ギリシア神話に出て来るあれかよ」
その姿でわかった。すぐにだ。

第零話　炎の覚醒その十九

そのうえでだ。声に尋ねるのだった。
「あれと戦って勝てばいいんだな」
「黄金が手に入ります」
「わかった。黄金だな」
「では。戦われますね」
「三億の為にな。それでな」
「はい、それで」
「剣は何処だよ」
ここで尋ねたのはまたこのことだった。
「その剣ってのは何処にあるんだよ」
「念じて下さい」
「念じる！？」
「はい、念じて下さい」
こう彼に言うのだ。
「その手に剣があると」
「それでいいんだな」
「はい、そうすればです」
「剣が出てくるんだな」
「今度からそうして頂ければいいですから」
今からではないとだ。こうも話す声だった。
「ですから」
「ああ、わかったぜ」
中田もその言葉に頷く。そうしてだった。
バイクに乗りながらだ。両手をハンドルから放し。そうして。
両手に同じ大きさの日本刀を出した。刃のところにそれぞれ波がある。赤い唾と柄でだ。刀身も赤く輝く。そうした異様な刀だった。
その刀を見てか。声がこう言ってきた。

「その刀が貴方の刀ですか」
「何だ？おかしいか？」
「刀は。貴方がイメージされるものがそのままです」
「出て来るってのか」
「貴方は二本ですか」
「二刀流なんだよ、俺ってな」
笑顔でだ。こう返す中田だった。
「それが俺の剣道のスタイルなんだよ」
「そして力はそれですね」
「力？」
「剣士はただ剣で戦うだけではないのです」
「その力も使うってのか」
「そうです。そして貴方の力は」
「赤いな。ってことは」
どうなのかだ。中田は自分で考えて話した。
「火か？」
「はい、炎です」
声もだ。それだと答えた。
「それが貴方の力になります」
「火ねえ。何か面白いな」
「面白いですか」
「この力であのケンタウロスと戦えばいいんだよな」
「その通りです」
「わかったぜ。じゃあな」
バイクを足だけで操りながらだ。そのうえでだ。
自分に向かい突き進むケンタウロスを見据える。魔獣は。
中田に向かいつつだ。その手にだ。
何かを出してきた。それは槍だった。
手槍をだ。中田に向かって投げてきたのだった。
「槍かよ」

「槍はどうされますか？」
「どうするかこうするかもないからな」
これが中田の答えだった。それでだ。
その左手の剣を一閃させて。そのうえで。
自分に向かって飛んで来る槍を上から両断した。槍は真っ二つになり燃えて消えていった。その闇の中で燃えて消える槍を見てだ。

第零話　炎の覚醒その二十

中田はだ。こう声に言った。
「本当に燃えるんだな」
「炎の力です」
「本当に俺の力なんだな」
「剣と。その力を使ってです」
「戦ってそれでか」
「黄金を手に入れて下さい」
「わかったぜ。それじゃあまずは」
ケンタウロスは今度は槍を構えてきた。それで彼を突き殺すつもりなのは明らかだった。その距離は最早至近にまで迫っていた。
槍も刀も互いに攻撃できる距離だった。それを見てだ。
中田は声に言うまでもなくだ。すぐに己の両手の刀を振った。
その動きは速い。まさに稲妻の如きだった。その速さでだ。
ケンタウロスを狙う。魔獣もだ、
その槍で突こうとする。忽ち打ち合いになる。
バイクも足も止まりだ。それぞれ何合も何合も重ねる。その中でだ。
中田は右手の刀から突きを出した。それは。
ケンタウロスの喉を貫いた。それで終わりだった。
魔獣は動きを止め忽ちのうちに刀から出る炎に包まれだ。燃えて消え去った。
そしてその消え去った後には何枚かの黄金の棒が残った。中田はそれを見て声に尋ねた。
「それでこれをだな」
「はい、そうです」
「売って。そうしていって」
「お金にして下さい」

「少し回りくどいけれどいいか」
中田はその手順はもう構わないとした。
「金が手に入るんだからな」
「それで三億ですよね」
「ついでに生活費もだな」
「生活費？」
「今気付いたんだよ。親父は会社員でお袋はパートに出てるんだよ」
今日の平均的な家庭であると言える。むしろいい方かも知れない。
「その二人も今入院してるんだよ」
「それでお金が必要ですから」
「俺の生活費はどうなるんだ？」
働いているその二人がいなければどうかというのだ。
「アルバイトをしてもいいけれどな」
「ではそこでお金をですか」
「ああ、戦って手に入れるさ」
そうしてだ。生活費もだというのだ。
「そうすればいいよな」
「それじゃあですね」
「金ってのはとにかく必要だからな」
「では」
「その分も稼がせてもらうさ」
彼は言った。
「充分にな」
「そうされますか」
「ああ。それでな」
「はい。一体何でしょうか」
「こうして魔獣を倒していけば金が手に入るんだな」
「倒せば倒すだけです」
そうだとだ。声も答える。
「そうなります」

「そうか。話通りだな」
「そして剣士を倒せば」
「金がもっと入るんだな」
「魔獣の比ではありません」
そこまでだというのだ。
「かなりのものになります。それにです」
「それに？」
「魔獣もそうですが」
こう前置きしてだった。中田に話すことは。
「剣士を倒せばそれだけ貴方も強くなります」
「剣士の強さをそのまま取り込むってことか」
「そうです。魔獣についてもです」
「倒せば倒すだけ。強くなるのか」
「その通りです。剣士は特にそうしたものが大きいのです」
「強く、ねえ」
その強さという言葉にもだ。中田は反応を見せた。

第零話　炎の覚醒その二十一

そのうえでだ。彼はこんなことも言った。
「まあそれもいいな」
「強くなりたいですか」
「だってあれだろ？戦えばな」
「はい、戦えば」
「それでけ強くなって」
そのうえでだというのだ。中田は強さだけを見てはいなかった。強くなりどうするか。中田が今声に対して言うのはこのことについてだった。
「より強い魔獣や剣士を倒せば余計にな」
「多くの黄金や糧を得られます」
「じゃあそれでいいさ」
笑顔で応えて言う中田だった。
「強くなってみせるさ」
「そう仰いますか」
「ああ、この言葉は撤回しないぜ」
笑顔で言いだ。そのうえでだ。
中田は黄金を拾いだ。それ等を全て己の懐に入れた。
そうしたうえで。声に対して再び尋ねた。
「今のところこれで終わりだよな」
「はい、終わりです」
その通りだと答える声だった。
「もう魔獣はいません」
「そうか。それじゃあな」
「休まれますか」
「家に帰ってな」
そのうえでだというのだ。

「そうさせてもらうぜ」
「わかりました。それでは」
こうしてだった。彼は剣士となったのだった。そうしてだ。
魔獣を倒していく。そして他の剣士達とだった。
「それでだよ」
「何でしょうか」
声は何時でも彼と共にいた。そうして彼の問いに答えるのだった。
「俺の他の剣士な」
「彼等ですね」
「そいつ等は出て来るんだよな」
「今もそれぞれです」
「魔獣と闘ってるんだな」
「貴方と同じです」
そのだ。中田とだというのだ。
「貴方を含めて十三人です」
「十三人!?俺も入れてか」
「はい、十三人です」
それだけだというのだ。
「その十三人の剣士達がです」
「闘ってそれでか」
「最後の一人になれば」
「どうなるんだ?一人になれば」
「究極の力が手に入ります」
「究極のって何だよ」
「勝てばわかります」
そうすればだというのだ。
「最後まで勝てば」
「何かわからないけれど俺はな」
彼はどうするか。それはもう決まっていることだった。
「三億の為にな」

「闘われますね」
「ああ、決めた」
そうだとだ。二本の刀を手にして言った。
「家族の為に闘うんだよ」
「わかりました。では頑張って下さい」
「三億。一回の戦いで百万辺りでな」
「大体三百回ですね」
「洒落にならない位闘わないといけないか」
「ただ剣士一人で一億かと」
それだけの黄金が入るというのだ。
「それだけの黄金が入りますので」
「わかったぜ。一億だな」
「そうです。剣士同士の闘いはそれだけの価値があるものです」
「価値！？」
「・・・・・・・・・」
価値という言葉についてはだ。声は急に沈黙したのだった。
中田もそれが気になったがだ。それでもだった。
言わないのなら聞かなかった。それが彼のやり方だった。
それでだ。こう声に言うのだった。
「とにかくな」
「はい、とにかくですね」
「戦って勝てばいいんだな」
あえて単純に言ってのことだった。
「そうすればいいんだな」
「そうです。頑張って下さい」
「戦うしかないからな」
中田の表情は明るい。しかしだった。
その明るさに強い決意も含ませてだ。そのうえでだった。
「じゃあ。やらせてもらうぜ」
「はい、それじゃあ」

これが全てのはじまりだった。彼は戦いの中に入った。そしてそれはだ。彼の運命を大きく動かしていく。だが彼は今はそのことは知らなかった。

第零話　　完

２０１１・６・２３

第一話　水の少年その一

久遠の神話
第一話　水の少年

八条学園高等部。そこの剣道部でだ。
道場の中で部員達がだ。こんな話をしていた。
「何かだいがくにな」
「ああ、そうらしいな」
「何か凄く強い人いるってな」
「そうらしいな」
こうだ。彼等は休憩時間に落ち着いた顔で話をしていた。
「洒落にならない位強くてな」
「しかも二刀流で？」
「バケモノみたいに速いらしいな」
「そんなのいるからな」
こうした話をしていてだ。そこにだ。
一人の少年が来て言うのだった。
背は一七六程で伸ばしたスポーツ刈りの様な髪型をしている。目は優しい感じで二重のものだ。口は一文字でしっかりとしている。顔は全体的に四角い感じだがエラは張ってはいない。
その彼がだ。仲間達の話を聞いて言ってきた。
「そんな人が大学にいるんだ」
「ああ、とにかく尋常な強さじゃないってさ」
「全国大会に出てもぶっちぎりの感じで」
「だからバケモノみたいなな」
「そんな強さだってさ」
「ふうん、そんな人がいるんだ」
紺色の袴の上に防具を着けながらだ。彼は仲間達に応える。
「一度見てみたいな。うちの学園だし」

「ああ、じゃあ今度行くか？」
「大学の方に入ってな」
「それで見てみるか」
「どんな人なのか」
「名前何ていうの？」
少年はその大学の剣豪の名前を尋ねた・
「何ていうのかな、それで」
「ええと、名前は？」
「名前は何ていったかな」
「ちょっと。わからないよな」
「だよな」
名前になるとだ。彼等は口のごもってしまう。だがその中でだ。
一人がだ。この名前を出してきた。
「そうそう、確か」
「確か？」
「その人の名前だよな」
「何ていうんだ、それで」
「上城大樹だったな」
この名前を出すのだった。
「そうだったよ」
「それ絶対違うから」
少年がすぐに突っ込みを入れた。
「だってそれって」
「ああ、わかったか」
「僕の名前じゃない」
こうだ。その名前を出した仲間に口を尖らせて言うのである。その尖らせた様子がどうにも啄木鳥の様にも見える。特に横から見ると。
「だから絶対に違うよ」
「同姓同名とかさ」

「それでもいるかな」
「ひょっとしたらあるだろ」
その友人は笑顔で話していく。
「若しかしたらな」
「そんな筈ないから」
彼はその可能性を完全に否定する。
「全く。何を言うかって思ったら」
「まあ名前のことは置いておいてな」
彼はそのことは棚に上げてだ。それでまた言うのだった。
「その人のことは本当だからさ」
「大学にいる人が強いってことだね」
「ああ、圧倒的だからな」
そこまでだというのだ。
「聞いた話によるとな」
「ううん、本当に一度見てみたいな」
彼、上城は仲間達の話を聞いてまたこう言った。

第一話　水の少年その二

「どれだけ強いのかな」
「気とか使ったりしてな」
「竹刀から衝撃波出すとか」
「ゲームみたいな技出してな」
「そんなことできるかもな」
「そんな筈ないじゃない」
上城は流石にそれはないと笑って返した。
「幾ら何でも」
「だから冗談だよ」
「そんなのできる訳ねえだろ」
その彼にだ。周りは笑って話す。
「全く。上城ってな」
「そういうところが真面目なんだよな」
「冗談だったの」
そう言われてだ。彼は憮然としながらも頷くのだった。
「それならそうと言ってくれたらいいのに」
「そんなのわからないか？」
「すぐにわかるだろ」
周囲はその彼に怪訝な顔になって言う。
「だから。御前はちょっとな」
「真面目過ぎるんだよ」
「真面目で駄目っていうのかな」
上城は今度はこう周りに問い返した。
「そう言うのかな」
「まあそれはさ」
「何ていうか」
「悪くはないさ」

「そう、特にな」
周りもだ。その彼にこう答えはした。
「ただな。一年のほら」
「斉宮みたいにな」
「冗談がちょっとわからないとな」
「しんどくないか？」
「別に。冗談がわからないかも知れないけれど」
だがそれでもだというのだ。
「特に困ったことはなかったし」
「じゃあ別にいいのか」
「そう言うんだな」
「うん、僕はそう思うけれど」
そのだ。彼自身はだというのだ。
「特にね。とにかく大学にだよね」
「ああ、その凄い人がな」
「いるからな」
「じゃあ。一度見てみたいな」
あらためてこう言う彼だった。
「一体どんな人なのか」
「そうだよな。本当にな」
「どんな凄い人なのか」
「見に行くか、今度な」
こうした話をしてだった。彼等は。
土曜日の部活の後で八条大学、高等部の隣にあるそのキャンパスに入りだ。そのうえで大学に剣道場に向かうのだった。
そこは高等部のものよりもさらに大きな道場だった。建てられてから随分と経っているらしく黒い瓦に年季が見られる。そしてだ。
白い壁にも古さが見られだ。そのうえ。
中もだった。床も踏むと音がしそうだ。奇麗に掃除されているがそれでもだ。年季が見られるのは事実だった。

その年季のある道場の中にだ。彼がいた。
相手を片っ端から倒す二刀流の面の男、それでもうわかった。彼こそがだとだ。
「あの人だよな」
「ああ、間違いないな」
「あの人だな」
「二刀流の人あの人だけだしな」
それでだ。わかるというのだ。
その強さを見るとだ。これが。
「本当に強いな」
「どんな人でも適わないじゃないか」
「噂通りっていうか」
「噂以上だよな」
上城達は口々に話す。その彼を見て。
そしてそのうえで彼の垂れにある名前を見る。それは。

第一話　水の少年その三

「中田さんっていうんだ」
「ふうん、それがあの人の名前か」
「そうなんだな」
このことをはじめて知ったのだった。
「あの人がな」
「そうなんだな」
「噂の二刀流の人なんだな」
「中田さんね」
上城もだ。彼の名前を呟く。そのうえでその名と強さを心に刻む。
これは無意識だがそうしてだ。蛍光灯、これだけは付け替えたのか新しいその灯りの中で照らされている彼の稽古を見てそうしたのだ。
そうしながらだ。彼はこう周りに話した。
「あの人ってさ」
「ああ、強いよな」
「本当に」
「バケモノみたいっていうか」
バケモノという言葉を訂正して。こう言うのだった。
「鬼みたいだね」
「それじゃあ意味同じじゃないのか？」
「バケモノと鬼だとな」
「似たようなものだろ」
「多分違うと思う」
だがだ。彼はこう友人達に話すのだった。
「それはね」
「じゃあ鬼か」
「あの人は鬼か」

「そうなのか？」
「そんな感じがするけれど」
今も稽古を、しかも休みなくする彼を見ての言葉だ。
「僕の気のせいかな」
「そうじゃねえのか？」
「幾ら何でもそこまでいかないだろ」
「鬼っておい」
「しかも言い過ぎだろ」
「そうだね。悪いよね」
言ってからだ。そのことに気付いた彼だった。
そして申し訳なくだ。こう言うのだった。
「じゃあ。言わないから」
「っていうか鬼なあ」
「そんだけ強いって意味だよな」
「そうだよな」
友人達は上城の言葉についてあらためて考えて述べもした。
「確かに桁外れの強さだよな」
「あんだけ強いと全国大会もいけるだろうな」
「前からあんなに強かったのか？」
その彼等も今見ているその圧倒的な強さ、まるで野獣の如き強さを見てだ。彼等もこう考えていった。
「っていうかあの強さそうそうすぐになるか？」
「戦い方も何かな」
「襲い掛かって切り捨てるみたいなな」
「そんなのだけれどな」
「すぐにああなるのかね」
「相当な修羅場積んでないか？」
一人がこんなことを言った。
「さもないとあそこまでなれないだろ」
「そうだよな。ちょっとやそっとじゃな」

「なれないよな」
「ああ、あいつね」
その彼等にだ。大学の剣道部員が言ってきたのだった。防具を着けたままだがそれでもだ。彼等に対してこう言うのだった。
「最近急にだよ」
「急になんですか」
「強くなったんですか」
「そうなんですか」
「いや、前からかなり強かったよ」
それは事実だというのだ。

第一話　水の少年その四

「前から強いことは強かったんだよ」
「けれどそれでもなんですね」
「最近になってですか」
「滅茶苦茶強くなったんですか」
「そうだったんですか」
「そう。まあ性格はそのままだけれど」
性格はそのままだというのだ。だが強さは変わったというのだ。
中田は今もだった。一気に前に出てだ。
屈み相手の胴を切り抜いたのだった。
それで一本だった。その一本を見てだ。
上城は唸る様にして言った。
「速いし凄い威力だね」
「切り抜いたって感じだけれど」
「真剣だったら真っ二つだよな」
「そんな勢いだよな、あの銅は」
「普通の剣道じゃないだろ」
「そう思うだろ」
実際にそうだろうとだ。大学の部員も話す。
「今あいつと戦えるのはな」
「いないですか？」
「大学にも」
「いないね」
まさにだ。そうだというのだ。
「あれだけの強さの人間は」
「けれど何か」
どうかとだ。上城が言った。
「餓えてるみたいですね」

「餓えてる？」
「そんな感じがします」
こうその大学生に話すのだった。
「僕の気のせいでしょうか」
「餓えてるね。そういえばそうかな」
「やっぱりそう思いますか？」
「言われてみればね」
彼にしてもそれで気付いたというのである。
「そんな感じだね。今までは素早いだけだったけれどがむしゃらになって」
「そのがむしゃらな闘い方がですか」
「どうしてああなったのか気になるね」
大学生にしてもだ。そうだというのだ。
「俺達にしても」
「そうですか。やっぱり」
「うん。本当に急にああなったんだよ」
強くなったというのだ。獣めいた強さにだ。
「ただ。あれで性格は」
「前と同じですか」
「うん、同じだよ」
そうだというのだ。とにかく性格は変わらないというのだ。
「あれで明るくて飄々とした奴でさ」
「明るいんですか」
「うん、明るくていい奴だよ」
中田のその性格についても話されていく。性格的にはそうした人間だというのだ。ただ変わったのは剣道の強さだというのである。
「ああした闘い方だけれどね」
「防具着けたら性格変わる？」
「そういう人もいるよな」
「ああ、いるいる」

「中には屑になる奴もいるしな」
高校生達はここでこんな話をする。残念なことに剣道をしているからといって人間性までよくなるとは決して言えないのだ。中には、とりわけ学校の教師が剣道をする場合は精神の鍛錬が伴っていない輩が多い。教師にそうした輩が多いのは日教組の問題であろうか。
「世の中色々な奴いるからな」
「屑も多いよな」
「剣道する資格がないようなな」
「そんな奴が」
「ああ、この前そういうの来たよ」
ここで大学生がまた彼等に話す。
「中学生の子供達がここに来たんだよ」
「見学ですか？」
「それでなんですか？」
「いや、稽古で」
それで来たというのである。
「それはよかったんだけれどね」
「問題があったんですか」
「多分。その引率の教師に」
「ああ、大学生相手だし初心者の子もいたけれど」
それでもだというのだ。

第一話　水の少年その五

「俺達の目の前でその子が動きが悪いって言ってひっぱたいたんだよ」
「えっ、動きが悪いってだけでなんですか」
「生徒をひっぱたいたんですか？」
「それってちょっと」
「しかも膝で蹴ったりして」
尚且つだった。暴力をさらに振るったというのだ。
「俺達も見てびっくりしたよ」
「いや、普通そんな教師いないでしょ」
「その教師頭おかしいですよ」
「流石学校の教師ですね」
一人がこんなことを言う。彼にとっては学校の教師という人種は問題を起こすものらしい。残念だがその割合が多いかも知れない。
「そんなことするなんて」
「っていうか無茶でしょ」
「そう。しかも合同稽古で中学生、自分が教えている生徒にね」
「その生徒に？」
「今度は何したんですか」
「突きを入れてたんだよ」
それを聞いてだ。上城達は唖然となった。何故ならだ。
「あの、中学生に突きって」
「まだ身体のできてない子にですか？」
「それって滅茶苦茶危ないですよ」
「っていうかそれ常識なんじゃ」
柔道の締め技等もそうだが何故剣道で中学生に突きが禁止されているのか。まだ身体が出来上がっていない相手にそれはあまりにも危険だからだ。

しかしその教師はだ。平然としてそうしたというのだ。
「そんな常識ないのが教師ですか」
「まあ。教師らしいっていえばらしいですけれど」
「それはかなり」
「酷いんじゃ」
「そう、しかもシャベル突きっていってね」
突きの問題はまだ続いていた。今度は。
「下から上に思い切り突き上げる技があるんだけれど」
「そんな技試合で使ったら反則ですよね」
「即刻退場ですよね」
「教師が生徒に使う技じゃなくてそれって」
「リンチ技ですよね」
「そう、それも使ってね」
そうした外道と言ってもいい技をだ。生徒に平然として使ったというのだ。
「俺達にも使ったけれどね」
「稽古でそんな技使うって」
「その教師って何なんですか？」
「ヤクザじゃないですね」
「今時ヤクザでもしないだろうね」
大学生も顔を顰めさせて言う。
「そんなことはね」
「そんな教師がここに来てですか」
「稽古してたんですか」
「あんまり酷いんで俺達も怒って」
それでだと。大学生は話を進めてきた。
「言おうとしたらね」
ここで親指でだ。大学生から見て背中にいる中田を指し示す。上城達に話している為彼に対して背中を向ける形になっているのだ。
そのうえでだ。こう彼等に話すのだった。

「あいつが出て来てね」
「それでどうしたんですか？」
「まさかその教師を」
「そう、叩きのめしたんだ」
そうしたというのだ。その異常な教師をだ。
「もうね。完膚なきまでね」
「何か格好いいですね、それって」
「悪者を成敗した感じで」
「うん、中学生の子供達も喜んでいたよ」
つまりそれだけその教師は生徒達に評判が悪く人望がなかったというのだ。人は圧倒的な暴力の前には無抵抗になる。しかしだからといって反抗の気持ちは完全に抑えられないものだ。それは何時か何らかの形で刃となりその暴力を振るう者を八つ裂きにするものだ。
「よくやってくれたって感じでね」
「その教師まんま悪役ですね」
「ドラマに出て来る屑みたいですね」
「剣道四段って言ってたけれど」
段がそれでもだというのだ。

第一話　水の少年その六

「あいつの方が圧倒的に強かったし。そもそも心の鍛錬はできていなかったから」
「つまり段で強さって決まらないんですね」
「そうなんですね」
「あいつは八段以上の実力があるね」
中田を見て話すのだった。
「今はね」
「八段以上って」
「洒落にならない強さですよね」
「そこまでの実力って」
「うん。とにかく強いから」
また上城達に話すのだった。
「あいつとは稽古をしてもね」
「いいんですね」
「そうしても」
「するといいよ。高等部の先生はできた人だし」
少なくともだ。その中学の教師とは全く違うというのだ。
「こっちからも話をしようか？」
「あっ、じゃあ御願いします」
「そうしてくれるんなら」
彼等にしてもだ。その話は願ってもないことだった。強い相手と稽古ができるということはだ。それだけ得られるものが多いからだ。
それでだ。上城も言うのだった。
「じゃあ中田さんとも」
「ああ、じゃあ稽古してくれよ」
「はい、わかりました」
「それじゃあ」

他の面々も頷きだ。こうしてだった。
上城達は中田の稽古を見てだ。その帰りにだ。
上城の前にだ。肥満したパーマの男が出て来た。
鋭いというよりか剣呑な目をしており荒んだ表情をしている。肌は黒く顔も膨れている。みすぼらしい服に右手には竹刀を持っている。
その彼がだ。上城に対して言うのである。
「おい、そこの御前」
「僕ですか？」
「そうだよ。御前だよ」
まるで因縁をつかるかの様な口調である。
「御前何でここにいるんだ」
「何でって通学路だからですけれど」
「通学路だからいるのか」
「はい、そうです」
その通りだと答える彼だった。
「それが何か」
「御前、剣道やってるな」
彼が背負っている竹刀袋を見ての言葉だった。
「そうだな」
「ええ、まあ」
「何段だ」
「二段です」
「俺は四段だ」
男は自分から言ってきた。己の段をだ。
「俺は強いんだ」
「四段でしたらやっぱり」
「何でその俺が負けたんだ」
見れば表情がおかしい。どうやら酔っているらしい。
言葉にもろれつが回っていない。その彼が言うのである。

「あんな若僧に」
「あの、どうされたんですか？」
「俺は偉いんだぞ」
男は今度はこんなことを言ってきた。
「先生様だ。先生様なんだぞ」
「学校の先生なんですね」
「ああ、そうだ」
その通りだとだ。ふらつく足で名乗るのである。
「そうなんだよ」
「そうですか。先生なんですか」
「糞っ、何で俺をクビにしたんだ」
問われてもいないのにだ。こんなことも言う男だった。
「教育委員会の連中はよ」
「クビって」
「生徒を殴って何が悪い」
どうやら暴力肯定主義者の様だ。その喋り方からわかる。
「駄目な生徒を殴って何が悪い」
「あの、それは」
「五月蝿い。反論するな」
酔った血走った目での言葉だった。

第一話　水の少年その七

「御前なんかがな」
「けれど暴力は」
「教師はな、偉いんだぞ」
まだこんなことを言う男だった。
「その俺が何してもいいだろうが」
「だから暴力を振るわれたんですか？」
「そうだよ。悪いかよ」
男は言いながらだ。上城に近付いてくる。それを見てだ。
上城は身の危険を感じた。それで身構える。
しかしここでだ。彼の後ろからだ。
声がしてきたのだった。その声は。
「おいおい、今度は通り魔かい？それとも絡んでるのかい？」
「手前は」
「あんた、本当に屑だね」
その大学の剣道部で圧倒的な強さを見せていた。男がだ。上城の後ろから出て来たのだ。上城は彼の姿を見て教えてもらった名前を口にした。
「確か」
「ああ、中田っていうんだ」
彼の方から名乗ってきた。
「有名人みたいだから覚えてくれよ」
「はあ」
「で、あんたは下がっておいてくれ」
こう上城に言うのである。
「ここは俺がやるからな」
「貴方がですか」
「この太ったおっさんはな」

その目の前の濁った男を指差して言うのである。
「人間の屑なんだよ」
「人間の屑って」
「社会に不要なダニとも言おうか？」
中田は男を見ながら言うのだった。
「部活で聞いてただろ。ほら、あの」
「あの生徒に暴力を振るってたっていう」
「その暴力教師だよ。元な」
「元ってつまりは」
「俺に叩きのめされてそれでな」
それでだというのだ。さらにだ。
「今までの悪事がばれて懲戒免職になったんだよ」
「そういう人なんですね」
「で、今は落ちぶれてな」
「こんな風になってるんですか」
「まあよくいる社会不適格者さ」
学校の教師には多い。悲しいことに。
「そういう奴なんだよ」
「そうなんですか」
「ああ。それでな」
それでだとだ。中田は上城にあらためて話す。
「多分八つ当たりで誰彼なく殴りに出てたんだな」
「誰彼なくって」
「その竹刀が何よりの証拠さ」
そのだ。竹刀がだというのだ。
「この屑にとっちゃ竹刀ってのは人を殴る為のものでしかないんだよ」
「それって」
それを聞いてだ。上城もだ。
眉を顰めさせてだ。こう言うのだった。

「間違ってますよ」
「あんたはそれがわかってるんだな」
「剣道は己を律するものですから」
その真面目な考えをだ。彼は中田にも話した。
「そんなの間違ってますよ」
「そうだよ。それはな」
「はい、剣道をする資格がありません」
毅然としてだ。上城は言い切った。
「人間として最低です」
「というか最低って言葉もまだ甘いけれどな」
「そこまで酷い人なんですか」
「だから俺も叩きのめしたんだよ」
その元教師を見据えながらの言葉だった。

第一話　水の少年その八

「あんまり酷いからな」
「その御前のせいだ」
怒った声でだ。彼は言うのであった。
「御前のせいで俺はクビになったんだよ」
「俺のせいでかい？」
「そうだよ。御前のせいだ」
完全にだ。他人のせいにする言葉だった。
「御前が俺のことを教育委員会にちくったんだな」
「全部調べてそこと警察にも通報してやったぜ」
「だからだ。俺は生徒の親から刑事告訴も受けてるんだ」
「ああ、じゃあ近く刑務所だな」
「ＰＴＡにも叩かれてクビにもなって」
「で、臭い飯か。栄転だな」
「全部御前のせいだ。御前のせいでこうなったんだ」
まだ言う元教師だった。中田に対して喚きたてる。
「俺の人生どうするんだ。どうしてくれるんだ」
「その台詞あんたの生徒達に言うんだな」
中田はあえて冷たくだ。元教師に言うのだった。
「あんたに虐待されていた生徒達にね」
「あいつ等が何だっていうんだ」
「あんたの生徒だろう？」
「生徒は俺の為にあるんだ。俺が部活を強くしてだ」
それでだとだ。完全にエゴで言う。
「それで俺が評価を高めて偉くなる為に必要なんだよ」
「あの、それは」
上城もだ。傍で聞いていてだ。
呆れてだ。その元教師に言うのだった。

「あんまりじゃないんですか？」
「何が言いたいんだ」
「生徒を育てるのが教師ですよね」
その常識から元教師に問うた。怪訝な顔で。
「偉くなるために利用するって」
「生徒なんてな。教師の為にあるんだよ」
まだ言うのだった。
「あいつ等を強くさせたら俺の評価があがるんだよ」
「だからそれは」
「五月蝿い！俺の生徒だ！」
まだ言うのであった。
「俺が何しようと勝手だろ！」
「貴方という人は！」
「はい、ストップな」
激昂する上城にだ。中田が言ってきた。
「これ以上話しても無駄だよ」
「無駄って」
「世の中こう言う奴もいるんだよ」
笑いながらもだ。元教師を見据えての言葉だった。
「どうしようもない屑がな」
「けれど。これじゃあ」
「どっちみちこいつは破滅さ」
懲戒免職、そして刑事告訴だ。そうなるのは明らかだった。
こう言ってだ。中田は。
元教師にだ。こうも言った。
「あんた、もう消えろ」
「何っ！？」
「大人しく裁判を受けて臭い飯食ってろ」
これが元教師への言葉だった。
「それが一番助かる道だ」

「俺が刑務所に入るっていうのかよ」
「そうだよ、刑事告訴されて検察が受理してな」
しかもだった。さらにだ。
「証拠も次から次に出てるんだ。それで刑務所に入らない筈ないだろ」
「俺は教師だぞ」
「元な」
「何で教育で捕まるんだよ」
「まともな教育者が刑事告訴なんかされるか」
中田は醒めた調子で元教師に告げる。
「そうじゃないのかよ」
「御前まだ言うのか」
「何度も言うさ。さっさと刑務所に入れ」
中田の言葉は変わらない。

第一話　水の少年その九

「それで罪を償え」
「元はといえば御前のせいだ」
元教師は中田に竹刀を突きづけてきた。間合いはかなり離れているがそれでもだ。
「御前が俺を任せて通報したからな」
「犯罪者を通報するのは市民の義務なんだけれどな」
「だから俺は教師だ。あれは教育だ」
「まだ言うのかね。誰もそうは思わなかっただろ」
どういった通報か。中田はそのことも話した。
「俺と一緒に部員も顧問の先生も全員通報したよな」
「うう・・・・・・」
「その悪い頭でもいい加減に理解しろよ」
今度はこんなことを言う中田だった。
「あんたもう終わりなんだよ。終わりは奇麗にしろよ」
「くっ・・・・・・」
「わかったら消えろ」
最後通告だった。
「それで二度と人前に出るな」
「まだ言うのか」
「もう言いたくないな。あんたの汚い顔は見たくないからな」
「俺をまだ侮辱するのか」
「侮辱じゃなく事実を言ってるんだよ」
それだというのだ。
「わかったな。じゃあ消えろ」
「手前！」
元教師は彼の言葉に激昂してだ。竹刀で襲い掛かった。それを見てだ。

中田は両手に何かを出した。それで。
一気に踏み込んでだ。一瞬のうちに無数の攻撃を打ち込んだ。
それが終わり元教師の後ろに出てだ。言うのだった。
「馬鹿は死んでも治らないんだな」
「うっ、俺がまた」
「あのな、剣道ってのは暴力じゃないんだよ」
その両手のものを何処かにしまってからだ。己の後ろにいる教師を横目で見て言った。
「剣を使うんだよ。そういうものなんだよ」
「まだ言うのか」
「あんた、両手両足の腱も靭帯も切っておいたからな」
それでだというのだ。
「それも強くな。完治しても一生竹刀も握れないし生徒を殴ることも蹴ることもできないからな」
「糞っ、じゃあ俺は」
「もう何の力もない。只の下種豚だよ」
そうした無様な存在に過ぎないというのだ。
「まあ。諦めて罪を償うんだな」
「くっ・・・・・・」
「今日のことも警察に通報するからな」
中田はこのことを言うのも忘れない。
「精々罪を償ってくれよ」
「おのれ・・・・・・」
こうしてだった。元教師は無様に崩れ落ちてだ。この話は終わった。
上城はそこまで見てだ。中田に尋ねたのだった。
「あの」
「ああ、こいつはもう完全に終わりだからな」
その暴力教師じゃなくて」
彼のことではなかった。もうそんなつまらない人間はどうでもい

いというのだ。
代わりに中田にだ。こう尋ねたのである。
「今さっきですけれど」
「さっき？」
「何使われたんですか？」
戸惑う顔で中田に尋ねるのだった。
「両手に持たれていましたけれど」
「ああ、あれな」
「はい、何だったんですか？」
「これだよ」
笑ってだ。出してきたのは。
二振りの日本刀だった。どちらも同じ大きさだ。
その赤く輝く刀を見せてだ。上城に話すのである。
「これな」
「何時の間に」
「背中に背負ってるんだよ」
これは誤魔化しの言葉だ。しかしそれでも上城は今の言葉は信じた。話があまり急なので細かいところまで考えが及ばなかったのだ。

第一話　水の少年その十

「そうしてるんだよ」
「刀ですか」
「許可も得てるさ」
これは嘘だが。やはり上城は気付かない。
「ちゃんとな」
「だったらいいんですけれど」
「ついでに言えばミネ打ちだからな」
「死ぬとかもないんですね」
「斬ったら流石にやばいだろ」
笑ってそれはないというのだ。
「殺したらな」
「それはそうですけれどね」
「だからそれはしないさ」
「再起不能にしただけなんですね」
「そういうことだ。まあ手を出してきたのは向こうだ」
「ですね。それは」
誰がどう見てもだた。それは。
「この人が先に」
「それならいいさ。一件落着だ」
「ええ。ただ」
「ただ？」
「中田さんでしたよね」
上城は彼のその名を確めたのだ。
「そうですよね」
「ああ、そうだけれどな」
「お話は聞いてましたけれど」
「何だ？俺がもてるってか？」

「いえ、そうした話は聞いたことないです」
上城は素直だ。だからこう答えたのだった。
「強いってことです」
「ああ、そのことか」
「本当に。こんなでかい人を倒すなんて」
「こいつの強さは薄っぺらいからな」
「薄っぺらい？」
「ああ、弱い者いじめの為の力だからな」
それでだ。薄っぺらいというのである。
「そんな奴の強さはな」
「薄っぺらいんですか」
「力ってのはそういうのに使うんじゃないんだよ」
「じゃあ何の為に」
「目的の為だよ」
その為だとだ。中田は上城に話す。
「目的の為にあって使うものなんだよ」
「目的？」
「ああ、目的だよ」
また上城に言う彼だった。
「それぞれの目的の為にな」
「あの、それって」
「ああ、わからないならいいさ」
中田は上城の疑問の言葉には笑って返した。
「それならな。あんたは関係ないしな」
「関係ないって」
「そうさ。関係ないからな」
屈託のない笑顔でだ。中田は上城に言うのである。
「俺の話さ」
「中田さんの」
「さて、じゃあ俺はこれでな」

「帰られるんですね」
「俺の家にな。帰って飲むつもりさ」
「お酒ですね」
「酒好きなんだよ」
笑顔でだ。彼は酒の話もした。
「酒なら何でもいけるぜ」
「お酒なら僕も」
上城も飲んだりする。好きな方だ。
「飲みますけれど」
「じゃあ今度一緒に飲むか？」
中田は気さくな調子で上城を誘いもした。
「いい店知ってるぜ」
「あそこですか？スタープラチナ」
「あのカラオケ店だな」
「それか白鯨か」
上城はこの店の名前も出した。彼等が今いる八条町にある居酒屋だ。スタープラチナと同じビルにあり同じ家が経営している店なのだ。

第一話　水の少年その十一

そこでだ。どうかというのだ。
「そこはどうですか？」
「ああ、どっちも行くぜ」
「やっぱりそうなんですか」
「まあ。機会があればな」
一度飲むというのだ。
「そうしような」
「ええ、機会があれば」
「ただ。今はな」
今はどうするかというと。それは。
「一人で飲みたい気分だからな」
「それでなんですね」
「ああ、これでお別れだよ」
そうだといってだ。そうして。
中田は上城に背を向けてだ。最後に言った。
「じゃあな」
「はい、さようなら」
「またな」
こう挨拶をしてだ。それでだった。
彼等は別れた。中田は夜の道の中に消え上城も自分の家に戻った。
家に帰るとだ。すぐにだった。
彼の母親、小柄でまだ若さの残る顔立ちの彼女がだ。彼にこう言ってきたのだ。
「あれ、今日は遅かったわね」
「ちょっと人とお話してたんだ」
「人って？」
「大学の人と」

中田のことをだ。ありのまま話すのだった。
「少しね」
「それで遅かったの」
「うん、僕と一緒で剣道をしてる人で」
母にこのことも話す。話をしながら制服姿でテーブルに座る。だがそこにはまだ料理は来ていない。母が冷蔵庫から出そうとしているところだった。
それを見ながらだ。彼は話すのだった。
「凄く強い人だったんだ」
「そんなに？」
「うん、もう鬼みたいなね」
そこまでだと。母には鬼だと話す。
「滅茶苦茶強いんだ」
「鬼なの」
「そう、鬼」
こう話すのである。
「とんでもない位にね」
「じゃああんたよりもね」
「僕なんか全然だよ」
「比べ物にならないの」
「そう、あんなに強い人いないかもね」
ここまで言うのだった。
「いや、本当に」
「じゃああんたはね」
「僕は？」
「その人みたいになりたいのね」
母は微笑んで我が子にこう尋ねた。
「そう思ってるのね」
「そうだね。言われてみればね」
「そうよね。だから言うのよね」

「あんな強い人になれるかな」
「なれるでしょ。努力すれば」
「努力すればだね」
「そう、なれるわよ」
また我が子に言う母だった。
「けれどあんたも」
「僕も？」
「二段だし。段位の話じゃないけれど」
「強いっていうんだね」
「高校生では強い方でしょ」
剣道部ではレギュラーだ。八条学園高等部の剣道部は県内有数の強豪でもある。従って彼の強さもかなりのものなのである。
だが、だ。上城はこう母に言うのであった。
「僕なんかとてもだよ」
「そんなに凄いの」
「僕は高校生でその人は大学生で」
年齢のことも話すのだった。学生の頃はその強さに年齢が大きく関係する。熟練だけでなく体格や運動能力の違いが出てである。

第一話　水の少年その十二

「それにその人の強さはね」
「鬼なのね」
「本当に八段の強さはあるね」
あの元教師を一瞬で成敗したことを見てだ。それで話すのだった。
「そこまでね」
「八段？大学生で？」
「それだけの強さはあるね」
「そうなの。じゃあ全国クラスね」
「それ超えてるんじゃないかな」
全国クラスどころではない。それまでの強さだと母に話す。
「鬼だから」
「鬼ね、ここでも」
「そう、鬼神だから」
そうだとも話す彼だった。その話を聞きながらだ。
母はだ。我が子に優しい声でこう言ってきた。
「それじゃあね」
「それじゃあ？」
「食べなさい」
今度言うのはこのことだった。
「いいわね」
「ああ、晩御飯ね」
「まず食べることよ」
「強くなるにはだよね」
「食べないと死ぬのよ」
話がかなり根本的なものになる。生きているからには食べなければ死んでしまう。母が言うのはそのことからなのであった。
「そして栄養のものを食べると」

「その分身体がよくなって」
「強くなるから。いいわね」
「うん、そうだね」
その通りだとだ、上城も頷く。そうしてだった。
実際に食べはじめる。その中でだ。
「ところでさ」
「どうしたの？」
「今日の御飯何でこれなの？」
「麦飯だから？」
「そう。何で麦飯なのかな」
見ればだった。上城がお碗に入れている御飯の中には麦も入っていた。彼はそれを食べながらだ。母にそのことを尋ねたのである。
「それ聞きたいけれど」
「ああ、それね」
「何で麦飯なのかな」
「長芋あるから」
だからだというのだ。
「それをかけて食べるから麦飯にしたのよ」
「ああ、お芋あるんだ」
「すったけれど食べる？」
「卵？味噌？どっち？」
「御味噌よ」
それで長芋に味をつけたというのだ。
「それ食べるわよね」
「うん、じゃあ」
すぐにだ。彼も頷いて言う。
「それ貰うよ」
「じゃあね。冷蔵庫にあるから」
「あるなら早く言ってよ」
「御免なさい、忘れてたのよ」

「全く。ところで父さんは？」
「自分の部屋でゲームしてるわ」
自分にとって夫にあたるその彼はそうしているというのだ。
「ドラゴンクエストしてるわよ」
「ああ、あれね」
「今シナリオ４だったわね」
それだというのだ。
「それやってるわ」
「お父さん４好きだよね」
「何だかんだであれが一番みたいよ」
「それでファイナルファンタジーは６で」
そのゲームはそれだというのだ。
「随分やり込んでるね」
「それでお母さんはね」
母はどうかとだ。我が子に笑顔で話す。

第一話　水の少年その十三

「ウィザードリィだけれど」
「あれねえ」
「外伝の４やってるのよ」
「ああ、あの最後の方の敵がとんでもなく強いあれだね」
そんな話をしてだった。彼はその夕食を食べてだ。
そのうえでだ。彼は今度はだ。庭に出ようとした。
「じゃあちょっとね」
「素振りするの」
「うん、そうするけれど」
「ちょっと待ちなさい」
ここでだ。母は彼を呼び止めるのだった。
「今は駄目よ」
「駄目って？」
「食べてすぐじゃない」
だからだというのである。
「だからね」
「ああ、少し休めってことだね」
「そういうこと。簡単な運動でもね」
「食べてすぐは駄目なんだね」
「身体によくないから」
こう我が子に話すのである。
「まあ少し休んでいなさい」
「わかったよ。じゃあね」
こう言ってだ。彼は自分の部屋に入るのだった。そしてだ。
部屋で少し勉強してからだ。それから庭で素振りをした。
その次の日だ。新聞にはだ。
一人の元教師が逮捕されたとの記事があった。それを見てだ。

上城は両親にだ。こんなことを言った。
「学校の先生ってさ」
「学校の先生がどうしたの？」
「それで」
両親も彼と共に朝食を食べている。白い御飯に納豆をかけて食べる。それと葱の味噌汁に玉子焼きだ。そうしたものを食べながらだ。
彼はだ。両親に話すのだった。
「結構おかしな人がいるんだね」
「そうかしら」
「別にそうは思わないけれどな」
父の顔は我が子によく似ている。むしろ息子が父親似だった。
その父がだ。納豆飯を食べながら我が子に応える。
「そういう人もいるっていうことだろ」
「それだけかな」
「世の中おかしな人は絶対にいるからな」
父こうも話す。
「だから学校の先生にもな」
「いるんだ」
「ああ、そうしたおかしな人がな」
「それだけかな」
「ただしな」
ここでだ。父の口調が変わった。
「学校の先生ってのはストレスが溜まるしな」
「大変な仕事だからね」
母も言う。味噌汁をすすりながら。
「授業のことに生徒のことに学校のこと」
「生徒の親もいるからな」
考えるべきことは多い。それでなのだった。
「何かってあるからな」
「だから。ストレス溜まってね」

「おかしくなるのかな」
「そういう人は多くなるな」
父はこう息子に話す。
「あと。日教組って組織もあって」
「ああ、あれね」
「あの組織の系列の先生は元々おかしいな」
このことは最近まで広くは知られていなかった。日教組がどういった異常な組織かをだ。ネットが普及するまで知られていなかったんどあ。
「あそこはな」
「あの組織はね」
母も日教組について話す。
「日本で一番変な組織だから」
「そんなにおかしいの？」
「だって。教育の理想がね」
どうなのかとだ。我が子に話すのだった。

第一話　水の少年その十四

「北朝鮮なのよ」
「北朝鮮ってあの」
「そう、あの国」
言わずと知れた究極の独裁国家だ。共産主義というが世襲でありしかも一人の人間だけが贅を極めている。そうした国であるのも最近まで広く知られていなかった。
「あの国の教育があそこの理想なのよ」
「北朝鮮が理想って」
「おかしくない筈がないでしょ」
母は少し忌々しげに言う。
「それはわかるわよね」
「僕でもね」
こう返す上城だった。
「あの国がおかしいのはね」
「そのおかしな国をだ」
父は顔を顰めさせて我が子に話す。
「理想としていたからな」
「じゃあおかしいに決まってるんだね」
「全員がそうじゃない」
父もそれは確かと言う。
「しかしだ。それでもな」
「学校の先生にはおかしな人が多いんだね」
「日教組があるとな」
どうしてもだ。そうなるというのだ。
「そうなる」
「じゃあこの先生も」
その記事を見てだ。また言う彼だった。

「そういう人なんだね」
「あれ？ひょっとして」
母がまた話に加わってきた。
「何か暴力教師が通り魔やろうとして逮捕されたって」
「うん、それ」
まさにそれだと答える。母に対して。
「本当にその人だから」
「何か中学校の先生だったわよね」
「知ってるんだ」
「夜のニュースで見たから」
それで知ったというのだ。その元教師のことを。
「酷い先生もいるものだってね」
「うん、本当にね」
上城は自分がその教師に会ったことはあえて隠して応える。
「それはね」
「生徒に普通に暴力振るって一切お咎めなしだったなんて」
「通報されるまではそうだったみたいだよね」
「それ自体がおかしいわよ」
母は自分のテーブルのところで首を捻る。
「そう思うと。あんたの通ってる学校は」
「小学校から。そんなことはなかったから」
「幸せだったわよね」
「というかそんな先生がいること自体が」
「信じられないの？」
「普通の社会でそうした人って存在できるの？」
こう両親に問うとだ。その答えは。
「そんな筈ないだろ」
「絶対に問題になるわよ」
こうだった。当然の答えだった。
「そんな人間普通にクビだぞ」

「警察来ない筈がないから」
「そうだよね。幾ら何でもね」
「それで問題にならない方がおかしい」
「それまで問題にならなかったのがね」
これが普通の社会である。教師の世界の方がおかしいのだ。
それでだった。二人はまた我が子に話した。
「いいか、そういう人間には絶対にな」
「なったら駄目よ」
「そうした人間は教師じゃない、反面教師だ」
「真似をしたらいけない人だから」
「そうなんだね。普通の世界じゃ」
どうしてもそうなることだった。そんな話をしてだ。

第一話　水の少年その十五

上城は朝食を食べ終えて。それからだった。
「じゃあ。今からね」
「歯は磨いていきなさいよ」
「うん、わかってるよ」
こう母に応えながら席を立ち食器を洗い場に置いてだった。
そのうえで歯を磨きに行きだった。
「今からね」
「行ってらっしゃい」
「車に気をつけてな」
両親がこう言って我が子を送る。そしてだ。
母は夫である相手にもだ。こう告げた。
「あなたもね」
「おっと、そうだな」
「そうよ。食べて歯を磨いてね」
「それで会社に行かないとな」
「そう。それからね」
「歯は磨かないとな」
「そう、まずは歯が大事よ」
健康管理はそこからだというのだ。
「だからね」
「食べたら絶対に歯を磨くのか」
「食べた後が一番汚いから」
それを磨いて。それからだというのだ。
「お口の中は奇麗にしないとね」
「そうだな。けれどな」
「けれど？」
「磨き過ぎても駄目だからな」

それもだとだ。彼は自分の妻に笑いながら話した。
「そこも気をつけないとな」
「勿論よ。それもね」
それはわかっているというのだ。
「けれどね」
「奇麗にするのは」
「それは忘れないことよ」
このことはだ。くれぐれもというのだ。
「わかってくれるかしら」
「わかってるさ。じゃあな」
こうした話をしてであった。
彼は朝の団欒から学校に向かうのだった。彼の運命はまだ動いてはいなかった。それを知っている者も。今はここにはいなかった。

第一話　完

２０１１・７・４

第二話　銀髪の美女その一

登校した上城にだ。クラスメイト達が声をかける。
「おい、聞いたか」
「昨日凄いことがあったんだよ」
「昨日って？」
それを聞いてだ。彼もふと目を動かした。
そのうえでだ。こう彼等に尋ねた。
「昨日何かあったの？」
「何かな、急に道の木が燃えてな」
「真夜中にな」
「真夜中に木が？」
それを聞いてだ。上城は眉を顰めさせた。
そしてそのうえでだ。彼等にまた尋ね返した。
「放火とか？」
「そうみたいだな。おかしな放火魔だよな」
「家じゃなくて木を狙うなんてな」
「おかしいだろ」
「おかしいね」
実際にそうだとだ。彼も言った。
「っていうか真夜中になんだ」
「朝通勤の人が見て騒ぎになったんだよ」
「それまであった木が急に燃えててな」
「しかも何本もな」
「聞けば聞く程おかしな話だね」
また言う上城だった。
「一体誰がやったんだろうね」

「なっ、おかしいだろ？」
「変な放火魔もいるよな」
「しかもどうやって燃やしたのかもまだわかってないんだよ」
ライターなりマッチなり。そして油や火薬さえもわかっていないというのだ。
「本当に自然に燃えたって感じでな」
「こんな放火ってないらしいんだよ」
「そうだね。普通はないね」
それはその通りだとだ。言わずともだった。
「そんなのって」
「おかしな事件だよ」
「そんな話もあるしな」
「後な」
ここで話が変わった。その話は。
「大学に凄い奇麗な人がいるぜ」
「そうなんだ」
その話にはだった。上城は今一つの反応を見せた。
「まあいるよね。そういう人も」
「おい、反応薄いな」
「彼女いるからかよ」
「勝ち組の余裕かよ」
周りがそんな彼にやっかみ半分で言う。
「やっぱり花持ってると花の話聞いても余裕だな」
「いいね、この」
「羨ましい奴だよ」
「ま、まあそれはね」
そのやっかみの言葉にだ。上城自身もはにかんでしまった。それからだ。
彼にだ。最初に話を出したそのクラスメイトがこう話した。
「それでその美人さんな」

「ああ、大学の」
「どういう人なんだよ」
「ギリシアからの留学生なんだよ」
まずは国籍から話される。
「そこから来た人でな」
「ああ、ギリシアっていうと」
「あの神話で有名な国だよな」
「オリンピックとかな」
「あの国だよな」
皆ギリシアについての話をはじめた。その話からだった。
「あの国からの人なんだ」
「じゃあ外人さんか」
「だよな、絶対に」
「ああ。銀髪で目が緑色でな」
次は外見的な特徴から話される。

第二話　銀髪の美女その二

「それが凄く目立ってな」
「とにかく奇麗な人か」
「そうなんだな」
「ああ、俺も一回見たけれどな」
その人をだというのだ。
「モデルみたいに背が高くてすらりとしててな」
「おいおい、モデルかよ」
「さらに凄いじゃねえかよ」
「とにかく一度見たら忘れられない位だよ」
そうした話を聞いてであった。周りも。
羨ましい顔になってだ。それで言うのだった。
「一回見てみたいよな」
「そんなに奇麗な人だとな」
「大学に行くか」
「そこでな」
「部活は弓道だってさ」
彼はその部活のことも話した。
「アーチェリーもやってたかな」
「どっちにしても弓か」
「弓と弓掛け持ちしてんだな、その人」
「弓好きなんだな」
「そうみたいだな」
実際にそうだとその彼も話す。
「けれど他のスポーツもな」
「できるっていうんだ」
「スポーツ万能なんだな」
「つまりあれか」

ここでクラスメイトの一人が言った。
「スポーツ万能の美人の留学生のお姉さんか」
「一言で言えばそうだよな」
「そういう人だよな」
他の面々もそれで納得する。
「ふうん、そういう人がか」
「大学にいるのか」
「交際できたらいいな」
一人がこんなことを言った。
「俺丁度フリーだしな」
「馬鹿、そんなポイント高い人が御前の彼女になるかよ」
「贅沢言うなよ」
それはすぐに周りに否定された。
「まあとにかく。大学にいて弓やってる留学生の人か」
「その人なんだな」
「髪は銀色で目が緑で」
「モデルみたいな人か」
皆それぞれ言ってくる。そしてだった。
その話をしてだ。それは上城の耳にも入った。
その話をだ。昼にだ。
小柄で黒髪をロングにした垂れ目の女の子にだ。話すのだった。
二人は今食堂で二人用の席に向かい合って座って食べている。そうしながらだ。上城はその女の子、八条学園の制服の一つである。青いブレザーと赤いタートンチェックのミニスカートと赤いネクタイの彼女にだ。きつねうどんを食べながら話した。
「そういう人がいるらしいんだ」
「ああ、その人ならね」
女の子もだ。すぐに彼に応えてきた。彼女はざるそばを食べている。
「知ってるわ」

「えっ、樹里ちゃん知ってるの」
「ええ、私新聞部じゃない」
「それでなんだ」
「そうよ。新聞部だから」
それで情報を得ているとだ。彼女村山樹里は話すのだった。
「聞いてたわ」
「それでなんだ」
「ギリシアから来た留学生の人よね」
「そうらしいね」
「それで髪は銀色で」
樹里はこのことも言ってきた。
「目は緑よね」
「そうそう、そう聞いてるよ」
「あとは弓が得意で」
「背も高いらしいね」
「聞いてるわ。その人のこと」
実際にそうだとだ。樹里はざるそばをすすりながら上城に話す。
「銀月聡美さんね」
「銀月って」
その名前を聞いてだ。上城は眉を顰めさせた。

第二話　銀髪の美女その三

それでだ。きつねうどんの揚げを食べながら樹里に話した。
「それって変わった名前だけれど」
「それでもっていうのね」
「日本人の名前だよね」
「何でもハーフらしいのよ」
「ハーフ？」
「国籍はギリシアだけれど日本人の血を引いていて」
それでだというのだ。
「その関係でね。お父さんかお母さんのお家もあって」
「それで日本の名前なんだ」
「そうみたいよ」
こう上城に話すのだった。
「それがその留学生の人らしいわ」
「成程、そうなんだ」
「それがその銀月さんって人なのよ」
「銀月さんね」
「一度御会いしてみる？」
樹里は自分から上城に言った。
「今日にでも」
「今日にでもって」
「そう。興味あるのよね」
「僕は別に」
「私があるから」
樹里はいささか強引にこう上城に話した。
「だから来て」
「そうなるんだ」
「取材も兼ねて」

半分以上理由付けだがそれでもだというのだ。
「一緒に来て」
「話変わってない？」
「けれどいいじゃない」
話の強引さが強くなっていた。
「上城君も興味あるんだし」
「僕は別に」
「興味があるから話すんじゃない」
「だからだっていうんだ」
「そう。じゃあ今日の放課後ね」
「部活の前にね」
こうして話は樹里のペースで決まったのだった。そしてだ。
樹里は今度はだ。こんなことを言ってきた。
「あとね」
「あと？」
「銀色の髪って」
そのだ。銀髪について話すのだった。
「白髪とかそういうのじゃないわよね」
「違うみたいだよ」
「歳を取ったみたいなのじゃなくて」
「そう、そのままのね」
「銀髪なの」
「ちょっと想像できない？」
「実は」
そうだとだ。樹里は首を傾げさせながら言うのだった。
そのうえでだ。ざるそばと一緒に注文した天丼を食べてからだった。上城に話す。尚上城は上城で親子丼も一緒に食べている。
「銀髪ってはじめて見るのよね」
「地毛のはだね」
「そうなのよ。地毛の銀髪って」

「日本人にはいないからね」
「そうでしょ。白人の人でも」
どうかというのだ。
「見たことないのよ」
「プラチナブロンドっていったんだっけ」
「金髪よりまだ珍しいのね」
「金髪の人は多いじゃない」
特にゲルマン系に多い。ゲルマンといえば金髪に碧眼であるという認識は上城だけでなく樹里にもわりかし強く存在している。
「だから別に」
「珍しくないけれど」
「銀髪はね」
「確かに。言われてみれば」
話をしているうちにだ。上城も思うようになった。

第二話　銀髪の美女その四

それでだ。こう彼女に話した。
「僕も銀髪の人は」
「あまり見たことないのね」
「テレビでもね。白い髪の人はいたけれど」
「あっ、昔のアメリカ大統領でいたわよね」
「クリントンだったっけ」
「そう、あの人」
民主党の大統領であった。女性問題で有名だがアメリカ経済を立て直したことで功績があった。彼の髪は白い髪だったのである。
「あの人の髪は白だったわよね」
「だよね。白い髪は見たことあるけれど」
「銀髪は」
「ないよね」
「実際のところね」
そうだとだ。二人で話すのだった。
そしてだ。樹里はさらに話していく。
「まあ緑の目はね」
「それは普通にあるよね」
「あっちの人じゃ多いわよね」
「結構ね。多いよ」
「何はともあれどんな人か」
「御会いしたいんだね」
「取材でね」
あくまでそれを理由としての話だからこう言うのだった。
「行くわよ」
「それじゃあ僕もだね」
「ボディーガードで来て」

「やれやれだね」
こうした話をしてだった。上城は樹里のお供で剣道部の前に新聞部の取材、名目上はそうなっているに付き合ってだ。大学に向かうのだった。
八条大学は高等部のすぐ隣にある。キャンバスの面積は大学の方が圧倒的に広い。大学の方が広いのは当然と言えば当然である。
その大学に入ってだ。樹里はまずこう言うのだった。
「やっぱりあれよね」
「やっぱりって？」
「この大学って広いわよね」
こう上城に言うのである。キャンバスは木々も多くまるで森の中に大学がある様である。その中を通りながら話をしているのである。
「下手したら迷いそうよね」
「実際道に迷うかもね」
その可能性は否定しない彼だった。
「これだけ広いと」
「そうよね、ここは」
「高校の何倍あるかな」
「ええと、学部が幾つあったかしら」
「三十はあったんじゃないの？」
「三十って」
まずその数にだ。絶句する樹里だった。
それでだ。呆れた様にこう言うのだった。
「普通五つか六つよね。大学の学部って」
「ここの大学って総合大学だからね」
「それでも三十ってかなり多いわよ」
「いや、三十以上あったかな」
上城はこんなことも言った。
「とにかく何十もあるから」
「三十よりまだなの」

「あったんじゃないかな。日本で一番学部と生徒数の多い大学らしいから」
「キャンバスの面積もよね」
「そう、全部ね」
とにかくだ。異様に広くて大きいマンモス校なのだ。尚彼等の通う高等部にしても高校としては相当な大きさの学校である。こちらの生徒数も高校としては日本一なのだ。
その学園の中にいてだ。樹里は言うのである。
「広い学校もこうした時は」
「困るんだ」
「かなりね」
そうだと上城に不平を漏らす。

第二話　銀髪の美女その五

「本当に迷いそうよ」
「大丈夫だよ」
だが彼は笑顔でこう彼女に返した。
「それもね」
「大丈夫なの？」
「大学のことは知ってるし」
だからだというのだ。
「何処に何があるのかね」
「大学によく行くの？」
「部活のランニングコースだから」
「ああ、それでなの」
「そう、それでね」
道は知っているというのだ。
「広いからね。ランニングコースに向いてるから」
「だから知ってるの」
「そう。大学のことは結構詳しいよ」
「じゃあ道案内お願いできる？」
「だから行ったんだけれど」
「わかったわ。それじゃあ」
「それで行く場所は？」
上城が尋ねるとだ。樹里はすぐにここだと答えた。
「弓道部の道場よ」
「そこにいるんだ」
「それかアーチェリー部の練習場か」
「あっ、隣同士だよその二つの場所って」
「隣同士なの」
「そう、だからどっちに行くにしてもね」

どうかというのだ。
「そのどっちにもね」
「行けるのね」
「そう、行けるから」
便利だというのだ。
「じゃあどっちにしてもその銀月さんはそこにいるから」
「行きましょう」
こうした話をしてだった。二人は。
まずはその弓道場に向かった。そこに行くと。
的に向かってだ。白い上着に濃紺の男女が弓を次々に放っていた。
床は和風の木のものでありそこからだ。狙いを定めて放っていた。
それを見てだ。樹里はまずこう言った。
「弓道の服って」
「稽古着だね」
「あれって剣道のとはまた違うのね」
「うん、違うよ」
その通りだとだ。上城も答える。
「剣道着は弓道のよりも厚いんだ」
「生地が違うのね」
「うん。ただ剣道着も白はあるけれどね」
「女の子が着るあれね」
「そうだよ。ただ弓道も」
見ればだ。上下共に濃紺の者もいた。それは。
「男の人はそうだよね」
「紺色の人もいるわね」
「まあ。最近は柔道着も色のがあるし」
所謂カラーの柔道着だ。国際試合等で着る。
「こうしたところは寛容になってるね」
「何か女の人でも紺色の人いるわね」
「そうだよね。とにかくね」

「ここにいるのかしら」
樹里は首を捻りながら周囲を見回して話した。
「その銀月さんは」
「髪の毛が銀色だったよね」
「そう。それもかなり奇麗な」
そうした髪の毛だというのだ。
「そうした髪だっていうけれど」
「じゃあすぐにわかるよね」
「何処にいるのかしら」
樹里はまた周囲を見回す。その中でだ。
樹里はだ。その彼女を見つけたのだった。
「あっ」
「いたの？」
「あの人じゃないの？」
上城は道場に入って来た白い上着と袴のその人を見て樹里に話した。

第二話　銀髪の美女その六

「ほら、髪の毛の色が」
「そうね。あの人ね」
見ればだ。まさに彼女だった。
見事な銀髪を後ろで束ねている。そして目は緑色だ。
モデルの様な長身ではっきりした顔立ちだ。その彼女を見てだ。
彼は樹里に言うのだ。
「銀髪でしかも」
「目が緑色で」
「モデルさんみたいな美人なんだよね」
「しかも弓道部にいて」
「全部当てはまるじゃない」
こう彼女に話す。
「そうだよね」
「ええ、間違いないわね」
樹里もだ。確信して言うのだった。
「あの人よ」
「じゃあ今から取材？」
「八条大学弓道部に突如として現れたホープ」
タイトルは今適当に考えたものだ。
「その人に今からね」
「突撃取材だね」
「ええ、行くわよ」
「それじゃあ聞くよ」
その樹里にだ。上城は問うた。
「紙とかレポート用紙は？」
「持ってない筈がないじゃない」
返答は即答だった。

「それは」
「ああ、持ってるんだ」
「当たり前でしょ。新聞部よ」
だからだとだ。樹里はいささか胸を張って言う。小柄な彼女が胸を張るがそれでもだった。背の高い上城からはつむじが見えてしまった。
そのつむじを後ろから見ながらだ。彼は言う。
「持っているんだ」
「だから。持ってない筈ないじゃない」
「てっきり。理由付けだって思ってたよ」
その銀髪の留学生に会う為のだというのだ。
「違ったんだ」
「ま、まあね」
その問いにはだった。樹里は胸を反らすのを止めて。
そのうえで視線を右に流して。後ろの上城に答えた。
「それはないから」
「だったらいいけれど」
「何度も言うけれど私は潔白よ」
「ここで潔白って言葉は使うのかな」
「使うわよ。いいのよ」
用途による言葉だった。ただし己で潔白と言う場合に潔白だった事は少ない。だがそれでもあえて言うのが今の樹里だった。
こう言い張ってからだ。彼女はあらためて彼に告げた。
「じゃあ行きましょう」
「うん、話長くかかったけれどね」
「それは気のせいよ」
「気のせいかな」
「そうよ、気のせいよ」
樹里はここでも強引だった。
「とにかくね」

「うん、あの人に取材だね」
「そういうことよ」
こう話してだった。彼等は。
その銀髪の美女のところに行きだ。声をかけたのだった。
「あの、すいません」
「高等部の者ですけれど」
まずは樹里が、そして上城がだった。
二人でだ。彼女に声をかけた。だが、だった。
樹里は最初に上城を見てだ。こう言ったのだった。
「貴方もなのですね」
「はい？」
そう言われてだった。彼は。

第二話　銀髪の美女その七

目を丸くさせてだ。美女に返した。
「僕ですか？」
「貴方もまた剣を」
「剣をって」
「そうですか。また」
「ひょっとして」
美女の話を聞いてだ。彼は言うのだった。
「剣道部に出入りしていますか？」
「剣道ですか」
「はい、実は僕高等部の剣道部なんです」
このことを美女に話す。
「ぞれで大学にも出入りしてますけれど」
「大学の」
「それで御存知だったんでしょうか」
こうだ。美女に怪訝な顔で尋ねるのである。
「そうなんですか？」
「それは」
「とりあえず今は」
美女は言葉を止めた。その彼女にだ。
彼はだ。こう言うのだった。
「取材に付き合って来ました」
「はい、八条学園高等部新聞部です」
樹里が明るい声で美女にまた声をかける。
「宜しく御願いしますね」
「こちらこそ」
美女は樹里の言葉に微笑みだ。そうしてだった。
頭を深々と、日本のお辞儀をした。それからだ。

彼女にだ。こう話した。
「ギリシアから来ました」
「留学生の方ですね」
樹里はこのことも名前も既に知っているがだ。あえて言わずに彼女の話を受けて話した。
「ギリシアからの」
「名前は」
美女は様式美の如くだ。今度はこう話した。
「銀月聡美といいます」
「日本のお名前ですね」
「父が日本人ですから」
「それで日本のお名前なんですか」
「そうです。ですが国籍はギリシアです」
この辺りはやや複雑だった。名前は日本のもので家族の一方も日本人であるがだ。国籍はギリシアにあるというのである。それにだった。
「ずっとあの国で育ってきました」
「ギリシア生まれのギリシア育ちでした」
美女、銀月聡美はまた話した。
「そうなんです」
「そうですか。ハーフで」
「それで」
「そうなります。日本に来たのは」
「それはどうしてですか？」
「勉強の為ですよね」
「いえ」
ところがだった。
聡美は急に顔を曇らせてだ。こう答えたのである。
「止める為です」
「止める！？」

「止めるといいますと」
「あの方がこれ以上過ちを犯されるのを止める為に」
そうだというのである。
「それで日本に」
「過ち！？」
「過ちっていいますと」
二人は彼女のその言葉に首を捻ってだ。
あらためてだ。こう彼女に尋ねたのだった。
「何ですか、それ」
「妙な感じがしますけれど」
「あっ、いえ」
己の言葉を遮ってだ。聡美はこう二人に話した。

第二話　銀髪の美女その八

「言葉のあやです」
「あやですか」
「そうでしたが」
「初対面の方がおられますと」
どうだというのだ。そういう相手が目の前にいると。
「自然と気を張り詰めてしまって」
「それで、となるんですね」
「ですから」
「はい、すいません」
こう言ってだ。二人に頭も下げもする。
「変なことを言ってしまいました」
「いえ、それはいいです」
「御気に召されずに」
樹里だけでなく上城も彼女を慰める様にして言う。
そのうえでだ。樹里は。
話が一旦途切れたのを見てだ。彼女から言ったのだった。
「あの、それでなのですけれど」
「それでとは？」
「弓のことです」
このことをだ。聡美に尋ねたのである。
「今弓道部とアーチェリー部に所属しておられますね」
「はい」
「両方やっておられるのですか」
「弓は好きなので」
それでだとだ。聡美は樹里の問いに答えて話す。
「両方させてもらっています」
「私は弓のことはよく知りませんが」

このことは断る樹里だった。
「ですが弓道とアーチェリーは細かいところが随分違うそうですね」
「そうです。弓であることは同じですけれど」
「そのことについては違和感はありませんか？」
こう聡美に尋ねるのだった。
「両者の違いには」
「弓は。どれであっても弓ですから」
これが今の樹里の問いへの聡美の返答だった。
「特に」
「ないんですか」
「弓はどうであっても得意です」
自信が見られる言葉だった。
「弓なら」
「そうですか。弓なら」
「はい、得意です」
また言う聡美だった。
「持っているだけで幸せになれます」
「それはまたかなりですね」
「弓を使った狩もしていました」
「狩もですか？」
「ギリシアにいた頃は」
していたというのだ。弓を使った狩を。
「それでよく山の中を駆けました」
「それはまた凄いですね」
狩もしていたというのを聞いてだ。樹里は目を丸くさせてだ。
レポート用紙に素早く書きながらだ。聡美に言葉を返した。
「狩までされていたのですか」
「流石に日本ではしていませんが」
「日本ではですね」
「はい、それは」

していないというのだ。
「ただ。陸上はです」
「あっ、御聞きしています」
陸上と聞いてだ。樹里はその顔をはっきりとしたものにさせた。
そのうえでだ。彼女にこう話す。
「陸上部にも入っておられるとか」
「駆けるのも好きなので」
また答える聡美だった。そうした話を聞けば随分とスポーツに秀でている留学生に聞こえる。少なくとも樹里も上城もそう思った。
「それで」
「アーチェリーと陸上で」
さらに言う樹里だった。
「選手だったそうですね」
「そうだったこともありました」
「陸上の選手でもあったんですか」
それを聞いてだ。上城が言う。

第二話　銀髪の美女その九

彼は聡美を見ながらだ。その彼女に話した。
「そういえばそんな感じですね」
「おわかりになられるのですか」６
「何となくですが」
わかるというのだ。
「それでなんです」
「そうですか。実は私も」
「銀月さんも？」
「わかることがあります」
上城を見て。そのうえでの言葉だった。
「貴方のことについて」
「僕のことがですか」
「はい、わかることがあります」
こうだ。その上城を見ながら話すのだ。
「貴方は剣道をされていますね」
「そうですけれど」
「この国の剣道をですね」
「はい、今もこれが終わってから」
するというのだ。その剣道をだ。
「そのつもりです」
「そうですね。そしてです」
「そして？」
「そのことが」
まだ彼を見ている。そうしてさらに話すのである。
「貴方を大きなことに導くでしょう」
「剣道をしていることがですか」
「もっと言えば剣道をしていること」

聡美はさらに言う。
「そのこともまた」
「剣道をしていることが」
「運命ですから」
「剣道をしていることが運命なんですか」
「遥かな時代より」
話は遡る。そこまでだ。
「それは決まっています」
「僕が剣道をしていることが？」
「貴方はこの時代のこの国でもまた」
聡美の顔が変わった。悲しむものに。
そしてその悲しむ顔でだ。さらに話す彼女だった。
「貴方は闘い続けるのですね」
「？さっきから何を言ってるんですか？」
彼女のその話を聞いてだ。樹里は。
首を捻ってだ。こう聡美に尋ねた。
「あの、剣道とか運命とか」
「あっ、それは」
「確かに上城君は剣道をしてますけれど」
それは間違いないというのだ。確かだとだ。
「けれど。それに運命って」
「よくわからないよね」
「傍から聞いてもね」
そうだとだ。上城自身も言う。
「よくわからないよね」
「どうもね」
「あっ、それは」
二人の話を聞いてだ。それでだった。
「何でもないです」
「何でもないって」

「そうなんですか？」
「はい、何となくそう思っただけで」
あくまでそれだけだというのだ。
「気にされないで下さい」
「ならいいですけれど」
「そうよね」
そうは聞いてもだった。
二人はどうもだ。わからないという顔になってだ。
そのうえでだ。聡美にあらためて話す。
「妙に気になりますけれど」
「本当に何もないんですか」
「はい、ないです」
そうだというのだ。
「特に別に」
「ならいいですけれど」
「それなら」
二人も釈然としないがそれでもだった。
聡美がそう言うのならいいとしてだ。頷くのだった。
そんな話をしているうちに取材も終わってだ。それでだった。
二人は聡美と別れ大学から高等部に向かう。その中でだ。

第二話　銀髪の美女その十

樹里はこう上城に話すのである。
「銀月さんだけれど」
「あの人だよね」
「変なこと言ってるわよね」
「うん、かなりね」
そうだとだ。上城は樹里のその言葉に頷いた。
そのうえでだ。首を捻りながら話すのだった。
「僕がさ。何か」
「運命がってね」
「この時代でもこの国でもって」
「おかしな話よね」
樹里も言う。
「これって」
「おかしなっていうか」
「何か引っ掛かる？」
「そんな話だけれど」
「引っ掛かるっていうことは」
そのことはどうかとだ。樹里は上城に話す。
「思うところがあるからよね」
「思うところろって」
「そう。何も思わなければ」
どうかというのだ。その場合は。
「引っ掛かるなんてことないじゃない」
「聞いてすぐにでも忘れるかな」
「そう。もう簡単にね」
そうなるというのだ。
「だから。引っ掛かるのは」

「何か思うところがあるから」
「何で思うかまではわからないけれど」
「それでも僕は思ってるんだ」
「心の何処かでね」
「何かそれって」
どうかとだ。上城はここで言った。
「余計におかしな話だよね」
「そうよね。私もそう思うわ」
「おかしな話だっていうんだね」
「それもかなりね」
そうだというのだ。
「また随分と」
「運命ねえ」
「それと剣道よね」
「ひょっとして」
首を捻りながら。上城はこう話した。
「あれかな。僕の前世がさ」
「前世ね」
「剣術家か何かで」
それでだ。どうかというのだ。
「そのせいで。今何かあるのかな」
「何か話がＳＦめいてきたわね」
「そうだね。こう考えると」
「完全にＳＦじゃない。それかファンタジー」
「それであれかな」
上城はいささか調子に乗った感じでだ。樹里に話す。
「僕は運命の剣士だっていうのかな」
「それで何かを果たすとかね」
「そんな面白い話かな」
「だったら面白い？」

「いや、実際にそんなことになったら」
どうかというのだ。その場合は。
「結構鬱陶しいと思うけれど」
「運命に導かれて何かをするっていうのは」
「うん。それって鬱陶しいことだと思うよ」
「そうね。考えてみれば」
腕を組んで考える顔になってだ。樹里も言う。
「そうなるわよね」
「そうそう。厄介なことだと思うよ」
「ましてやそれが命賭けのことだったら」
「余計にまずいわよね」
「そんなの絶対に嫌だよ」
上城は顔を顰めさせ苦笑いになって述べた。
「もうね」
「そうよね。それはね」
「まあそんなことは絶対にないだろうけれど」
「漫画じゃあるまいしね」
「そうだよね」
笑いながらそうした話をしてだった。上城は剣道部の道場に向かう。そしてだ。
樹里は新聞部の部室に向かった。二人はそれぞれの部活を楽しみだ。健全な高校生活を送るのだった。

第二話　完

２０１１・７・１２

第三話　見てしまったものその一

久遠の神話
第三話　見てしまったもの

上城の学園生活は変わらない。そのままだった。
部活でもだ。平和だった。
今日は部活でランニングだ。その休憩時間にだ。
スポーツドリンクを飲みながらだ。部活仲間の話を聞いていた。
「うちの部活ってあれだよな」
「ああ、走ってばかりだよな」
「ランニングとか。筋力トレーニングとかな」
「素振りよりそっちの方が多いよな」
「絶対にな」
「まずは体力だ」
ここでだ。その剣道部の顧問の先生が来て彼等に話す。
「だから走るんだ」
「いつもそう言ってますよね」
「だからだって」
「そうだ。稽古はそれからでいい」
そうしたものは二番目だというのだ。
「まずは走ることだ。部活だしな」
「部活だからですか」
「走るんですか」
「それからなんですか」
「そう、部活は楽しんで心身を鍛える為にあるものなんだ」
腕を組んでだ。顧問の先生は確かに話す。
「だからだ。走るんだ」
「じゃあ勝つ為に稽古ばかりしてるのは」
「そういう教師もいるな」

先生も話す。
「そういう教師はだ」
「間違いですか」
「やっぱりそうなんですね」
「そうだ、そうした教師が考えているのは」
何かというとだ。それは。
「自分の成績をあげることだけだ」
「部活ですか？」
「それですか？」
「そう、それだ」
そのことを話すのだった。
「部活で実績をあげても得点になる」
「教師のですか」
「得点になるんですか」
「そう、なる」
また話す先生だった。
「それで生徒のことを考えずにそうした稽古ばかりさせる」
「何か嫌な話ですね」
「そんな教師もいるんですね」
上城達もここで知ることだった。
「っていうか教師に成績があるんですか」
「そうしたのがあるんですか」
「ある。そしてだ」
さらにだった。
「そうした教師は生徒が試合に負けると」
「教師の成績に関わる試合がですか」
「それに負けたらですか」
「生徒に八つ当たりをする」
こうした教師が実際にいるのが我が国の教育界だ。それだけ歪み腐りきっているのだ。残念なことにそうした教師も多いのだ。

「虐待にもつながる」
「虐待、ですか」
「そんなことして許されるんですね」
「それが教師の世界なんですね
「残念なことにな」
まさにその通りだというのだ。
「その教師が前に大学でやられたあの教師だ」
「あいつだったんですか」
その話を聞いてだ。上城は驚きの声をあげた。
そしてそのうえでだ。顧問の先生に言った。
「あの中学校の」
「あいつのことは知っていた」
顧問の先生は不機嫌そのものの顔で話す。
「中学生相手に突きをして罵倒の限りを尽くしていた」
「そうらしいですね」
「中学生に突きって」
「竹刀を蹴飛ばし床で背負い投げをしていた」
そうしたことも知っている先生だった。
「最低の人間だった」
「ですよね。そこまでするって頭おかしいでしょ」
「相手まだ子供じゃないですか」
中学生ならだ。こう言ってもよかった。

第三話　見てしまったものその二

「ついこの前までランドセル背負っていた子供相手にですか」
「そんなことしてたんですか」
「俺が成敗しようかと思っていた」
顧問の先生もだ。そう考えていたというのだ。
「だがその前にだ」
「大学でやっつけられたんですね」
「悪事も暴かれて」
「それで今は剣道界にもいない」
追放されたというのだ。
「もう竹刀を握れないどころか身体を動かせないようにもなった」
「当たり前ですよね、それって」
「当然の報いですよね」
「比良屋経市楼といったな」
その教師の名前も話される。
「その教師の名前は」
「それでその教師がですね」
「再起不能になったんですね」
「それで今度刑務所に入ることになった」
まさに最高の因果応報の流れだった。
「いいことだ」
「ですね。本当に」
「というかそんなのが教師で剣道教えてたって」
「とんでもないことなんじゃ」
「そうだ。とんでもないことだった」
まさにそうだとだ。先生も話す。
「しかしそれもあらためられた」
「あの大学生の人っていいことしたんですね」

「ですよね」
「成敗されなければならない悪もある」
時代劇の様な話だ。しかしこれも現実だった。
「そういうことだ」
「ですね。本当に」
「その通りですよ」
「それで俺はだ」
先生はここで話を変えた。
「御前等は走らせる」
「まずは体力ですね」
「そこからですね」
「そうだ。とにかく走れ」
「走るんですね」
「まずは」
「そうだ。何ごとも走ってからだ」
先生の言葉は変わらない。
「ただしだ」
「ただし？」
「ただしっていいますと」
「兎跳びはさせないからな」
それは絶対だというのだ。
「あの中学の教師はさせていたそうだがな」
「あの、兎跳びって」
「あれまずいでしょ」
「そうでしょ」
兎跳びと聞いてだ。上城達もだ。
顔を顰めさせてだ。それぞれ言った。
「あれは足腰痛めるんですよね」
「特に膝を」
「そんなのとっくの昔にわかってません？」

「それをさせていたって」
「その教師何だったんですか？」
「馬鹿だ」
先生の言葉は鞭になっていた。
「そんなこともわからない体育教師だった」
「体育教師こそ一番わかることなんじゃ？」
「だよな。そういうのって」
「身体を動かして扱うことを教えるんだから」
「それがまずわからないって」
「知らないにしても」
「そこまでの馬鹿でも先生になれるんだな」
そしてこの結論が出たのだった。

第三話　見てしまったものその三

「世の中って凄いよね」
「っていうか有り得ない？」
「普通の世界じゃ絶対に通用しないよな、そんな馬鹿」
「それで生徒を教えてるって」
「世の中怖いよね」
「世の中色々な人間がいる」
そうだと。また話す先生だった。
「教師も色々だ」
「そうしたおかしな先生もいるんですね」
「つまりは」
「他の仕事でもだ」
先生はまた話した。
「俺も剣道をしていてわかったことだがな」
「色々な仕事の人がそれぞれ剣道をしていてですか」
「それでわかったんですね」
「そうだ。わかった」
それを通じてだというのだ。
「色々な仕事で色々な人間がいる」
「どの仕事でもとんでもない奴はいるんですね」
「剣道をしている人間でもですね」
「いるんですね」
「逆もあるがな」
素晴しい人間もいるというのだ。中には。
「しかしそうした人間に出会えればだ」
「そうした時はどうすればいいんですか？」
「俺そんな人間に剣道教わりたくないですけれど」
「僕もですよ」

「そうだよな。そんな人間が教える立場だと何してくるか」
「それこそわからないから」
「そうした人間は避けろ」
これが先生が彼等に言うことだった。
「近くにいれば碌なことにならない」
「だからですか」
「そうした人間ってわかればですか」
「もう逃げるべきなんですね」
「そんな奴からは」
「そんな人間に教えられても何にもならない」
だからだともいうのだ。
「教えられることは碌なことじゃない」
「それか身体壊すか」
「そうしたことですよね」
「大体わかる。おかしな人間は」
こうも話す先生だった。
「その行動でな」
「わかるんですか？そういうことも」
「おかしな人間だってことも」
「そうしたしてはいけないことをする」
中学生に突きをしたり反則を取られる技を浴びせたり。あまりにも酷い罵倒や体罰をすることこそがだ。してはいけないことだというのだ。
「だからだ。それはだ」
「そうしたことからわかるんですか」
「暴力からですか」
「そういったことからわかる」
「そうなんですね」
「その通りだ。その行動がおかしな教師には教わるな」
先生は彼等に強く言う。

「絶対にだ」
「わかりました。そうします」
「さもないと危ないですよね」
「碌でもない人間には教わらない」
「そういうことですね」
「その通りだ。まともな人間かどうか見極めてだ」
それでだというのだ。
「その先生についた方がいい」
「あの、それじゃあですけれど」
「そういいますと」
どうなるかとだ。上城達は顧問の先生に対して言った。
「先生もそう思われたらですよ」
「俺達部活辞めますけれど」
「そうなってもいいんですか？」
「その場合は」
「いい」
構わないとだ。先生は毅然とした声で答えた。

第三話　見てしまったものその四

「そうなってもだ」
「えっ、いいんですか！？」
「俺達が離れてもですか」
「それでもいいんですか」
「それは俺に問題があったからなることだ」
先生は毅然としてだ。彼等に話した。
「だからだ。それでそうなってもだ」
「構わないんですか」
「そうなんですね」
「そうだ。それならそれで仕方ない」
先生はまたこう言った。
「俺はそう思う」
「ううん、何か潔いっていうか」
「先生ってそうじゃないといけないんですか」
「それで人間もそうなんですね」
「そうしたことを受け入れないといけないんですね」
「そういうことだ。自分が招いた禍は避けられない」
孟子にあることをだ。先生は強く意識しながら言葉として出したのだ。
「それはもうな」
「ですか。そうなんですね」
「生徒が離れるのは顧問の先生にこそ問題があるから」
「だからですか」
「俺もだ」
そのだ。先生にしてもだというのだ。
「そんな教師には教わりたくない」
「そうした暴力教師にはですね」

「教わりたくないんですね」
「そうだ。絶対にな」
まさにそうだというのだ。
「何があってもな」
「ですね。それは誰でもですよね」
「正直何されるかわかりませんから」
「じゃあ俺達も気をつけます」
「そんな先生には」
「それでこうも思うな」
先生は話を変えてきた。
「そんな人間にはなりたくないと思うな」
「ですん。そんな暴力的な人間にはとてもですよ」
「なりたくないですよ、それこそ」
「本当に何があってもですよ」
「なりたくないです」
そのことについてもだ。彼等も答えた。
「何ていいますか。最低ですから」
「自分がやられても嫌ですし」
「自分がそんな人間になったらですよ」
「最低ですから」
「そういうことだ。自分がやられて嫌なことはだ」
まさにだ。そうしたことはだというのだ。
「絶対に他人にはしない。そしてだ」
「自分がそうした嫌な人間にはですね」
「絶対になったらいけない」
「そうですよね」
「そうだ。まああの教師はな」
中田に成敗されただ。その暴力教師はどうかというのだ。
「いい反面教師だ」
「そうした教師なんですね」

「つまりは」
「最悪の教師は最高の反面教師だ」
学校はそうした反面教師の宝庫でもある。これも日教組の影響だろうか。
「あんな人間になるものかと思わせるな」
「そうですね。じゃあ俺達そんな人間になりたくないですから」
「気をつけます」
「そうします」
「ああ、そうしてくれ」
先生もそのことを心から願うのだった。そのうえで上城達と共に走るのだった。部活は確かに体力を使うが確かなものだった。その部活の後でだ。

第三話　見てしまったものその五

上城の学校の帰りは今日もだった。樹里と一緒だ。
二人並んで楽しく話をしながらだ。下校のデートを行っていた。
その中でだ。樹里が彼に言ってきた。
「あの人だけれど」
「あの人って？」
「だから。ギリシアからの留学生の人よ」
「ああ、銀月さん」
「そう、あの人ね」
そのだ。彼女のことだった。
「あの人についてどう思う？」
「どう思うって」
「奇麗な人よね」
樹里が話すのはこのことからだった。
「日本人離れ、いえ」
「いえ？」
「何か人間からランクがあがったみたいな」
「人間より上って」
「女神みたいな感じだけれど」
「女神ね」
「そんな感じしない？あの人」
こう言うのである。
「何かね」
「言われてみれば」
「そうよね。人間離れした感じね」
「うん、凄く奇麗で」
「あと。中性的？」
こんなことも言う樹里だった。

「女の人だけれど何処か」
「そうそう、健康的でね」
「スポーツをしてるせいかしら」
「そのせいかな」
「身体つきが凄く引き締まっていて背も高くて」
樹里はここで隣にいる上城を見た。小柄なので見上げる形になっている。
「上城君と同じ位だったかしら」
「それ位かな」
「ええと、上城君は確か」
「一七八だよ」
それ位あるのだ。高い方と言っていい。
「今はね」
「じゃああの人って」
「そうだね。一七五はあるよね」
「女の人としてはやっぱり」
「かなり高いよ」
「そうよね。私は一五二で」
彼女はそれ位だ。やはり小柄なのだ。
「何かそういうのを比べたら」
「全然違うっていうんだね」
「羨ましいわ」
ついついだ。本音も出してしまう樹里だった。
「そこまで高いなんて」
「背が高いとなんだ」
「羨ましいわ」
その本音を次第に強く話していく。
「私もそれだけあればって」
「思うんだ」
「女の子も背を気にするのよ」

「えっ、そうなんだ」
「やっぱり高い方がいいわよ」
言葉は力説になっていた。
「モデルみたいにね」
「僕はそうは思わないけれど」
樹里のその話にだ。こう返す彼だった。
「特に。そんな」
「わからないのよ、それは」
「わからないって？」
「そりゃ男の子は誰でも背を気にするけれど」
「女の子もって」
「同じだから、それは」
まだ言うのである。
「とにかく。背はね」
「背は？」
「あと八センチは欲しいわ」
これが樹里の心からの言葉だった。

第三話　見てしまったものその六

「一六〇位はね」
「別に今のままでいいんじゃないかな」
「何でそう言えるのよ」
「いや、小柄な女の子って可愛いから」
だからだというのだ。
「それでね」
「可愛いって。小柄なのが？」
「そう思うけれど違うかな」
「小柄だと子供みたいじゃない」
今度はこんなことを言う。
「だから。本当に」
「一六〇は欲しいんだ」
「今だってね」
また上城を見上げる。何気に首を必死に上にあげている。
「あれよ。見上げるの辛いから」
「それでなんだ」
「そう。女の子も背が欲しいの」
自分のことからだ。こう話すのである。
「だから同じよ」
「そういうものなんだね」
「そういうことよ。それでね」
「うん。それで」
「あの人。あそこまで背が高いと」
やはり羨ましそうに話す樹里だった。
「あのスタイルもあって」
「女優になれるかな」
「本人がなりたいって言えばなれるでしょ」

自然にだ。そうなるというのだ。
「もうそれでね」
「何処かの事務所がスカウトして」
「そうなるんだ」
「何度も言うけれどそこまで奇麗じゃない」
銀髪に緑の目。、そしてその白い肌も思い出しての言葉だ。当然背も。
「まさに完璧超人よ」
「完璧って」
「どう、完璧じゃない」
また言う彼女だった。
「いや、羨ましいわよ」
「ううん、その銀月さんが」
「そう、完璧じゃない」
樹里の羨望の言葉が続く。
「私もねえ。あんな感じだったらそれこそ」
「芸能界デビュー？」
「そういうのは興味ないけれど」
実はだ。そうしたことは考えていないというのだ。
「ただ。それでもね」
「羨ましいんだね」
「どうしてもそう思うわ」
この感情をだ。抱いてやまないというのだ。
「まあ。私は私だけれど」
「そうだね。あの人はあの人で」
「私は私で」
「それでいいじゃない」
これが上城の樹里への言葉だった。そして樹里も。
上城のその言葉を聞いてだ。静かにだった。
頷いてだ。こう返した。

「そうよね」
「そうだよ。人は人でね」
「自分は自分よね」
「だから。特に変に意識することはね」
「ないわね」
「変に強く考えたらそれこそ」
どうなるか。上城はそのことも話した。
「かえってよくないから」
「嫉妬したりして」
「憧れるのはいいと思うよ」
上城はその感情は肯定した。プラスの考えはだ。

第三話　見てしまったものその七

だが憧れ、羨望と逆のだ。その感情についても話した。
「けれど嫉妬はね」
「誰かを妬むのは」
「誰でもあることだけれどよくないと思うよ」
こう樹里に話したのだ。
「それはね」
「そうよね。マイナスの感情はね」
「それはその人をよくしないから」
だからだというのだ。
「僕も。誰かを嫉妬したりしてね」
「上城君が？」
「子供の頃そうした感情あったから」
「そうだったの」
「それで妬んでひがんでね」
子供の頃の経験、些細なことで誰にでもあるようなことだった。
「ほら、友達が滅多にないカードを持ってて」
「ああ、カードゲームの」
「それが欲しくて欲しくて仕方なくてね」
「妬んでたんだ」
「向こうもそれを自慢して」
本当によくあることだった。子供の頃には。これがプラモデルだったりチョロQだったりゲームソフトだったりする。何にしろ人が持っていて自分が持っていないものを見て嫉妬する。そういうことだった。
その時のことをだ。彼は今樹里に話すのである。
「もうね。我慢できなくなって」
「カードを盗もうとしたとか？」

「そうだったんだ。気付いたらそいつの家にこっそり忍びこもうとしていて」
「それで」
「いや、偶然だったんだ」
さらにだ。その時のことを話していく。
「そこでそいつの家の犬が鳴いて」
「あっ、犬がなの」
「立ち止まって。自分がしようとしていることに気付いて」
そこで良心が働いたというのだ。良心というものは急に動くこともあるのだ。
「それで慌ててそこから逃げ去ったよ」
「そんなことがあったの」
「本当に危なかったよ」
こう樹里に話すのだった。
「危なかったよ」
「そうね。もう少しでね」
「悪いことをするところだったよ」
「上城君にもそういうことがあったのね」
「そうだったんだ」
あえてだ。その話したくない過去を話したのだ。
「だから。妬みは」
「よくないことよね」
「よくない結果を生み出すことが多いよ」
そうだとだ。また樹里に話した。
「気をつけないとね」
「そうよね。私も」
「けれど憧れはね」
それはどうかというのだ。そちらの感情は。
「いいと思うよ」
「それはいいのね」

「うん。憧れる人や存在には近付きたいよね」
上を、そして前を見ての言葉だった。
「そうだよね」
「ええ。そうした人には」
「だから。努力するから」
それによってだ。どうなるかともいうのだ。
「いいと思うよ」
「努力して。自分が高まっていくから」
「僕もね」
「上城君も」
「そう思ってるよ」
樹里の方を向いて話す。

第三話　見てしまったものその八

「それが大事だと思うけれど」
「そうね。じゃあ私も」
「そのままでいいよね」
「うん、そうね」
笑顔で上城に応えた。そしてだった。
そんな話をして楽しく下校のデートを楽しんでいた。しかしだ。
急にだ。二人の前にだ。
突然青黒い煙が出て来て。そうして。
翼を生やした女が出て来た。その女は。
獅子の身体を持っている。乳房は人間の女だがそうした姿だった。
その姿の異形の女が出て来てだ。上城に対して言ってきたのだった。
「水ね」
「水！？」
「水の剣士」
こう彼に言うのだった。
「出て来たのね」
「出て来たって何が」
「水も出て来たとなると」
だが、だった。女は。
自分だけで言葉を続けていく。そしてだった。
「面白いわね」
こうも言ったのである。
「これはね」
「面白いって。だから何が」
「相手にして」
どうかというのだ。
「不足はないわね」

「これってまさか」
ここでだ。樹里がその女、翼を生やし獅子の身体のその女を見て言った。
「あれよ。スフィンクスよ」
「スフィンクス？」
「そう、あれよ」
こう彼に話すのである。
「そのままの姿じゃない」
「えっ、けれどスフィンクスって」
上城は驚いた顔で樹里に応えた。
「あれじゃない。男の人の頭に」
「それでライオンの身体っていうのよね」
「そうじゃないの？」
「あれはエジプトのスフィンクスだから」
また違うというのだ。
「またね。違うのよ」
「そうなんだ」
「ギリシアのスフィンクスはまた違うの」
「ううん、そうだったんだ」
「そうよ。ギリシアのスフィンクスは」
「今日の前にいる」
それなのかとだ。上城は樹里に尋ねた。
「そうだったんだ」
「ほら、朝は四本で」
樹里は今度はこの話をはじめた。
「昼は二本で」
「夜は三本だよね」
「それで歩く生き物は何かっていう謎々だけれど」
「あれだったんだ」
「そう、それを言うスフィンクスがね」

それがだというのだ。
「今目の前にいる」
「このスフィンクスなんだ」
「そう。ギリシア神話のスフィンクスなのよ」
こう樹里は話す。その話を受けてだ。
上城はスフィンクス、その異形の女を見てだ。こう言った。
「じゃあここでも？」
「悪いけれどそれはもうしないわ」
スフィンクスは剣呑な調子でそれは否定した。
「もうね」
「謎々はしないんだ」
「闘いよ」
それをするというのだ。
「それをするわ」
「闘いって」
「さあ、早く出しなさい」
上城を見据えて言い返す。

第三話　見てしまったものその九

「今からね」
「出すって何を」
「剣よ」
ここでも一方的に話すスフィンクスだった。
「それを出して。闘うのよ」
「刀なんてないし」
上城は剣と刀を同じものと解釈して話した。
「あるのは木刀だけれど」
「何かしら、それは」
「って木刀知らないんだ」
スフィンクスの言葉に少し戸惑って返した。
「じゃあ竹刀も」
「知らないわよ、そんなのは」
やはりこう言うのだった。
「全くね」
「けれど刀なんて」
背中の竹刀袋を見て言う彼だった。
「持ってないし」
「持ってないというのね」
「そうだよ。真剣だよね」
スフィンクスに対して問うた。
「そんなのは」
「そう。まだなのね」
「今度はまだって」
「まだなら早く言うのね」
今度はこんなことを言うスフィンクスだった。
「呆れたわ」

「呆れたって言われても」
「剣を持たない相手とは闘わない」
スフィンクスはまた言った。
「それが決まりだから」
「だから。決まりって何なのさ」
「神の定めた決まりよ」
「神様！？」
「そう。夜を輝かせる神」
その神が定めたことだというのだ。
「その神との約束だから」
「神様っていったら」
樹里はまた首を傾げさせながら話した。
「ええと。このスフィンクスはギリシアのだから」
「ギリシアを知ってるのね」
「一応はね」
そうだとだ。樹里もスフィンクスに話す。
「その神様になるけれど」
「とにかく。剣を持っていないのなら」
どうかと。また話すスフィンクスだった。
「帰りなさい」
「何もしないんだ」
「私はね」
彼女、スフィンクスはそうだというのだ。
「決まり。守る魔物も少ないけれど」
「魔物って？」
「私達の呼び名よ。怪物だの妖怪だのもあるわね」
「それがなんだ」
「何とでも呼ぶといいわ。とにかくね」
「今はなんだ」
「そうよ。帰りなさい」

また言うその怪物だった。
「剣を持った時にまた会いましょう。ただね」
「ただ？」
「他言は無用よ」
このことは釘を刺すのだった。
「わかっているわね。それに」
「貴女みたいな存在に会ったなんて」
ここで言ったのはまた樹里だった。

第三話　見てしまったものその十

「言っても誰も信じないけれど」
「そうでしょ。それよ」
「けれどなのね」
「そう。他言はしないことね」
「若し言えばその時は」
「容赦しないわ」
決まりがあっても。それでもだった。
「その場合に限ってね」
「そうなんだ。じゃあ」
「早く帰りなさい。何もしないわ」
スフィンクスは二人にこのことは確かに保障した。
「お家にね」
「何か知らないけれどね」
「助かったみたいね」
上城と樹里はお互いの顔を見て話をした。
「結構話のわかる怪物みたいだし」
「運がよかったかしら」
「ええ、貴方達運はいいわ」
それはその通りだとだ。スフィンクスは二人にこのことも話した。
「実際におかしな怪物達だとね」
「僕達ここで」
「剣を持っていなくても」
「食べられていたわよ」
実際にだ。そうだというのだ。
「私達は人間も食べるから」
「スフィンクスってそうだったわね」
樹里はまたギリシア神話から話をした。

「謎々に答えられなかった人を」
「食べていったわ」
「だから。それで」
「他の怪物も同じよ。やはりね」
人をだ。餌食にするというのだ。
「剣を持つ者は特にね」
「剣を持つ人間はなんだ」
「まあ。そのうちわかるわ」
スフィンクスは上城、その彼を見てまた話した。
「そうしたことがね」
「そのうちって」
「まあ。それじゃあ話は終わったから」
魔物から話を打ち切ってだった。そのうえで。
スフィンクスは姿を消した。煙の様に。そして後に残ったのは。
上城と樹里だった。二人は顔を見合わせてだ。
そのうえでだ。お互いに話すのだった。
「今のって」
「夢じゃないわよね」
「そうだよね。どう考えても」
「ちょっと確めてみる？」
樹里は首を捻りながらこんなことも言った。
「一回ね」
「確めるっていうと」
「頬っぺた抓り合おう」
実際にはそうしようというのだ。
「それでわかるわ」
「そうだね。これで夢でなかったら」
「痛いわ」
それで目が醒めてだ。わかるというのだ。
「だからそうしましょう」

「じゃあ」
「それじゃあ」
こうしてだった。お互いに頬を指で抓み合ってだ。
そのうえで抓ってみた。すると。
「痛いよね」
「痛いわ」
抓ってわかったことだった。お互いにだ。
「というとやっぱり」
「夢じゃないのね」
「ううん、他言は無用って言ってたけれど」
「こんな話誰も信じないわよ」
まさにそうだった。あまりにも非現実過ぎてだ。
二人がわかるのはそのことだった。それだけだった。

第三話　見てしまったものその十一

首を捻りそのうえでだ。現実であることを確め合った。
そしてだった。二人でだ。
その場を去ろうとした。しかしだった。
ここでだ。また出て来た者がいた。それは。
中田だった。彼は上城の姿を見てだ。こう言ったのだった。
「あれっ、あんた確か」
「あっ、貴方は」
「ああ、中田さ」
自分からだ。笑顔で言う彼だった。
「八条大学のな」
「そうですよね。剣道部の」
「何でここにいるんだい？デートかい？」
「ええ、まあ」
その通りだとだ。上城は事実を隠して応えた。
「そうですけれど」
「そうかい。デートもいいけれどな」
中田は上城のその話に特に何も思うところなくだ。それでだった。
彼と樹里にだ。こう言ったのだ。
「あんたにそこのお嬢ちゃんもな」
「私もですか」
「そう、あんたもだよ」
樹里に対しても言うのだった。
「夜道は何かと物騒だからな。早く帰れよ」
「そうですね。最近変な人が多いっていいますし」
「だからですね」
「ああ、だからな」
それでだとだ。中田は笑って述べた。

そしてそのうえでだ。こんなことも言ったのだった。
「食われないようにな」
「いえ、流石にそれは」
「ないですよ」
二人は食べられるという言葉にはすぐに突っ込みを入れた。
「人が人を食うって」
「そういうのはちょっと」
「ないですよ」
「どう考えても」
「おっと、そうだな」
中田もだ。自分で言いはしたがそれはすぐに否定したのだった。
「人間は人間を食わないよな」
「確かにそうした話もありますけれど」
「それでもちょっと」
「現実的な話じゃないですよ」
「夢みたいな」
二人は無意識のうちに先程のスフィンクスとの話を思い出しながら述べた。
「まるで化け物が出たみたいな」
「そんな話ですね」
「じゃあ化け物でいいな」
中田は屈託のない、如何にも裏がなさそうな笑みで返した。
「とにかくな。化け物に食われないようにな」
「早く帰る」
「そうするべきですね」
「ああ、そうしろ」
中田はまた二人に言った。
「早いうちにな」
「わかりました」
「確かに夜遅くはいけないですし」

真面目な二人も頷いてだ。それでだった。
中田と別れ帰路に着く。その二人を見届けてからだ。
中田は周囲を見回しだ。そのうえでだ。
誰かにだ。こう尋ねたのである。
「もういないのかい？」
「はい、もう消えたようです」
「そうなのか。じゃあ仕方ないな」
話を聞いてすぐに頷く彼だった。

第三話　見てしまったものその十二

「帰るか」
「そうされますね」
「ああ。あんたはどうするんだい？」
「私ですか」
「そうだよ。あんたは」
「同じです」
そうだとだ。声は中田に答えたのだった。
「これまでと同じです」
「じゃああれか」
「消えます」
「消えるのか」
「このまま」
「何かいつも素っ気無いな」
こう声に言う中田だった。
「あんたはそれでいいんだな」
「はい、私は」
そうだとだ。また言う声だった。
そしてだ。そのうえでだった。
声は今度はこんなことを言ってきた。
「それでなのですが」
「それで？」
「先程の彼ですが」
「ああ、あの高校生か」
「おわかりですね」
中田に対して。静かに問う言葉だった。
「あの彼もまた」
「剣士か」

「そうです。彼は水の剣士です」
「水な。じゃあ俺と逆か」
「はい、中田さんは火ですから」
そこがだ。まさに正反対だった。
「そうなりますね」
「水か。じゃああいつとは」
「戦う運命にあります」
「だよな。闘うんだよな、剣士とは」
「そして最後に残るのは」
「一人か」
中田はここで考える目になった。
「一人だよな」
「はい、一人です」
「そうなるよな。じゃあ」
中田は釈然としない顔になって。そうしてだ。
首を捻ってだ。こんなことを言った。
「やるしかないか」
「戦われますね」
「ああ。剣士に勝てば」
「はい、もらえるお金はかなりのものです」
「そうだよな。妖怪倒すよりもな」
「遥かに多いです。さらに」
そしてなのだった。さらにだった。
「最後の一人になれば」
「願いは思うがままか」
「それで何を望まれますか？」
「金は闘って得られるしな」
その問題はそれで解決できるというのだ。
しかしだ。その他にはだった。
「けれど人間と戦うのはな」

「お嫌ですか？」
「どうもな。好きになれないな」
中田は少し皮肉な感じの笑みになって話した。
「人間が相手だとな」
「そうですか」
「仕方ないな」
また言う彼だった。
「最後の一人にならないと終わらないんだよな」
「終わらなければです」
「戦いはずっと続くんだよな」
「その通りです。ですから」
「仕方ないな。やるか」
「御願いします」
「しかし。それにしても」
中田はここでまた言った。

第三話　見てしまったものその十三

「因果な話だよ。あの高校生嫌いじゃないんだけれどな」
「ですがそれが運命ですから」
「剣士の運命だっていうんだな」
「その通りです。最後の一人になるまで戦い」
「願いを手に入れるか」
「中田さんは家族を救いたいのですね」
「だからそれは手術の金さえあればいいんだよ」
これが彼の考えだった。
「まあ。金になるな」
「それですね」
「俺は金が欲しい」
それで戦うというのだ。
「そうするからな」
「では。そういうことで」
こうした話をするのだった。そして彼もまた去った。
だがその彼の後姿を見る女がいた。彼女は。
聡美だった。聡美は彼を見てその緑の目を曇らせていた。そのうえでだ。
こうだ。何も、誰もいないそこに問うたのだった。
「お姉様」
「貴女ね」
「はい、この時代でもですか」
「そうよ」
あの声がだ。聡美にも答えるのだった。
「私は。そうして」
「剣士達をこの時代でも弄ぶのですか」
「弄んではいないわ」

それはきっぱりと否定するのだった。声も。
「私は。ただ」
「共にいたいだけというのですね」
「ええ」
そうだとだ。声は苦い色で聡美に答えた。
「それだけです」
「しかしそれで」
「彼は私の全て」
声は聡美に対して。こう返してきた。
「その彼がいないと」
「ですが。彼等は」
「彼等は罪人でした」
拒む言葉はここでもだった。形こそ変えてもだ。
あくまでだ。聡美の言葉を否定してだった。
「それでどうして同情することなぞ」8
「そうして何千年もですか」
聡美はその声にだ。すがる様にして問い返す。
「彼等を互いに争わせ。命を奪っていくのですか」
「そうです。そしてその命の力こそが」
「だからです。私は」
「貴女はどうしてもですか」
「はい、彼の為に」
どうしてもという言葉でだった。声は言うのだった。
「彼が再び私に笑顔を向けてくれる為に」
「では私は」
聡美はだ。顔を上げてだった。
夜空にいる筈のその姿を見てだ。そのうえでの言葉は。
「その貴女を必ず」
「止めるというのですね」
「彼が貴女にとって大事な人なら」

それならばだというのだ。
「貴女は私にとって大切な人だから」
「そう想ってくれているのですね」
「ですから」
そこにある姿を見てだ。聡美はさらに話す。
「私は必ず貴女を止めます」
「そうしますか」
「必ずです」
こうしたやり取りのうえでだった。聡美は今は声の主と別れたのだった。
そして一人夜の中に消えた。深い憂いと共に。

第三話　完

２０１１・７・２２

第四話　中田の告白その一

確かに誰にも言わなかった。しかしだ。
上城と樹里は二人になるとだ。いつもこの話をするのだった。
「あのスフィンクスだったね」
「そうよね。実際にああいうのがいるだけでも驚きだけれど」
「しかも。剣がどうとかって」
「どういうことかしら」
首を捻ってだ。二人は話すのだった。
二人は今学校の校舎の屋上で昼食を食べながら話している。食べているのはパンと牛乳だ。学校の購買部で買ったものだ。
それを食べながらだ。上城は言うのだった。今食べているのはあんパンだ。
「僕が。っていうけれど」
「水ってね」
「水臭いって意味じゃないよね」
「まさか。それはないわよ」
樹里は上城の半ば冗談めいた言葉にだ。こう返した。
「上城君って水臭くはないから」
「そう。じゃあ何かな」
「うん、だから余計にね」
「わからないわよね」
二人で話していく。
そのわからないという言葉の中でだ。樹里はジャムパン、ジャムはイチゴのものだ。それを牛乳と一緒に口の中に入れながらだ。
彼女はだ。こう言うのだった。
「水ねえ」

「火と水？」
「そんな感じの話だったけれど」
「何かの謎々かな」
こんな風にも考える上城だった。
「ほら、スフィンクスだし」
「そうよね。だとしたら」
「水？僕が？」
「何かを消すのかしら」
「それか飲むか」
水からだ。二人はこうも考えていく。
「ううん、幾ら考えても」
「わからないわよね」
「どうもね」
二人は今は幾ら考えてもだった。
わからずにだ。結局今はだった。
パンを食べそうしてだ。昼食を済ませることにした。その中でだ。
樹里は今食べているクリームパンについてだ。こう言った。
「この学校のパンって前から思ってたけれど」
「八条パンのパンだよね」
「美味しいわよね」
中のクリームも味わいながら話す。
「優しい味で」
「パンも柔らかいしね」
「そうよね。しかも安いし」
その安さの理由はだ。ここにあった。
「やっぱり。学校の購買だと」
「そりゃ高いと売れないしね」
「ええ。あと作ってるパンも」
「これとかだよね」
上城はすぐにサンドイッチを出してきた。かなり分厚いチキンカ

ツサンドだ。
それを樹里に見せながらだ。そうして話していく。
「サンドイッチだってね」
「美味しいわよね」
「そうそう。一つ一つにボリュームがあって」
「味もいいし」
「恵まれてるわね」
パンについてもだ。そうだった。
「あとだけれど」
「そう、あとよね」
「飲み物も充実してない？」
「してるわね」
それもだった。いいというのだ。
「牛乳も色々あって」
「野菜ジュースもあってね」
「何かパンだけでも飽きないよね」
「この学校にいたら」
そんな話をしながらパンを食べている二人だった。それが終わってからだ。
二人で教室に戻ると。そこではだ。
新聞が読まれていた。その新聞は。

第四話　中田の告白その二

「んっ、スポーツ新聞？」
「違うみたいよ」
それではないとだ。樹里が上城に話した。
「普通の新聞みたいね」
「そうなんだ」
「ええ。ただ」
その読まれている新聞を見る。するとだった。
そこに写真で出ていたのは。
「中田さんだね」
「そうね。あの人よね」
剣道着に防具の彼がそこにいた。何とだ。
全国大会で優勝したと書かれていた。それを見てだ。
上城がだ。最初に言った。
「凄いね。全国大会で優勝って」
「そうよね。そこまで強いのね」
「強いとは思ってたけれど」
彼にとってもだ。予想以上だった。
それでだ。上城はこんなことも言った。
「僕も努力して」
「全国大会優勝？」
「無理かな、それは」
自分で言ってすぐにだ。苦笑いで打ち消したのだった。
「そこまでは」
「まあ。努力次第ね」
それ次第と答える樹里だった。
「結局諦めたらそれで」
「それで終わりだっていうんだね」

「そう。諦めたらね」
本当にだ。それで終わりだというのだ。これが樹里の言葉だった。
それでだ。上城にハッパをかけるようにしてこうも言った。
「上城君もあれよ。新聞にああしてね」
「載れる様にだね」
「頑張ったらいいのよ」
こう言うのだった。
「そうすればいいのよ」
「そうだね。努力してね」
「剣道もよね。稽古すればするだけ」
「どの武道、スポーツでもそうだけれどね」
「じゃあ。そうしたらね」
「いいね」
「そう思うわ」
こう上城に話す。
「やっぱり人間努力よ」
「言い換えると努力しないと」
「人間駄目よ」
そうなるのだった。逆説的にはだ。
そうした話もした。上城の学園生活は今は平和だった。
しかしだ。まただった。
部活の後の下校時間にだ。上城は。
中田と会った。その彼を見てだ。挨拶の後で言ったのだった。
「新聞見ました」
「ああ、あれな」
「凄いですよね」
目を輝かせてだ。彼にこう言ったのである。
「全国大会で優勝なんて」
「まあなあ。調子もよかったしな」
当人はというと軽い調子で返してきただけだった。

「特にな」
「凄くないっていうんですか？」
「いや、そう言ったら嫌味だよな」
「嫌味になります？」
「そうなるだろ。まあだからな」
言葉を選んでだ。こう言ったのだった。
「凄いよな。俺って」
「はい、凄いです」
「だよな。全国大会優勝は嬉しいよ」
はにかんだ顔での言葉だった。

第四話　中田の告白その三

「正直やったって感じだよ」
「どうしたら全国大会優勝なんてできるんでしょうか」
「あれだな。戦ってるからだな」
「戦う？」
「だからだろうな」
こう話すのだった。
「だからだな」
「戦うっていいますと」
「色々あってな」
何かを隠す口調での言葉だった。
「まあ。いつもそうしてるからな」
「戦ってるんですか」
「実戦が一番なんだよ。強くなるには」
「実戦ですか」
「ああ、そうなんだよ」
それだというのだ。
「戦うのが一番いいんだよ」
「それじゃあ」
中田の話を聞いてだ。上城は。
彼の常識からだ。こう言ったのだった。
「稽古ですか」
「稽古！？」
「それですよね」
また言う。
「やっぱり」
「いや、まあな」
「まあな？」

「実戦っていっても色々だからな」
「色々っていいますと」
「あれだ。とにかく実際に刀持ってやることだよ」
中田はこの辺りはあえてぼかして話した。そしてそれを聞いた上城はというと。
まさか彼が実際に戦っているとは考えずにだ。ただこう言うだけだった。
「そうですか。一本勝負とかかかり稽古とかは」
「まあいいな」
中田はまたぼかして話す。
「とにかく人間な」
「努力ですよね」
「頑張るんだな、あんたも」
「全国大会は無理でも」
それでもだとだ。彼なりに考えて言う。
「頑張りますね」
「ああ、頑張れ」
今度は屈託のない笑顔で言う中田だった。そして上城もだ。
彼の言葉の背景までは考えずだ。そのうえでだ。
稽古に身を打ち込むことにしたのだった。それが彼の考えだった。
上城は中田と笑顔で別れた。彼はそれで終わった。
だが中田はというと。彼と別れてから。
声を聞いた。あの声をだ。
「来ます」
「そうか、またなんだな」
「それでどうされますか？」
「どうするって選択肢は一つしかないだろ」
「戦われますね」
「ああ。相手は何匹だ？」
「一匹です」

声はこう彼に答えた。
「一匹ですが」
「一匹ね。それでも尋常じゃない強さなんだろうな」
「強いと思います」
それは間違いないとだ。声も言う。
「何しろミノタウロスですから」
「ああ、あれか」
ミノタウロスと聞いてだ。中田は納得した顔で頷いた。
そのうえでだ。彼は言った。
「牛の頭のでかい奴だよな」
「そうです。かつてミノス王の迷宮にいた」
「あいつか。あいつが出て来るのか」
「気をつけて下さい。ただ大きいだけではありません」
「力も強くてあれだな」
中田もミノタウロスについては知っている。ギリシア神話において最もよく知られている魔物の一つだ。だからこそ言えるのである。

第四話　中田の告白その四

ミノタウロスというとだ。その恐ろしさの理由は。
「人食うしな」
「かつてラビリンスでは人を生贄にしていました」
「だよな。牛が人食うのか」
「半分は人間ですから」
「ああ、それでか」
半分人間と聞いてだ。中田は幾分か納得できた。
「牛だったら草しか食わないが人間だったら肉食うしな」
「そうです。しかしそれはそれで」
「人間が人間食うか」
「確かこの時代の言葉では」
「カニバリズムだったな」
一種の異常な精神病の一つとみなされることもある。人間が人間の肉を口にするということは古代からあったのだ。当然ギリシアでもだ。
「そう言ったな」
「そのカニバリズムです」
「厄介な奴だな」
また言う中田だった。
「俺も油断したらミノタウロスにだよな」
「食べられたいですか？」
「冗談だろ。誰が食われたいんだよ」
中田は笑ってそれはないと答えた。
「そんな奴いるか？」
「そういうことですね」
「食われる位ならな」
それ位ならだと。言いながらだった。

その両手にそれぞれ刀を出す。紅蓮の刀をだ。
そしてそのうえでだ。前を見る。その彼にだった。
声がだ。警戒する声で話した。
「来ました」
「前からかよ。後ろからかよ」
「前からです」
「ああ、来たな」
声が言ったその瞬間にだった。
三メートルはあろうかという半裸の筋骨隆々の大男が出て来た。
だがその頭は雄牛のものだ。
そしてその手には巨大な両刃の戦斧がある。身に着けているのは白い腰巻だけで漆黒の身体においてよく目立っている。その巨人こそが。
「あいつか」
「ミノタウロスです」
「そのままの姿だな」
中田は人身牛頭のその巨人を見て言う。
「神話の」
「強さもです」
声はそれもだという。
「そのままですから」
「一歩間違えたらか」
「はい、食べられてしまいます」
「スリル満点だな」
話を聞いてだ。中田は。
シニカルな笑みを浮かべてだ。こう言ってだ。
そのミノタウロスを待ちだった。そのうえで。
魔物がだ。斧を上から振り下ろすのを見た。そこでだ。
身体を右に動かす。それで。
斧の一撃をかわす。斧は派手な音を立てアスファルトを破壊した。

硬い筈のそこはまるで豆腐の様に砕けてしまっていた。
それを横目に見つつだ。中田は。
魔物の懐に飛び込んだ。そうしてだ。
その腹にだ。右の刀を突き刺した。
突き刺したそこからだ。赤い炎が怒る。それで焼こうとするのだ。
その中でだ。彼はこうも言った。
「さて、これでな」
「これで？」
「ステーキだな」
笑ってだ。こう声に言った。
「塩と胡椒が欲しいな」
「あの、それは」
「余裕だっていうんだな」
「そう聞こえますけれど」
「戦いってのは焦った方が負けるんだ」
中田の考えの下にだ。それで言うのだった。

第四話　中田の告白その五

そのうえでだ。さらにだった。
左の刀をだ。左から右にだ。横薙ぎに払った。
それで今度は斬った。しかしだ。
魔物はまだ倒れない。それどころから。
身体を思いきり引いてだ。突き刺さった刀をそれで抜き。
燃え上がる二つの傷を何ともせずにだ。再びだ。
斧を振るう。今度は何度も何度もだ。
無造作なまでに振るい中田を叩き斬ろうとする。彼はそれを巧みに動きかわしつつだ。
そのうえでだ。また声に尋ねた。
「なあ、こいつな」
「体力ですね」
「しぶと過ぎないか？」
こう声に尋ねたのである。
「これはあんまりだろ」
「ですから。神話のままの強さですから」
「元々すげえしぶとかったのか」
「はい」
その通りだとだ。声は答えた。
「そうです」
「参ったな、こりゃ」
中田はその斧の攻撃をかわしながらまた言う。
「一撃でも受けたら終わりだしな」
「そして貴方の攻撃は」
「中々聞かないな」
「そうですね」
まあにそうだと言ってだ。それでだ。

再び攻撃を浴びせる。今度は。
刀をだ、まずは交差させてだ。
それぞれ下から上に一閃させる。それでだ。
アスファルトに紅蓮の炎を走らせ。それで。
魔物にぶつけ足から焼く。その炎で動きを止め。
再び突進してだ。魔物の膝に足をかけ。
一気に跳びその途中にだ。左の刀を一閃させた。
それで魔物を両断しそのうえで焼く。これで決まりだった。
そうしてからだ。着地した彼が見たものは。
今まさに焼かれんとする魔物だった。魔物は立ったまま両断されてそのうえで。
漆黒の身体を焼かれ消えていっていた。そこまで見てだ。
中田は満足した顔になりだ。声に言った。
「これで決まりだな」
「はい、ミノタウロスは滅びました」
「一時はどうなるかって思ったけれどな」
「炎を走らせそしてですね」
「ああ、一気に真っ二つにして焼いてやった」
そうしたと。己の闘いを振り返り話す。
「これならな」
「どの様な体力はある魔物でもですね」
「ああ、倒せる」
それができるというのだ。
「そう思ってな」
「考えられましたね」
「焦ってなかったからな」
それでだ。考えられたというのだ。
「できたんだよ」
「決して焦らないですか」
「だから。焦ったら負けなんだよ」

中田は燃え盛る魔物を見ながらまた言う。
「何でもな」
「焦らない。だから貴方は強いんですね」
「少なくとも強さの元の一つだな」
「そうですね」
「ああ、それで今度の金は」
「はい、もうすぐ出ます」
見れば魔物は今まさに焼き尽くされんとしていた。その後でだというのだ。
そしてその言葉通りだ。それが出て来た。
黄金の棒が数本だ。魔物が消えてから出て来た。それを手に取りだ。
中田は満足した顔になりだ。刀を消してから声に話した。
「報酬だな」
「そしてそのお金で」
「ああ、家族がまた助かる」
こう言うのだった。
「いいことだよ」
「それでなのですが」
「剣士だよな」
「はい、剣士を倒せばです」
彼と同じ立場のだ。その剣士を倒せばというのだ。

第四話　中田の告白その六

「怪物を倒すよりさらにです」
「金に力が手に入るんだよな」
「そうです。ですから」
「好きになれないな」
しかしだ。中田はというと。
難しい顔をしてだ。こう声に言ったのである。
「どうしてもな」
「人と戦うことはですか」
「甘っちょろい考えかも知れないけれどな」
こう言いながらだ。声に返す。
「それでもな」
「人と戦い倒すことはですか」
「したくない」
こうだ。はっきりと言う彼だった。
「化け物相手ならどれだけでもやるがな」
「そうですか。しかし」
「望みを果たす為には」
「最後に一人にならなければいけません」
声の感じは穏やかだ。だが中田にとってはだ。
峻厳そのものの言葉だった。実に厳しい。
その厳格な言葉を受けてだ。彼はまた言った。
「だよな。しかもだろ」
「はい、最後の一人になるまでです」
「戦いは続けられるか」
「そうです。魔物も永遠に出て来ます」
「手術代だけでいいんだけれどな」
中田は苦笑いになってこう言った。

「けれどどうもな」
「ご両親と妹さんはどうですか？」
「今は延命にしかなってない」
金を稼いでいるそれがだ。それの費用になっているのだ。
それに加えてなのだ。家族を助けたければ
「やっぱり手術が必要だ。それにな」
「それに？」
「手術は絶対に成功するそうだ」
それは間違いないというのだ。
しかしだ。中田は顔を曇らせてまた言った。
「けれどそれでもな」
「完治はですか」
「無理みたいだな。怪我が予想よりずっと酷くてな」
「では最後の一人になりです」
そのうえでだというのだ。声は。
「願われれば」
「皆元通りになるんだな」
「そうなります。ですから」
「やるしかないんだな」
中田は溜息をついた。しかしそれでも言ったのだった。言うしかなかった。
「そうなんだな」
「そうです。その為には」
「わかったさ」
浮かない顔でだ。首を横に振って項垂れてだ。
中田は声に答えた。そうして言うのだった。
「他の奴ともな」
「戦われますね」
「ああ、そうする」
こう答えた彼だった。そう答えるしかなかった。

「これからもな」
「はい、それでは」
「じゃあ。今は金はこうして貰ったしな」
手の中のその黄金の棒を見てだ。そのうえでの言葉だ。
「とりあえずはこれでいいよな」
「今は」
「これで帰るさ」
そうするとだ。中田は声に答えた。
「じゃあな」
「はい。それでは」
こうした話をしてだった。声も別れの言葉を言った。
その別れの言葉を受けてだ。中田はその場所を去ろうと踵を返した。だがその彼の前にだ。
上城がいた。そうしてだ。
表情を強張らせてだ。彼はそこに立っていた。
何も話さない。しかしだ。それでも目で言っていた。
その目を見てだ。中田も言う。

第四話　中田の告白その七

「見たんだな」
「それは」
「何時から見てたんだ？それで」
「途中。財布を落としてることに気付いて」
それで戻ったというのだ。見れば上城のその手にはだ。
黒い財布がある。それを落としたことは明らかだった。
その財布を見ながらだ。彼は話す。
「それで戻って来て」
「見たんだな」
「あの牛の怪物が出た時から」
その時代からだというのだ。
「見るつもりはなかったですけれど」
「いや、あんたもな」
しかしだ。中田はだ。
その上城にだ。こう言った。
「聞いた筈だよ。水なんだろ」
「そのことですか」
「ああ、あんたは水の剣士なんだよ」
「剣士って」
ここでだ。あの声がだった。
上城に対してだ。こう言ってきたのだった。
「剣士は全員で十三人です」
「十三人！？」
「はい、それだけの剣士がいて」
それでだとだ。さらに言うのだった。
「残るのは一人です」
「一人・・・・・・」

「つまりあれだよ」
声と入れ替わる形でだ。中田も上城に話す。
「俺達は魔物、さっきのな」
「あの牛の化け物ですよね」
「もう他にも会ってないか？」
中田はそのことも推察して彼に尋ねた。
「何かな。さっきのとは別に」
「実は」
ここでだ。中田に対してあのことを話した。
「前にスフィンクスですか？」
「彼女ですね」
声がだ。スフィンクスと聞いて上城に応えてきた。
「あの獅子の身体に女の頭と胸を持ち」
「それで翼が生えていました」
「そう、彼女ですね」
声はだ。知っているといった感じだった。
その声でだ。あらためて話すのだった。
「彼女と会ってですか」
「その水のことを言われました」
「そうでしょうね。しかしです」
「あれは事実だったんですか」
「事実だからこそです」
ここでだ。声は上城にこうも話した。
「貴女は彼女と会ったのです」
「そういうことですね」
「そうなります。最初は信じられませんでしたね」
「何ていいますか」
上城は素直にだ。声に対して答えた。
「あれですね。実際にああした魔物がいるのは」
「それ自体がですね」

「想像できないでしょ。あんな非現実的な存在」
「現実とは曖昧なものです」
その現実についてはだ。声はこう言って上城に返した。
「実際にどうかというとです」
「ああした存在も成り立つんですか」
「そうです。現実は神々の匙加減でどうとでもなります」
「神々！？」
「そう、神々のです」
どういった神々なのかは言わずにだ。
声はだ。あらためてこうも話してきた。
「それでどうとでもなるものですから」
「何かよくわからないですけれど」
「つまりです。神々の裁量一つで」
「ああした魔物もですか」
「この世に存在します。そうしてです」
声は話の本題に入った。それこそがだった。

第四話　中田の告白その八

「剣士もまたです」
「いるんですか。十三人も」
「貴方も含めて」
「それでだ」
また中田が上城に話してきた。
「願いを適えたければな。お互いに戦ってだ」
「願いをですか？」
「願いは。まあ何でもいいみたいだな」
そのこと自体についてはだ。無頓着な感じだった。
「けれど。願いを適えたいとな」
「あの、願いが特になかったら」
その場合はどうなのか。上城はいぶかしむ顔になりその場合について尋ねた。
「別に戦わないでいいですよね」
「そうはいきません」
しかしだった。このことはだ。
どうかとだ。声はすぐに言ってきた。
「剣士になるのは運命ですから」
「運命って」
「はい、運命だからです」
それでだ。どうかというのだ。
「必ず戦わなければならないのです」
「そんな、無茶苦茶じゃないですか」
「まあそうだよな」
中田もだ。その何が何でも戦わないといけないことについては同意だった。
だがそれと共にだった。彼はこうも言った。

「けれど願いがない人間なんているか？」
「そのことですか」
「ああ。そんな奴いるか？」
問うのはこのことだった。
「何もない奴なんてな」
「それは」
「そうだろ。誰だって大なり小なりな」
「願いはあるからですね」
「それを適える為に戦ってだよ」
「最後の一人になって」
「ああ、願いを適えるんだよ」
そのことをだ。上城に話した。
「どうだよ。願いがなくてもな」
「戦わないといけなくて」
「最後の一人になればな」
戦った結果だ。そうなればというのだ。
「願いが適うんだよ」
「僕の願いが」
「で、どうするんだ？」
中田はあらためて上城に尋ねた。
「あんたはな」
「僕は」
「一つ言っとくけれど戦うことからは逃げられないぜ」
それはだ。絶対だというのだ。
「その選択肢は絶対なんだよ」
「じゃあ後は」
「願うかどうかだよ」
それだというのだ。
「どうするんだ、それで」
「それは」

「水の剣士よ」
声もだ。また彼に言う。
「剣ですが」
「あっ、それですか」
「それは出ろと思えばです」
「出て来るんですか」
「貴方の手の中に」
そこにだ。出て来るというのだ。
「そうなります」
「どんな形の剣でもな。あんたがイメージすればな」
どうかとだ。ここでも話す中田だった。
「手の中に出て来るんだよ」
「それでその剣で」
「戦うんだよ。俺だってな」
「中田さんもですか」
「ほら、こうしてな」
実際にだ。彼はここで刀が出ろと念じた。するとだ。
その両手にだ。二本の刀が出たのだった。
その赤い燃え盛る炎を思わせる刀をだ。上城に見せながらだった。
そのうえでだ。また上城に言うのである。

第四話　中田の告白その九

「念じれば出て来るんだよ」
「日本刀ですか」
「だから。どんな剣かはな」
それはだというのだ。このことはまた話す彼だった。
「剣士それぞれがイメージする奴だからな」
「人それぞれですか」
「その剣士のな。じゃああんたはどんな剣なんだ?」
どういったものをイメージするか。それを問うた中田だった。
「ちょっと念じてくれよ」
「それじゃあ」
その言葉を受けてだった。上城は。
実際にだ。自分の両手の平を見ながらだ。
念じるとだ。出て来たのは。
青い刀身だった。日本刀だ。ただしだ。
その長さはかなりのものだ。一メートル半に達する。そしてその刃は青く冷たく輝いている。その刀を見て中田はこう上城に言った。
「それだよ」
「この刀がですね」
「ああ、あんたの剣だよ」
それこそがだというのだ。
「そうなるからな」
「じゃあこの刀で」
「そうです」
また声が言ってきた。中田に代わって。
「魔物と。そして外の剣士達と」
「戦ってそうして」
「貴方の願いを適えるのです」

「それが僕の運命なんですね」
「既に決まっていることです」
そのことからはだ。どうしても逃れらないと告げる声だった。
「そういうことですから」
「わかりました」
上城は納得できなかった。しかしだ。
それでもだ。憮然としながらも声に対して頷いてみせたのだった。
そのうえでだ。中田を見てだ。彼に問うた。
「なら今からですか」
「ああ、俺とか」
「戦わないといけないんですか？」
彼を見てだ。問うたのである。
「そうなんでしょうか」
「ああ、今はな」
「今は？」
「俺はこれで帰るからな」
そうするとだ。彼は軽い笑顔で上城に告げた。
「今日はなしにしておこうな」
「戦わないっていうんですか」
「そうするさ。じゃあな」
挨拶をして右手を軽くあげてだ。それから上城に背を向けた。
そのまま去る。上城はその背を見送るだけだった。その彼にだ。
声がだ。ここでも言ってきたのだった。
「では今日はです」
「これで終わりですか」
「はい、そうなります」
まさにそうだというのだ。
「とりあえず貴方は剣を手にされました」
「それでこの剣で」
「貴方の願いを適えて下さい」

「僕の願いって」
そう言われてもだった。
上城は考える顔になってだ。それでだった。
洸だ。声に対して答えた。
「まだそれは」
「ありませんか」
「はい、ないです」
そうだというのだ。
「いきなりですし。それに」
「それにとは」
「僕今の状況で満足してますし」
だからだ。それでだというのだ。
「特に何も」
「そうですか。それではです」
「それではって？」
「願いは見つけて下さい」
それはだ。そうしてくれという声だった。

第四話　中田の告白その十

「しかしです」
「戦いはですか」
「それはしてもらいます」
戦いについてはだ。そうしてくれというのだ。
「宜しいでしょうか」
「それが運命だからですね」
「はい」
まさにだ。その通りだというのだ。
「だからです」
「僕は戦う運命にあった」
「まあそういうことだ」
中田がここでも彼に言う。
「御互い頑張ろうな」
「って。十三人の中で一人ですよね、残るのは」
「ああ、そうだよ」
「じゃあ僕も中田さんも」
「その時はその時だ」
中田はあえて明るく笑ってだ。上城に言った。
「まあ。その時以外はな」
「それ以外の時は」
「楽しくやろうぜ。お互い憎い訳じゃないしな」
「憎いなんて」
こう言われてもだった。上城は。
困惑した顔でだ。こう答えたのだった。
「そんなことは」
「御互い知り合ったばかりだしな」
「はい。それに」

しかもだとだ。上城はさらに言う。
「僕は中田さんのことは」
「嫌いじゃないか？」
「そうです」
まさにそうだというのだ。
「それなのに。戦うのは」
「因果だよな。俺もそう思うさ」
中田もだ。このことは苦笑いと共に言う。
しかしだった。それと共に言うのだった。
「けれど。どうしてもな」
「戦わないといけないですか」
「俺には願いがあるしな」
「願い？」
「そのことは今はな」
どうかというのだ。今は。
「話さないでおくさ」
「そうですか」
「何か。言う気になれなくてな」
それでだという彼だった。
「悪く思ってくれるなよ」
「別に悪くは」
上城は思わなかった。実際にだ。
だが、だった。このことはどうしても言わずにはおれず。
中田にだ。また言ったのである。
「けれど。他の剣士の人達とも」
「俺達を入れて全部で十三人な」
「逃げることはできなくて」
「はい、それは無理です」
声もだ。逃げることはできないというのだ。
そうしてだ。また彼に告げた。

「ですから」
「わかりました。それでは」
上城は自分の手にあるその長い刀を見てまた言った。
「僕も戦います」
「戦わないとな」
どうなるかもだ。中田は彼に話した。
「生き残れないぜ」
「その為にもですね」
「ああ、戦うんだな」
「ですか」
「そういうことさ。じゃな」
ここまで話してだ。中田は。
上城に背を向けて。こう言ったのだった。
「今日はこれでな」
「帰られるんですか」
「ああ、そうする」
それでだというのだ。背を向けたのは。

第四話　中田の告白その十一

「また会おうな」
「今日は戦うことは」
「ああ、しない」
それはしないと。中田ははっきりと告げた。
「気が向かないんだよ」
「あの、気が向けばって」
「いいだろ。今命のやり取りなんてよ」
したくない、これが中田の本音だった。
その本音をだ。上城もわかってだった。
「そうですか。中田さんも」
「御互いに因果だな」
「こんな戦いって」
「まあ話はこれで終わりな」
上城にそれ以上は言わせずにだった。
中田はその場から消えた。そしてだ。
夜道を歩きながらだ。声に言うのだった。
「なあ」
「あの少年のことですね」
「他に十一人だよな」
「はい、全員で」
「あまりな。やっぱりな」
こうだ。中田は浮かない顔で声に言うのである。
「好きになれないな」
「人と戦うことはですか」
「そっちがメインだよな」
怪物と戦うよりだ。そちらがだと声に尋ねる。
「だよな」

「はい、そのうえで願いを適えるのですから」
「俺もな」
中田もだ。どうかというと。
「親父もお袋も美和子もな」
「助けたいですよね」
「手術は金で何とかなるさ」
それはだ。怪物達を倒してだった。
「剣士を倒したら怪物のそれとは比べものにならない位にだよな」
「黄金が手に入るのも事実です」
「けれど怪物で済むのなら」
それで充分な金が入るならというのだ。彼は。
「それでいいんだよ」
「ですが」
「ああ、完治しないからな」
黄金でどうにかできるのは手術だけだった。
「一生寝たきりらしいからな」
「三人共ですね」
「だから完治させる為にな」
その為にだった。彼も。
「生き残るさ、俺は」
「あの子も」
「正直考えたくないさ」
上城と戦う、そのことはだった。
「あいつ悪い奴じゃなさそうだしな」
「悪人なら?あの中学教師の様な者なら」
「容赦しないさ」
そうした輩にはだ。躊躇せずにだというのだ。
「ああした風に叩き潰してやるさ」
「そうしますね」
「あくまで悪人ならな」

そうするとだ。中田は言い切る。
「そうした奴は世の中にいたら駄目だからな」
「それでもですね」
「いい奴にはそうしないさ」
強い声で言う彼だった。
「絶対にな」
「ですが」
「ああ、わかってるさ」
それはだと。また言う彼だった。

第四話　中田の告白その十二

「それはな」
「難しいですね」
「世の中はどれもこれも難しいさ」
シニカルにだ。こんなことも言う彼だった。
「それもわかってるさ」
「それなら」
「さて、それならな」
ここでだ。中田は言葉を一旦止めてだ。それからだった。
そのうえでだ。周りに言うのだった。
「今日は本当にこれで終わりでな」
「お家に帰ってですね」
「風呂に入って寝るさ」
そうすると言ってであった。それでだ。
彼は実際に家に帰り休むのだった。そうしたのだ。
そしてだ。上城は。
家に帰るとだ。すぐに母親にこう言われた。
「今日も遅かったわね」
「あっ、御免」
「部活だから仕方ないけれど」
それでもだとだ。母は彼に言うのである。
「それでも。夜は色々と危ないから」
「うん、そうだね」
「気をつけてね」
言うのはこのことだった。
「せめて帰る前に電話入れてね」
「そうするよ」
「ましてあんたには樹里ちゃんもいるし」

彼女とのことは既に両親も知っているのだった。
「だからよ」
「そうだよね。あの娘のこともね」
「気をつけてね」
「そうするよ」
「だからね」
また話してだ。そのうえでだった。
彼はテーブルに着いた。その息子にだ。
母親はあるものを出してきた。それは。
「あれっ、これって」
「そう。スパゲティよ」
それだというのだ。見ればナポリタンだった。トマトソースの中にマッシュルームや大蒜、スライスされたそれが見える。
「今晩はこれよ」
「スパゲティって」
そのことにだ。上城は言うのだった。
「今茹でたんだよね」
「そうよ。今ね」
「有り難う」
彼は心からだ。母のその気遣いに感謝の言葉を述べた。
「待っていてくれてそれで」
「当然じゃないの？」
「当然って？」
「だから。美味しいもの食べたいでしょ」
「うん」
それはその通りだった。彼にとっても。
それで答える。その彼にだった。
またただ。母が話す。
「だから。スパゲティは待っていて」
「それでソースは」

「それは温めなおしてね」
それでだというのだ。
「今こうして出したのよ」
「本当に有り難う」
「いいのよ、当然のことだから」
だからだと答える母だった。そしてだ。

第四話　中田の告白その十三

あらためてだ。息子に言うのである。
「温かいうちにね」
「食べてだね」
「ええ。ただしね」
「ただし？」
「今日は御飯は少ないわよ」
それはだというのだ。
「悪いけれどね」
「ああ、スパゲティだから」
「スパゲティに御飯はね」
「白い御飯とだよね」
「ちょっと。合わないから」
リゾットならともかくだというのだ。
「だから御飯は少なめにしたのよ」
「成程ね」
「それでだけれどね」
さらにだった。母はここでまた我が子に話す。
「飲むかしら」
「ああ、ワイン」
「全く。他は何も悪いところはないのに」
「だってさ。皆さ」
「飲んでるっていうのね」
「この町じゃそうじゃない」
彼等のいるだ。その八条町はだった。
「だから僕もね」
「わかっているけれどね」
「それでもなんだ」

「納得はできないわ」
こう我が子に言うのだった。
「お母さん大阪生まれだから」
「大阪じゃ未成年は飲まないよね」
「おおっぴらにはね」
八条町ならともかくだった。そこは。
「飲まないわよ」
「そうだったね。確か」
「そうよ。けれどまあ」
「ああ、今はいいよ」
母がそのワインを出そうと席を立とうとしたところでだ。上城は母に言った。
「御風呂に入ってそれでね」
「勉強するからなのね」
「うん、だからね」
酒は今はいいというのである。
「それはいいよ」
「わかったわ。それじゃあね」
「悪いけれどね」
「お母さんが飲むわ」
こう来た母だった。自分がだというのだ。
「そうさせてもらうわ」
「ああ、お母さんが飲むんだ」
「そうよ。甲州ワインね」
日本のだ。そのワインを飲むというのだ。
「それよ」
「赤？白？それともロゼ？」
「三つ共あるわ」
何とだ。ワインは一種類ではなかった。
「お母さんは赤飲むから」

「じゃあ僕は白で」
「お父さんはロゼね」
「それでいこうね」
上城は微笑んで母に話した。
「何か。ワインも好きだけれど」
「それとビールもよね」
「うん、好き」
実際にそうだった。彼はビールもいけるのだ。
だがビールについてはだ。母はこう言ったのだった。
「けれどビールはあまり身体によくないから」
「痛風だよね」
「そう、それ」
そのだ。痛風によくないというのだ。
「だから気をつけてね」
「痛風って確か」
「お爺ちゃんもなったことあるから」
上城から見て祖父であり母から見て父である。その人がなったというのだ。
「それで凄く苦しんだからね」
「お爺ちゃんビール好きだったからね」
「それもね。ドイツ式だって言って」
「ドイツ式？」
「生卵をビールの中に入れて飲んでたのよ。休日の朝はいつも」
「それってかなり危ないよね」
「だから痛風になったのよ」
まさにだ。痛風になる王道だがだ。ドイツでは実際にこうした朝食で済ませる人もいる。ビールは飲むパンだからこれでいいのだ。

第四話　中田の告白その十四

しかしだ。それでもだ。そうした飲み方をすればどうなるかは自明の理でありだ。ドイツでは痛風が国民病になっているのだ。

それでなのだ。上城の母方の祖父もなのだ。

「そうなってから泣いても遅いわよ」

「だから今のうちから」

「気をつけなさい」

くれぐれもといった口調だった」

「わかったわね」

「うん、よくね」

上城は真剣な顔で母の痛風の話に頷いた。

「そうするよ」

「十代から気をつけないとね」

「病気は若いうちから」

「気をつけないといけないから」

こうした話をしてなのだった。

上城は今はスパゲティと白い御飯だけを食べそこから風呂に入り勉強して休んだ。それをして終わらせたがそれでもだ。戦いのことは常に頭の中にあったのだった。

それでだ。次の日の朝にだ。一緒に登校する樹里にだ。

難しい顔になりだ。昨夜のことを話そうとした。しかしだ。

それより前にだ。彼女はこう彼に言ってきた。

「あのね」

「あのねって？」

「今日の放課後ね」

その時にだ。どうかというのだ。

「ほら、あの大学の留学生の人から」

「ああ、銀月さんに」

「あの人から連絡があったのよ」
「連絡！？」
「昨日お家の玄関に入ろうとしたその時にね」
まさにだ。その時にだというのである。
「たまたま銀月さんが私の家の前を通り掛かって」
「あの人の部屋って君の家に近かったの？」
「そこまではわからないけれど」
だがそれでもだとだ。樹里は首を捻りながら上城に話す。
「会ってね。それでね」
「それでなんだ」
「今日の放課後。会いたいって言ってきたのよ」
「君だけじゃなくて僕も」
「そう、上城君も」
そのだ。彼もだというのだ。
「二人で来て欲しいって」
「一体何なのかな」
「そこまではわからないけれど」
「二人で来て欲しいっていうんだね」
「そうなのよ。おかしいわよね」
「どういうことかな」
上城もだ。首を捻りながらだった。
そのうえでだ。こう言うだけだった。

第四話　中田の告白その十五

「あの人が僕達にって」
「剣道のことかしら。それとも」
「取材のこと？」
「ううん、わからないわ」
考えられるケースを出してもだ。結局はだった。
樹里にもさっぱりわからずにだ。難しい顔で彼女も首を捻りだ。
こう言うだけだった。そうしてだった。
わからないままだ。上城に話した。
「まあとにかくね」
「今日の放課後だよね」
「私達の部活が終わってからね」
「ああ、それからでいいんだ」
「駅前の喫茶店に来て欲しいって」
「ああ、マジック」
そこにだった。来て欲しいというのだ。そこは二人だけでなく八条学園の関係者なら誰もが知っている馴染みの喫茶店である。
そこに来て欲しいと言われてだ。上城は言った。
「あそこならよく知ってるし」
「行きやすいわね」
「行きやすいことは行きやすいよ」
それはだとだ。樹里にも話す。
「けれど何なんだろう」
「お話のことよね」
「うん、何だろう」
二人で首を傾げさせる。それぞれ。
「本当に」
「とにかく行ってからよね」

「それからわかるわよね」
「幸い今日は部活すぐ終わるし」
「こっちもよ。今日は暇なのよ」
「じゃあ都合がいいよね」
「そうよね」
とりあえずそれはよしとした。それでだ。
二人でだ。頷き合ってからだった。
「じゃあね」
「今日の放課後ね」
「行こうか。それじゃあ」
「そうしましょう」
これでだ。二人の放課後の予定は決まったのだった。
しかしだ。彼はだ。ここでだった。
こんなことをだ。言ったのだった。
「まさか」
「まさかって？」
「そんな筈ないか」
剣、そして魔物のことかと思った。しかしその考えはすぐに打ち消してだ。
あらためてだ。樹里に話した。
「絶対に」
「絶対にって？」
「あっ、何でもないよ」
樹里にはだ。言わなかった。最初のことは。
それでだ。こう否定して言った。
「じゃあとにかくね」
「放課後ね」
このことは言い合えた。そうしてだった。
二人はその日の放課後聡美と会うことにした。それは決まったのだった。

第四話　完

2011・8・2

第五話　剣士の戦い一

久遠の神話
第五話　剣士の戦い

その日の放課後。それぞれの部活を終えて。
上城と樹里は駅前の喫茶店マジックに向かった。
校門で待ち合わせて二人で向かいながらだ。まずは樹里が言った。
「あのお店ね」
「マジックだね」
「コーヒー凄く美味しいのよね」
「紅茶もね」
上城が言うのはそちらだった。
「あとお菓子も」
「そうそう、ケーキとかタルトが揃ってて」
「そうだよね。お店の内装もいいし」
「あれ昔からしいわ」
樹里はマジックの内装についても話した。
「ああして。アンティークっていうの？」
「古風な感じの」
「イギリス風みたいだけれど」
「ああいう内装って昔からだったんだ」
「あのお店ってかなり古くて大正の頃からあるらしいわ」
「えっ、そんなに古いんだ」
「相当古くてそれでね」
マジックのことをだ。さらに話す樹里だった。
「コーヒーも昔からね」
「美味しかったんだ」
「そうみたいよ。お父さんもお母さんも学生時代によく通ってたらしいのよ」

「そういえばうちのお父さんもお母さんも」
樹里の両親だけでなくだ。上城の両親もだった。
「あのお店にはよく通っていたらしいし」
「学生向けのお店よね」
「かといっても大人が入ってもね」
「いい雰囲気の内装よね」
「そこがいいんだよね」
「だから大正から続いてるのね」
樹里はマジックについてこう考えるのだった。
そしてそれに加えてだった。
「あそこのお店の娘さんって」
「あの小柄な人？」
「あそこって確か娘さん三人姉妹だったけれど」
店の家族の話にもなる。
「長女さんが八条大学の学生さんで」
「ああ、そうだったんだ」
「妹さん達も八条学園の生徒さんで」
「じゃあ僕達と同じなんだ」
「そう。同じ学園に通ってるみたいよ」
こうした話にもなるのだった。
「まあ。あのお店からうちの学校近いしね」
「そうね。楽よね」
「そうよね」
そうした話もするのだった。
そしてだった。遂にだった。
そのマジックに辿り着いた。マジックは英語で書かれており看板も店の外装もダークブラウンで統一されていた。木造である。
同じくダークブラウンの木製の分厚い扉を潜るとだ。そこでだった。
扉からベルが鳴る。その音に応えてだ。

「いらっしゃいませ」
高い声優さんの声を思わせる可愛らしい声が来た。見ればだ。
カウンターのところに赤と白のチェックのエプロンを着た小柄な女性がいた。黒髪をショートにしている垂れ目の女性である。
口からは白い八重歯が見えていて笑顔が零れる様だ。歳は二十歳位であろうか。その人が二人に挨拶をしてきたのだ。
二人はその挨拶にだ。笑顔で返した。
「はい」
「御邪魔します」
ついつい礼儀正しく応えてしまいます。そうして店の中に入る。
店の中もだ。ダークブラウンの木造である。天井にある立体の支えもやはり木造だ。無論店の壁も机もテーブルもだ。
全てがダークブラウンの中でだった。
聡美は四人用の席にいた。そこからだ。
二人の声を聞いてだ。すぐに立って声をかけてきたのだ。
「こっちです」
「あっ、銀月さん」
「そちらですか」
「はい、こちらにいらして下さい」
聡美は流暢な日本語で二人に言う。白いブラウスに青いジーンズというラフな格好だ。その格好が余計にスタイルを露わにさせている。
その彼女がだ。二人を席に誘いだった。

第五話　剣士の戦い二

二人を前にする形で再び座ってだった。まずはだ。
その二人にだ。こう問うたのだった。
「何を飲まれますか？」
「僕は紅茶を」
「私はコーヒーを」
上城と樹里はそれぞれそれだと言った。そしてだ。
二人がだ。カウンターに声をかけたのだった。
「すいません」
「注文御願いします」
「わかりました」
先程のウェイトレスがだ。二人の言葉に応えてだ。
そのうえでだ。二人の前に来てだ。ペンとオーダーを手にして問うてきた。
「ご注文は何でしょうか」
「ミルクティー御願いします」
「ウィンナーコーヒーを」
それぞれこう注文した。ウェイトレスはそれを書いてだ。
それからだ。二人に言ってきた。
「わかりました。では暫くお待ち下さい」
「はい、それじゃあ」
「御願いします」
こう話してだった。ウェイトレスは一礼してから二人の前を後にした。
そのうえでだ。彼女は盆の上にその紅茶とコーヒーを持って来た。
それをだ。
二人の前に置いてだ。一礼してから帰るのだった。
それを見届けてからだ。聡美は二人に話した。

「いいお店ですね」
「はい、ここの紅茶って凄く美味しいんですよ」
「コーヒーも」
「紅茶やコーヒーだけではなくて」
だがだった。聡美はだ。
二人に対してだ。こう言ってきたのである。
「店員さんの態度もです」
「あっ、それですか」
「いいんですか」
「日本のお店全体がです」
いいというのである。
「欧州では店員の態度の悪いお店も多いですから」
「日本よりもなんですね」
「そうなんですね」
「そうです。あの店員さんはまだ応対に硬さが残りますけれど」
聡美はそれも見ていた。そこまでもだ。
そしてそのうえでだ。また言うのであった。
「けれど。真面目に応対されてますね」
「欧州じゃその真面目な応対もないんですか」
「そうなんですか」
「そうしたお店も多いです。全体的に見てです」
「サービスは我が国の方が上なんですか」
「このお店にしても」
「そうです。確かに紅茶の味はかなりいいです」
彼女が飲んでいるのはそちらだった。紅茶だ。
見ればロイヤルミルクティーだ。それを飲みながら話すのである。
「ですがそれ以上にです」
「店員さんのマナーですか」
「それがいいんですね」
「見事です。それでなのですが」

ここまで話してだった。ここでだ。
聡美は話を変えてきた。そしてこう二人に言ってきたのである。
「スフィンクスですが」
「えっ！？」
「まさか！？」
二人はその名前を聞いてだ。思わず飲んでいたそれぞれの紅茶とコーヒーを吹き出すところだった。それを何とか止めてだ。
狼狽しきった顔でだ。聡美に対して問うたのだった。
「御存知だったんですか！？」
「そのことを」
「はい。そしてです」
聡美は二人に対してさらに言ってきたのだった。

第五話　剣士の戦い三

「上城君は」
「まさか。僕のことも」
「水の剣士になられましたね」
「水の剣士って何なの？」
その通り名を聞いてだ。樹里がだ。
眉を顰めさせてだ。上城と聡美に問い返したのだった。
「何か物々しい呼び名だけれど」
「この世には十三人の。それぞれの剣と力を持つ剣士がいます」
上城は戸惑い言えなかったがだ。その代わりにだ。
聡美がだった。樹里に答えてだった。
そのうえでだ。こう言ってきたのである。
「そしてその水の剣士がです」
「上城君なんですか」
「十三人の剣士は互いに魔物を倒しつつ戦い合う運命にあります」
「戦うっていうとまさか」
「はい。上城君もです」
戦うという言葉に青くなった樹里にだ。聡美は淡々と、あえて感情を押し殺している様な感じでだ。事実を話していくのだった。
「最後の一人にならなければです」
「死ぬ、んですね」
「そうです」
聡美は俯いた。そのうえでの今の言葉だった。
「そうなります」
「そんな、戦って最後の一人にならないと死ぬなんて」
「それが剣士の運命です」
「そんなのおかしいです」
樹里は何とかその事実を打ち消したい顔で言った。

「絶対に」
「そう思いますね」
「はい」
樹里は強い声で聡美に答える。
「銀月さんもそう思いますね」
「私も同じです」
聡美は強張り。悲しさを宿らせた顔で樹里に答えた。
「それは同じです」
「そもそもどうしてなんですか！？」
樹里は声をうわずらせ聡美に問うた。
「どうして上城君が。他の人達が」
「それにどうしてなんでしょうか」
上城もだ。聡美に尋ねる。
「僕が剣士だということも。剣士もことよ」
「そうよね。どうして銀月さんが？」
樹里は少し冷静になった。それでだ。
上城の言葉に応えてだ。そうして言うのだった。
「そのことを御存知なんでしょうか」
「それがわからないんですけれど」
「はい、文献を読みまして」
聡美は目を微かに右にやってから。一瞬でそれを戻して答えた。
「それで知ったのです」
「文献っていうと」
「ギリシアのでしょうか」
「そうです。上城君、そして他の剣士達は」
そのだ。文献とやらに書かれているというのだ。
「遥かな古代、神話の時代からです」
「神話ってギリシアの」
「あの頃だよね」
「はい、あの頃からです」

まさにだ。そのギリシアの神々の時代からだというのだ。
上城達は戦っていた、そうだというのだ。
「あの頃から貴方達はそれぞれ剣を持ち戦い生まれ変わり」
「また戦う」
「そうだったんですか」
「時代も国も変わりましたが」
それはだ。変わっていったというのだ。
「神話の時代から。ローマやケルト、ペルシャ、中国」
「そうした国で、ですか」
「僕達は生まれ変わり戦ってきたのですか」
「そうです。文献にはそう書かれています」
また文献の話を出すのだった。
「十三人の剣士達はずっと戦ってきたのです」
「最後に残った一人が願いを適える為に」
「その為にですね」
「多くの力を戦いの中で放ちながらです」
そしてだ。聡美は不意にだった。
二人にこんなことも話したのだった。
「それこそ一つの命を蘇らせる様な力を」
「命！？」
「命といいますと」
「あっ、それは」
二人が反応したのに気付いてだった。聡美はだ。

第五話　剣士の戦い四

すぐにだ。己の言葉を打ち消して言ったのだった。
「文献の読み間違いでした」
「あっ、そうなんですか」
「只の読み間違いなんですか」
「その文献は私が偶然ある神殿で見つけたもので」
そうした文献だというのだ。
「古代のものですから古代のギリシア文字で手書きだったので」
「ですよね。印刷なんてなかったですから」
「必然的にそうなりますね」
「しかも。布に書かれていました」
紙もない。従ってそれもこうなることだった。
「判読は困難でした」
「それで読み間違えたんですか」
「そうだったんですね」
「そうです。しかし何はともあれです」
どうかというのだ。その文献にある剣士達のことは。
「私は知っています」
「それで今こうしてですか」
「私達にお話してくれたんですか」
「そうです」
まさにそうだというのだ。
「それでなのです」
「それでなんですけれど」
ここでだ。上城は聡美に尋ねた。
「願いですよね」
「はい、そのことですね」
「願いを適えることができるんですか」

「剣士は。最後まで生き残れれば」
「そうですか」
それを聞いてだ。上城は。
難しい顔になりだ。聡美に尋ねた。
「それってどんな願いでもいいんですよね」
「そうです。死者を生き返らせることもお金持ちになることもです」
「適えられるんですか」
「一国の主になった者もいます」
願いを適えてだというのだ。
「神の力でそうなるのです」
「神ですか」
「はい、神の力で」
聡美は神と言った。
「そうなります」
「あれっ、そうだったら」
そしてだ。神という言葉からだ。
樹里は気付いてだ。聡美に対して問い返した。
「剣士の戦いって神様がやらせてるんですか？」
「それは」
「だったらどの神様ですか？」
樹里は口ごもった聡美にさらに問うた。
「一体どの神様が」
「ギリシアだと」
上城もだ。樹里に続いて言う。
「あれですよね。ギリシアの神様ですよね」
「ゼウスとかヘラとか？」
樹里は具体的なギリシアの神の名前を出した。
「ああした神様よね」
「そうなるよね」
「ギリシアって神様が多いけれど」

「誰なのかな」
「それは」
まただった。聡美はその目を微かに泳がせて、二人が気付かないまでの小さな動きでそうさせて。それから目を戻して答えたのだった。
「そこまではわからないのです」
「そうですか。どの神様までは」
「わからないですか」
「すいません」
二人に対して申し訳なさそうに述べた。
「わからなくて」
「いえ、そんなの」
「別に」
二人はだ。その聡美に対してだ。
それはいいとだ。こう答えたのだった。

第五話　剣士の戦い五

「ここまでわかっただけでも凄いですし」
「ですから」
「そうですか」
「はい、ですからそんなにです」
「謝られないで下さい」
二人は聡美に対して親身になって話した。
「僕達に謝るようなことじゃないですし」
「そうですよ」
「そう言ってもらえますか」
しかしだ。二人にそう言われてもだった。
聡美はまだ申し訳なさそうな顔をしていた。そうして言うのだった。
「それならいいのですが」
「ええ、じゃあ」
「そういうことで」
謝罪めいたものはそれでいいとした。そのうえでだ。
上城はだ。聡美にまた尋ねたのだった。
「あの、願いですけれど」
「はい、それですね」
「それでお互いに戦って殺し合うんなら」
それならだというのだ。
「僕、願いはなくていいです」
「願わなくてもですか」
「はい、いいです」
こう聡美に話すのである。
「そこまでして手に入れたいものなんてないですから」
「そうなのですか」

「僕剣道は好きです」
それはだというのだ。剣道はだ。
「ですが剣道は自分の鍛錬の為で」
「戦う為ではないというのですね」
「中には違う人もいます」
そのだ。中田に成敗された中学教師の如き輩だ。勝つ為の剣道を生徒に強要しそのうえで負ければ八つ当たりめいた体罰を行う。それは何故かというとだ。自身が顧問を務める部活の成績がよければ教師としての己の評価があがりそれが名声や出世につながるからだ。
つまり生徒はそうした教師の道具に過ぎないのだ。こうした教師が存在し教師という『聖職者』であるということだけで尊敬される、こうした摩訶不思議な怪奇現象が起こるのは日本だけだ。
実際には教師はその閉鎖された社会、そして日教組という組織の存在が大きい為に起こっている自浄能力のなさ故にだ。異常な者がいたりする。異常者はどの社会にもいるがとりわけ教師の世界では多いのかも知れない。
そうした教師を念頭に置いてだ、上城は今話すのだった。
「ですが僕はです」
「違うのですね」
「はい、僕はあくまで、です」
どうかというのだ。彼は。
「自分自身の鍛錬の為にです」
「剣道をしているのですね」
「活人剣です」
まさにだ。それだというのだ。
「部活の先生もそう考えておられます」
「いい先生ですね。そして」
「そして？」
「上城君も」
他ならぬだ。彼自身もだというのだ。

「いい方ですね」
「そうでしょうか」
「そう思います。だからでしょう」
上城のことを考えだ。聡美はこう述べた。
「願われないのは」
「別にそれでもいいですよね」
「はい」
構わないというのだ。
「それでも。戦わなくてはいけないのですから」
「だからですね」
「そうです。願いがあろうがなかろうが」
それでもだというのだ。戦いはあるというのだ。
「剣士であるならばです」
「剣士なら」
「はい、戦わないといけません」
「絶対にですね」
「それが運命ですから」
ここでも運命を話に出す聡美だった。

第五話　剣士の戦い六

「逃げられません」
「剣士同士で戦うんですね」
「それと」
「魔物達ともですね」
「はい、あの怪物達ともです」
呼び名は様々だったが指しているものは同じだった。
「戦わなければなりません」
「魔獣達は」
上城もだ。そうした存在の呼び名は色々だった。
しかしだ。その指しているものは彼にしても同じだった。
そのだ。剣呑な存在に対してはどうか。彼はそのことを言った。
「別に戦ってもです」
「構わないですね」
「はい、彼等は人を襲いますよね」
「神話の時そのままです」
彼等が神話で出て来ただ。その時のままだというのだ。
「それは変わりません」
「そうですか。やっぱり」
「魔獣は同じです」
「それなら倒すことに何も躊躇はしません」
そうした異形の存在に対してはというのだ。
「あの連中とは戦えます」
「剣士達とは違いですね」
「何か。人間同士が争うのは」
どうかとだ。上城は戸惑う顔で聡美に話す。
「おかしいですよね」
「だからです」

「だから？」
「神々がそうでしたし」
聡美はここでもギリシアの神々のことを話した。
「同族で争い力を湧き出させてきました」
「同族！？神々もですか」
「神々は。代替わりしています」
ギリシアの神々の特徴の一つだ。神々といってもオリンポスの神々だけではないのだ。彼等以前にも神々は存在しているのだ。
「ティターンは知っているでしょうか」
「確か」
その名を聞いてだ。聡美が言った。
「クロノスとかオケアノスとかいう」
「はい、オリンポス以前の神々です」
「そうでしたね。確か」
「オリンポスの神々はティターンと戦い」
そしてだ。それによってというのだ。
「多くのものを得たのです」
「神々になっただけじゃないんですか」
「彼等はそこで解放したヘカトンケイル達の助けを受け」
彼等にとっては親戚にあたる五十の頭と百の腕を持つ巨人達である。
「そしてキュクロプス達に武器を作ってもらいました」
「あの一つ目の巨人にですね」
「ゼウスは雷を」
まずはこれだった。
「ポセイドンは三つ叉の鉾、ハーデスは姿を隠す兜を」
「彼等の象徴をですね」
「はい、その神々の力をです」
「手に入れたのですか」
「戦い。とりわけ同族同士の戦いは」

それがだ。もたらすものはというと。
「多くのものを生み出します。力もまた」
「それでその力を？」
上城は首を捻りながら聡美に尋ねた。
「僕達が手に入れていくんでしょうか」
「ある程度は」
全てではない。聡美は言った。
「そうなります」
「ある程度？じゃあ他の部分は」
「あっ、それは」
「それは？」
「散ります」
何処か誤魔化す様にして話す聡美だった。

第五話　剣士の戦い七

「そうなります」
「そうですか」
「はい、それは剣士達が手に入れる力ではありません」
「散って終わりですね」
「その通りです」
「そうですか。それと」
上城は力のことは納得した。そのうえでだった。
「魔物ですけれど」
「彼等のことですね」
「どうしているんですか？」
彼が今度問うたのはこのことだった。
「魔物達まで」
「そうよね。剣士同士の争いなら」
樹里もそのことに気付いて言う。
「別に。魔物なんていらないんじゃ」
「それなのにどうしているんですか？」
「糧です」
聡美は二人にこう答えた。
「糧なのです」
「糧！？」
「魔物を倒しその力をてに入れるのです」
「魔物の？」
「簡単に言うと経験です」
聡美は上城にわかりやすく話す。
「経験を積んで強くなるのです」
「魔物を倒せばその分だけですか」
「剣士は強くなります」

「じゃあ。魔物を多く倒せば」
どうなるか。上城はすぐに察した。
そのうえでだ。こう聡美に話す。
「それだけ強くなるんですね」
「そうです。そして剣士と戦い勝てば」
「剣士とは」
「魔物と戦う以上に強くなります」
「じゃあ剣士は」
「はい、魔物より遥かに糧となるのです」
戦い勝てばだ。そうなるというのだ。
「ですから戦えば戦う程です」
「強くなるんですか」
「その通りです。ですから生き残ればそれだけ」
「僕は強くなる」
「そうなります」
「僕は強くなるのはいいです」
上城はそれはいいとしたのだった。
それでだ。こんなことを言った。
「ただ。曲がったことはしたくないです」
「そういうことはですか」
「はい、したくありません」
また言う彼だった。
「僕の剣は活人剣ですから」
「まずは自分の修練ですね」
「そう思ってます」
また言う上城だった。
「ですから戦いも」
「望まれませんか」
「そうです。ただ」
「ただ」

「そんな戦いがずっと昔から行われてるなら」
どうなのか。彼はこう言った。
「僕は終わらせたいです」
「戦いをですか」
「はい、終わらせたいです」
こうだ。聡美に対して話した。
「そうは思います」
「戦いを終わらせたい」
「誰がどうしてこんな戦いをはじめたのか」
それはまだよくわからなかった。神らしいとは察してもだ。
そのうえでだ。聡美に言ったのである。

第五話　剣士の戦い八

「ですがそれでも」
「戦いは終わらせたいですか」
「そう思います」
切実な顔でだ。聡美にまた話す。
「戦いを終わらせたい、若しくは」
「若しくは」
「止めさせたいです」
終わらせることが無理ならだ。せめてだというのだ。
「そうしたいです」
「そうですか。それが上城君の考えですね」
「はい」
こくりとだ。聡美の問いにも頷く。
「そうしたいです」
「わかりました」
聡美もだ。上城のその考えをだ。
受けてだ。彼女も頷く。
そのうえでだ。上城にあらためて言った。
「ではその為に動かれて下さい」
「それでいいんですね」
「私も思います」
聡美は目を伏せてだ。上城に話した。
「こうした戦いを果てしなく続けても」
「無益ですよね」
「はい、無益です」
まさにだ。その通りだというのだ。
「しかし私は」
「銀月さんは？」

「戦いを止められませんでした」
目を伏せさせたままだ。聡美は言う。
「何一つとして」
「あの」
その聡美にだ。樹里が目をしばたかせてから言った。
「銀月さんが止められないのも」
「私がですか」
「当然じゃないんですか？」
「だよね。だって文献で知っただけなのに」
「それで止められないのも」
「当然なのでは？」
「僕もそう思いますけれど」
樹里だけでなく上城も言う。
「それは」
「そうじゃないんですか？」
「あっ」
二人に言われてだ。聡美は。
「そうですね」
「というかその戦いって文献を見つけた人が止められます？」
「そんな戦いだと思うんですけれど」
二人は聡美の話を聞いてだ。それで話すのだった。
「そんな派手で因縁ある戦いって」
「とても」
「はい、確かに」
その通りだとだ。聡美も頷いてだ。
そのことを認めた。そのうえでだ。二人にあらためて話すのだった。
「それでなのですが」
「それで？」
「それでといいますと」

「私は文献を調べて」
そういうことにしてだった。聡美は話す。
「無益な戦いを止められればと考えています」
「なら僕が」
上城がだ。ここで言ったのだった。
「そうします」
「戦いを止めてくれるのですね」
「終わらせられるのなら終わらせたいです」
それができればだというのだ。
「そうしたいです」
「ではです」
聡美は上城のその言葉に頷いてだ。
そうしてからだ。彼にこう頼んだ。

第五話　剣士の戦い九

「御願いできますか」
「戦いを終わらせることをですね」
「私が力になれることなら」
「助けてくれますか」
「そうさせて下さい」
切実な顔になってだ。彼にまた話す。
「是非共」
「わかりました。それなら」
「貴方を含めて十三人の剣士がいます」
聡美は上城にまた剣士の数について説明した。
「そしてその剣士それぞれがです」
「それぞれの剣を持ってですね」
「力です」
力についてもだ。聡美は話した。
「上城君は水の力ですね」
「はい、そうみたいですね」
「そしてそれぞれの剣士がそれぞれの力を持っています」
「それなら」
聡美の今の話を聞いてだ。
上城はは中田のことを思い出した。そうして言ったのだった。
「あの。中田さんですけれど」
「中田さんって？」
「うん、実はね」
どうかとだ。上城は樹里に話した。
「僕もう別の剣士に会ってるんだ」
「中田さんって確か」
樹里も彼のことは知っていた。既にだ。

「大学の剣道部の」
「そう、全国大会でも活躍した」
「あの人も剣士だったの」
「そうなんだ。とにかく凄く強くてね」
「剣士だから強かったの」
樹里は中田のことも考えてだ。それで言うのだった。
「あれだけ」
「そうみたいだね。剣士だから」
「それであの人も剣持ってるの」
「僕は一刀だけれど」
上城は自分の出す刀から話す。
「中田さんは二刀流でね」
「そうだね。あの人って二刀流だったわよね」
「そう、剣士の時も二刀流なんだ」
「何か滅茶苦茶強そうだけれど」
樹里は頭の中で一刀より二刀と考えてだ。こう答えたのだった。
「あの人が敵って」
「ううん、まずいよね」
「まずいなんてものじゃないでしょ」
樹里は顔を曇らせて上城のその言葉に返した。
「下手しなくても」
「いえ、今例えどれだけ実力が違っても」
しかしだ。ここでまた聡美が言ってきた。
「勝つことはできます」
「できるんですか？」
「その中田さんに」
「魔物を倒せばそれが糧になりますね」
聡美が今話すのはこのことだった。
「その分だけ強くなりますから」
「だからですか」

「はい。魔物を倒せば倒すだけ剣士は強くなります」
「じゃあ魔物を倒していけば」
「何時かは彼と」
そのだ。中田とだというのだ。
「戦うことができるようになります」
「じゃあ続けていけば」
「いいです」
まさにそうだとだ。聡美は上城に話す。
「魔物と戦い続けていれば」
「中田さんを止める力が備わっていくんですね」
「そうです。しかしです」
「魔物も攻撃してきますよね」
「襲ってきます」
そうしてくるというのだ。魔物の方から。

第五話　剣士の戦い十

「その彼等を戦えば」
「強くなっていくんですね」
「それこそです」
ここでだ。聡美はだ。
また言った。その言ったこととは。
「神に匹敵する力もです」
「身に着けられるんですね」
「魔物を倒し力を蓄えていけば」
そこまでだ。強くなるというのだ。
「強くなるのは無限ですから」
「無限って」
「そこまで強くなれるんですか！？」
「あっ、あくまで例えです」
無限に強くなる。それはだというのだ。
「人から見れば神の力は絶大ですよね」
「だから神様ですよね」
「人とかけ離れたまでの強さを持っているから」
二人は神をこう考えていた。ただしその性格は人間と変わらないと思っている。力がそこまで強いからだ。神は神だというのだ。
「そうですよね」
「それでなんですよね」
「そうですね」
そしてだった。聡美もだった。
二人の言葉を受け入れてだ。それでなのだった。
「そうなりますね」
「剣士は神に匹敵するまでなんですか」
「強くなれるんですね」

「そうなります。若しもです」
「そこまで強くなったら」
どうなるか。上城は自分から言った。
「あれですよね。この戦いもですね」
「止められるかも知れません」
「若しくは終わらせることが」
今だ。その希望を見たのだった。
「じゃあ」
「そうされますか」
「はい、そうします」
希望を見ればすぐにだった。上城は決意した。
強い顔になってだ。聡美に言った。
「僕、強くなってです」
「そうしてですね」
「はい、戦いを止めます」
こうだ。誓ったのだった。
「若しくは終わらせます」
「そうされるのですね」
「僕の願いはそれです」
それにだ。決めたというのだ。
「別にそれでもいいですよね」
「それが願いならば」
聡美もだ。彼のその言葉を受け入れてだった。
そうしてだ。こう返したのだった。
「いいと思います」
「そうですか。それなら」
「まことに。気の遠くなる間」
神話の頃からだ。続けられてきた。
「行われてきた無益な戦いですから」
「ですよね。それなら」

「十三人の剣士達はそれぞれ一つの魂ですが」
聡美は上城の決意を聞いてからだ。こんなことを話してきた。
「しかしその人格はです」
「違うのですか」
「はい、魂は同じですがその時代によって性格は違うのです」
「じゃあ僕は前の時代とかでは」
「また違う人間だったと思います」
こう答えるのだった。
「その時代によって」
「そうでしたか」
「今の時代の貴方は」
この時代の彼は。どうかというと。
「とても清らかで真面目な方ですね」
「別にそうじゃないですけれど」
「いえ、そう思います」
上城の謙遜を一旦いいとしての言葉だった。
「その貴方なら」
「戦いを止められるでしょうか」
「そこまで強くなれば」
そうなればだ。どうかというのだ。

第五話　剣士の戦い十一

「可能でしょう」
「そうですか。それなら」
「そうして下さい」
切実な、そして妙に誰かを気遣う様子でだ。聡美は告げた。
「是非共」
「そうさせてもらいます」
「それなら」
そしてだ。樹里もだった。その上城に言ったのだった。
「私もね」
「貴女もですね」
「私は戦えないですけれど」
それでもだというのだ。
「上城君の力になります」
「彼を助けてくれるのですね」
「そうさせてもらいます」
彼女もだ。決めて言ったのだった。
「是非共」
「人はです」
ここでだ。聡美はその樹里に言った。
「一人では生きられません」
「そうですね」
「そして戦うこともです」
「一人ではできませんか？」
「できます。しかしです」
それでもだというのだ。
「一人だけで戦うことは辛いです」
「では。私は」

「若し上城君を支えてくれるのなら」
「私がそうすれば」
「非常に大きなことになります」
そうなるというのだ。
「上城君の支えにです」
「支えですか」
「人は一人だと」
まただ。一人だと、という聡美だった。
「何かあり揺らぐとです」
「揺らぐとですか」
「倒れてしまいかねません」
こう言うのだった。
「ですから是非共です」
「支えが必要ですか」
「若しもですが」
今度はだ。仮定をしてから話す聡美だった。
「上城君はこの気の遠く程続いたこの戦いを終わらせられるかも知れません」
「それができるのですか」
「はい。文献では」
まただ。文献を話に出して話す聡美だった。
「そう考える剣士もいました」
「いたのですか」
「そうした剣士も」
「はい、いました」
いたとだ。聡美は話す。
「ですがこれまでそれを果たせた剣士はいなかったのです」
「それは何故ですか？」
「その誰もが一人でした」
彼一人が。そう思い戦ってきただけだというのだ。そうした考え

を持つ剣士がだ。
「ですから。揺らぎ」
「そうしてですね」
「倒れました」
そうなったというのだ。彼等は。
「戦いの中に果てていきました」
「そうなっていったんですか」
「一人だったからです」
全てはそれが理由だった。
「彼等は倒れていきました」
「じゃあ僕も」
「一人では間違いなくそうなります」
上城自身に話す。そうなるとだ。
「ですが」
「しかしですね」
「はい。若しも支えてくれる方がいれば」
「私が上城君を支えるなら」
「出来るかも知れません」
微笑みだ。樹里に話すのだった。
「この戦いを終わらせることが」
「わかりました」
ここまで聞いてだ。樹里は静かに頷いた。

第五話　剣士の戦い十二

そうしてだ。彼女は聡美に答えた。
「では私は上城君と一緒に」
「この戦いを止めて。終わらせてくれますね」
「そうします」
強い声でだ。また聡美に告げた。
「出来るかどうかわかりませんが」
「お強いですね」
聡美は樹里の言葉をここまで聞いてだ。静かに微笑みだ。
そうしてだ。二人に話したのだった。
「御二人は」
「僕がですか」
「私が」
「はい、お強いですね」
そうだというのだ。
「まずは心の強さからです」
「そこからですか」
「心からですか」
「はい、そうです」
聡美は明らかにだ。二人に賭けようとしていた。
しかし二人はそれに気付かないうちにだ。彼女の話を聴くだけだった。
そうしてからだった。聡美は。
二人にだ。最後にこう言ったのだった。
「それではですが」
「それでは？」
「今度は一体」
「これで終わりです」

話がだ。終わるというのだ。
「御疲れ様でした」
「あっ、終わりですか」
「そうなのですか」
「私はお二人に協力させてもらいます」
このことも告げた。
「そうさせてもらいますので」
「わかりました。三人ですね」
「三人で一緒にですね」
「他にもおられるかも知れませんが」
それでもだ。今はというのだ。
「とりあえずはですね」
「三人ですね」
「はい、三人ではじまります」
それがだ。今はじまったというのだ。
そうした話をしてだった。三人は今は別れたのだった。
それからだった。上城は。
樹里と二人夕方の赤い道を歩きながらだ。彼女に言うのだった。
「僕やっぱりね」
「戦うことはなのね」
「うん、好きになれないよ」
それはだ。どうしてもというのだ。
「というか嫌いだから」
「だから戦いを終わらせようって思うのね」
「人が人と戦い殺し合うって」
そのことを思うとだ。顔が自然と曇ってだ。
そうしてだ。こう言うのだった。
「間違ってるよね」
「世の中。戦争も多いけれど」
「僕は好きじゃないから」

戦争やそういったものもだ。嫌いだというのだ。
それでだ。彼の剣道のことも話すのだった。
「前にも話したし喫茶店でも言ったけれど」
「ええと、剣道のこと？」
「そう、僕の剣道はね」
彼の剣道はだ。どういったものかというと。
「活人剣だから」
「人を殺す剣道じゃないのね」
「中学、いや小学校の頃からね」
話は遡る、今だけではなかった。
「言われてたんだ。剣道は何の為にするか」
「勝負に勝ったりする為じゃないのね」
「小学校の時に道場の先生に言われたんだ」
「何て？」
「若し勝ち負けを最初に置いて負けたから何かをしろっていう先生がいたら」
残念ながらそうした教師もいることもだ。上城は知ってしまっている。
「そうした先生からは離れろってね」
「言われたのね」
「うん。剣道は何の為にするのか」
話の原点はそこだった。あくまで。

第五話　剣士の戦い十三

「自分を鍛えて心を成長させて律する為にあるものだから」
「だからなのね」
「そう。だから勝ち負けにこだわったらいけないって」
「それよりもなのね」
「自分がどうなのか」
やはりだ。話の原点はそこにあった。
「それが大事だからって」
「だから上城君の剣道は」
「確かに僕も勝ちたいよ」
このことは否定しないのだった。彼自身も。
「けれどそれでもね」
「勝ち負けよりも」
「そう。活人剣だから」
またこの言葉を出して話す。
「願いを適える為に戦うことは」
「しないのね」
「それで決めたんだ」
「戦いを終わらせるのね」
「誰も倒さないよ」
このこともだ。上城は強く決意していた。
「そうして誰も倒さないで」
「そうして戦いを終わらせる」
「そうするよ」
また言う彼だった。
「絶対にね」
「だったら私も」
樹里もだ。彼女の決意を話す。

「その上城君をね」
「支えてくれるんだ」
「戦いを終わらせたい、けれど一人じゃ難しいから」
聡美の言葉をだ。彼女も反芻して話す。
「だからね」
「二人でなのね」
「ええ、そうさせてもらうわ」
にこりと微笑んでだ。彼に顔を向けての言葉だった。
「決めたから」
「それじゃあ」
「三人で。そうしていきましょう」
こうした話をしてだった。
「聡美さんとね」
「そうだったね。僕達はね」
「三人だから」
二人だけではないともいうのだ。
「何とかできるかも知れないから」
「うん、じゃあ」
「そういうことでね」
「やっていこうか。じゃあ戦う相手は」
それは避けられないことはわかっていた。しかしだ。
上城はだ。その相手を限定して言うのだった。
「魔物だけだね」
「そうね。怪物達を倒していって」
そうしてだというのだ。
「力を備えていって」
「戦いを終わらせよう」
「そうしましょう」
笑顔でこのことを誓い合う二人だった。
そしてだった。彼等は。

今度はだ。こんな話をし合った。
「とりあえず。化け物が出たら」
「それを倒してなのね」
「そうするよ。出て来たらね」
「けれど普段は」
「学生だから」
ごく普通のだ。それだというのだ。
「それでいこうね」
「そうしましょう」
そこは割り切って考えることにしたのだ。つまり日常の中には存在していくというのだ。
そうした話をしてだった。二人は。
共に帰りやがて別れだ。それぞれの家に入ったのだった。

第五話　　完

２０１１・８・１２

第六話　上城の初戦その一

久遠の神話

第六話　上城の初戦

上城は決意した。戦いを止めるか終わらせることを。
しかしその決意した日から暫くはだ。平穏な日々を過ごしていた。
学校に行き授業に出て部活に出てだ。食堂でもだ。
今はうどんを食べている。その彼にだ。
一緒に食事を採っているクラスメイトがこう声をかけてきた。
「なあ、最近阪神どうだよ」
「最近よかないか？」
こうだ。野球の話をしてきたのだ。
「このままＡクラス維持できたらいいな」
「それでクライマックスで優勝してな」
「今度こそ日本一ってなって欲しいけれど」
「そう思うよな」
「まあね」
そうだとだ。上城も答える。そのうえでうどんの中の揚げを箸に取る。今彼が食べているのはきつねうどんだ。それとかきあげ天丼を食べているのだ。
その揚げを食べつつだ。彼はさらに言う。
「僕も阪神が優勝してくれたら」
「やっぱり嬉しいよな」
「野球は阪神だろ」
「そうそう」
「あんないいチームないぜ」
どうやらだ。彼等は全員阪神ファンらしい。阪神の話題になると嬉々としている。
そしてだ。さらに話す彼等だった。

「巨人なんかな」
「あんなチームずっと最下位でいいしな」
「今年はあのまま借金まみれになっていて欲しいぜ」
「全くだよな」
「巨人が負けると気持ちがいいんだよ」
巨人に対してはこうだった。
「あんなチーム応援する奴の気が知れないな」
「金持ってるだけの悪党じゃねえかよ」
「関東じゃ巨人ばっかりだってな」
「誰がそんなところ行くかよ」
「それに関東ってな」
巨人からだ。関東の話になる。
「うどんもつゆ真っ黒だしな」
「あれ滅茶苦茶辛いらしいな」
「っていうか食えるのかよ、そんなの」
「真っ黒のつゆってな」
「それ何なんだよ」
こうした話をしているとだ。不意にだ。
上城はこのうどんの話を出したのだった。
「ああ、真っ黒なうどんっていったらさ」
「あれか？伊勢うどん」
「うちの食堂にもあるけれどな」
「あれもつゆ真っ黒っていうんだな」
「それか」
「そうだよね。あれも真っ黒だけれど」
どうかとだ。彼はその伊勢うどんについてこう話した。
「美味しいよね」
「あれは美味いよな」
「関東のうどんと違ってな」
「関東はそばもまずいけれどな」

「そばもやっぱり関西だろ」
「あとラーメンもな」
話がどんどん飛躍していく。
「関東美味いもんないからな」
「まずいものしかないからな」
「鱧も出ないしな」
「鰻なんて背中から切るしな」
鰻の話までだ。彼等は言及する。
「で、野球は巨人かよ」
「巨人なんか応援するからうどんもまずいんだよ」
「全くだよ。やっぱり野球は阪神でな」
「醤油はうす口醤油」
「だしは鰹節と昆布」
「じゃこも入れてな」
こう話しながらだ。彼等も学食を食べている。見ればうどんが多い。それにそばだ。

第六話　上城の初戦その二

そのそばにしろだ。つゆの色は薄い。そうしたものを食べながらだ。

彼等はだ。こんなことも話した。

「そういえばきし麺ってどうなんだ？」

「名古屋のあれか？」

「あの平べったい麺な」

「この食堂にもあるけれどな」

とにかくだ。メニューは充実している食堂の様だ。

「あれ美味いんか？」

「どうだろうな。俺食ったことないしな」

「愛知から来てる先生とか食ってるけれどな」

「あと寮の東海組な」

この学園には寮もある。全国から人が集まる為だ。そうしたものも設けられているのだ。

「あの連中が食ってるよな、いつも」

「連中が言うには美味いらしいあ」

「かなりな」

「それと味噌煮込みうどんな」

名古屋の定番料理の一つだ。

「あれも食ってるよな」

「あれ味強くないか？」

「濃いだろうな、やっぱり」

名古屋の味噌は赤味噌だ。だからだ。

味が濃いとだ。こう話すのだった。

そしてだ。さらにだった。こんなことも話される。

「ドラゴンズか」

「名古屋だからな」

「阪神最近ドラゴンズに負けまくってるしな」
「ここ数年な」
ここ一番でノーヒットノーランを喰らったこともある。
「結構怨みあるよな」
「まあそれなりにな」
「星野の現役時代も相当やられたしな」
「だったよな」
阪神ファンは時空を超える。彼等の中では生まれていない時代でもだ。そのことは見てきたようにだ。現実味を帯びて話されるのだ。
「江夏がな。打たれてな」
「それであの巨人に最終戦で負けてな」
「で、優勝逃してな」
「ああなったしな」
実に忌まわしい話だ。昭和四十八年のことだ。
このことを思い出しながらだ。彼等は話すのだった。尚彼等はその頃一人も生まれていない。それどころかバースの現役の頃にもだ。
だがそれでもだ。彼等は見てきたものとして話すのだった。
「権藤も凄かったしなあ」
「その前の杉下もな」
「阪神も相当やられたしな」
「中日にも負けまくったよ」
「けれどな」
それでもだというのだ。中日に対してはだ。
「あのチームにはな」
「これといって怨みないよな」
「ああ、巨人は憎たらしいけれどな」
「中日にはな」
「特にないよな」
何故か阪神ファンはだ。巨人は憎んでもだ。他のチームはこれといって憎まないのだ。他のチームには非常に寛容なのである。

それでだ。その名古屋の食べものについても言うのだった。
「じゃあ一回食べてみるか？」
「もうここできし麺注文するか？」
「それで食うか」
「そうするか」
そうした話をしてだった。実際にだ。
彼等はそのきし麺、ついでに味噌煮込みうどんを頼んだ。券を買ってそのうえで頼んだ。そうして食べてみるとだ。その味は。
「美味いな」
「そうだな」
「これ美味いぞ」
「かなりな」
食べてみてわかることだった。きし麺、そして味噌煮込みうどんの味が。
「いい味だよ」
「名古屋じゃいつもこんなの食ってるのかよ」
「大阪の薄口醤油のうどんと同じだけ美味いよな」
「ああ、負けてないぜ」
「いい味だよ」
こう話してだ。彼等は食べながら話す。そしてだ。

第六話　上城の初戦その三

きし麺と味噌煮込みうどんの味を知ったのだった。その後でだ。
上城は樹里と共にいてだ。そのきし麺と味噌煮込みうどんの話をするのだった。校舎を二人で歩きながらだ。その話をしている。
それを聞いてだ。樹里はこう言った。
「ああ、あのおうどんね」
「美味しかったよ、とても」
「あれ美味しいわよ」
樹里はにこりと笑って彼に返した。
「きし麺はね。それに」
「味噌煮込みうどんもだよね」
「そうよ。美味しいのよ」
こう言うのである。
「食べたら病みつきになるわ」
「確かに。あれは」
「実は親戚に名古屋の人がいるのよ」
「ああ、そうなんだ」
「それで子供の頃から名古屋に行ってるから」
それでだ。きし麺と味噌煮込みうどんを知っているというのだ。
「他には味噌カツに海老にね。ういろうも」
「そういえば全部食堂にあるね」
「ういろうは喫茶店にあるわよね」
「うん、あるよ」
「名古屋の食べものって美味しいのよ」
実際にそうだというのだ。
「それにうちの学校って」
「名古屋の人多いみたいだね」
「全国から集るから」

名古屋の人間も多いというのだ。
「他には広島とか福岡も多いわよ」
「西日本ばかり？」
「あと北海道の人もいるし」
今度は北だった。
「だから食堂にお魚の料理も多いし」
「そういえば確かに」
「鮭とかホッケとかね」
「あとタラも」
どれもだ。北海道の魚である。
「かなりあるわよね」
「そうだね。北海道の人のことを考えて」
「八条グループって北海道に農園あるし」
それとだ。漁場もだ。
「牧場もあるしね」
「だから何でも」
「そう、食堂に持って来られるのよ」
八条学園は八条グループの経営する学園である。
だからだ。そうしたものもすぐに調達できるのだ。
そのことを話してだ。樹里はにこりとしてだ。
上城にだ。こんなことを言った。
「それでだけれど」
「それで？」
「何を食べるの？今度は」
「何をっていうと」
「だから。明日だけれど」
「ううんと。明日の昼食？」
「そう、それはどうするの？」
具体的にだ。どうするかというのだ。
「何を食べるの？」

「今日のきし麺美味しかったから」
「じゃあそれ？」
「それにしようかな」
上城はこう言った。考える顔で。
「やっぱり」
「北海道は？」
「また今度。あと今日の放課後だけれど」
「その時は？」
「ういろう食べようかな、喫茶店で」
「あっ。ういろうなの」
「そうしようかな」
考える顔でだ。こう答えたのでる。
「今日は」
「いいわね。じゃあどのういろうにするのかしら」
「えっ、どのって」
それを聞いてだ。上城は。
目をきょとんとさせてだ。樹里に問い返した。

第六話　上城の初戦その四

「どのって。ういろうって何種類もあるの？」
「あるわよ。白に黒に抹茶に」
「抹茶もあるんだ」
「それとコーヒー、ゆずに桜に」
「コーヒーもあるんだ」
「そうよ。大体こんな感じ」
ういろうと一口に言っても何種類もあるとだ。実際に言ったのである。
「一杯あるから」
「そうだったんだ」
「それで何を食べるの？」
「さくらかな」
それにしょうかとだ。上城は少し考えてから答えた。
それでだ。こうも言うのだった。
「桜餅好きだし」
「だからなの」
「うん。それでいいかな」
「さくらのういろう美味しいけれど」
これは確かだという樹里だった。
だがここでだ。こんなことも言う彼女だった。
「ただ。注意してね」
「注意って？」
「ういろうは独特の味なのよ」
「ええと、形だけ見たら」
「あれでしょ。羊羹みたいでしょ」
「けれど違うんだ」
「そう。違うの」

実際にこう答える樹里だった。
「羊羹よりも味は三色だんごに近いかしら」
「三色だんごっていったら」
上城はそれを聞いてだ。
自分の頭の中でういろうとだんごを組み合わせてだ。こう樹里に話した。
「あれかな。さくらのういろうって」
「ええ」
「三色だんごの赤みたいな味？」
「そう、あんな感じ」
実際にそうだと答える樹里だった。
「ああいう味なの。食感もね」
「ふうん、面白いね」
「食べたら病みつきになるから」
樹里はにこりと笑ってだ。こんなことも言った。
「もう確実にね」
「ういろうってそんなに美味しいんだ」
「そう、美味しいから」
だからだ。そうなるというのだ。
「食べてみてね」
「うん、わかったよ」
「私も一緒にね」
そしてだ。彼女もだというのだ。
「行くから、そのお店」
「ういろう食べたいんだ」
「だから。私も好きだから」
それでだとだ。にこりと笑って言うのである。
「そうさせてもらうわ」
「ういろうね」
「この学園にもあるのは知ってたけれど」

それでもだというのだ。
「実際に食べたことはね」
「なかったんだ」
「そう、なかったの」
実際にそうだというのだ。
「けれど。今こうして」
「食べられる機会があるから」
「機会があるなら食べる」
樹里は言った。
「それが食べ物だからね」
「チャンスは逃さないんだ」
「特に食べ物は」
樹里はさらに言う。
「その機会を逃したら今度は何時になるかわからないじゃない」
「下手をしたらずっととか」
「それがあるから」
それでだというのだ。

第六話　上城の初戦その五

「だから食べるわ」
「そういうことだね。じゃあ」
「放課後部活の前にね」
「行こうか、二人で」
「そうしましょう」
こうした話をしてだった。二人は。
放課後にういろうを食べた。店は和風の白い店だ。そこに入ってだ。
ういろうと抹茶を頼んで食べる。上城はさくら、樹里はコーヒーだ。
そのそれぞれのういろうを食べる。そうして。
上城はだ。実際にこう言ったのだった。
「確かにね」
「三色だんごに近い味でしょ」
「うん、近いね」
まさにそうだというのだ。
「美味しいね」
「そうでしょ。かなりいいでしょ」
「うん、羊羹とは似ているようで」
「それが違っていてね」
「また別の味があるんだね」
ういろうにはういろうの味があるのだというのだ。
「そういうことだね」
「そうよ。それでね」
「うん、それで」
「どう?また食べたくなった?」
リピーターになるかどうかとだ。樹里は上城の目を見て尋ねる。

「そこのところはどうかしら」
「何か名古屋にこだわりある？」
「だから。親戚の実家があるから」
それに尽きるというのだ。
「そうなるのよ」
「ううん、それにしても何か」
「凝り過ぎ？」
「そんな気もするけれど」
「そうかもね。それでもね」
「それでも？」
「やっぱりまずは」
何が来るかというのだ。そしてその来るものは。
「関西よ」
「関西なんだ」
「ういろうも好きだけれどみたらしも好きだし」
京都からはじまったと言われているだんごだ。
「その他のお菓子もね」
「関西って美味しいお菓子も多いしね」
「葛饅頭も好きよ」
「ああ、奈良の」
「そう。他にはおたべも」
これも京都だ。
「好きだし」
「そうだね。僕も葛饅頭好きだし」
それは上城もだというのだ。
「関西のお菓子はやっぱり」
「いいでしょ。おうどんもね」
「薄口醤油で？」
「そう。おだしも丁寧に取っていて」
昆布等でだ。そうしているのがいいというのだ。

「それがいいのよね」
「そうそう。それでね」
「それでよね」
「後は」
上城から話す。
「海老だけじゃなくて」
「お好み焼きやそうしたのも」
「そうそう。関西って美味しい食べ物ばかりよね」
「だよね。関西にいてよかったよ」
「それとよ」
ここでだ。樹里は微妙な顔になった。
そうしてだ。こんなことも言うのだった。
「野球はやっぱり」
「阪神？」
「中日は嫌いじゃないけれど」
こうだ。少し口ごもりながら話すのである。
「やっぱり阪神よね」
「だよね。野球は」
「おじさんとおばさんは中日一辺倒なのよ」
名古屋にいれば当然のことだ。名古屋を掌握している中日新聞はまさに中日ドラゴンズの為の新聞なのだ。それはそれで地域色があっていい。
しかしだ。それでもだというのだ。樹里は。
「あれはちょっと」
「黒と黄色じゃないと」
「縦縞じゃないと」
そのだ。虎のだというのだ。

第六話　上城の初戦その六

「結局私にはあれなのよ」
「あれって？」
「身体には黒と黄色の血液が流れてるのよ」
そしてその血液が何かというと。
「猛虎の血がね」
「じゃあ甲子園は？」
「聖地じゃない」
まさに阪神ファンの言葉だ。
「それ以外に言い様がないわね」
「だから名古屋は」
「中日じゃなくて阪神だったらよかったのに」
こう上城に話すのである。
「そう思ってやまないわ」
「成程ね。じゃあ樹里ちゃんって」
「そう。生粋の関西人のつもりよ」
例えういろうが好きでもだ。そうだというのだ。
「そのつもりだから」
「成程ね」
「関西のお菓子っていったらアイスキャンデーもあるし」
北極のだ。大阪の店だ。
「他にも一杯あるしね」
「だよね。関西も美味しいものは一杯あるから」
「特にこの学園は」
八条学園はだ。そうだというのだ。
「そうした意味でもいい学校よね」
「それは確かにそうだね」
そんな話をしてだった。二人はだ。

ういろうを楽しんでからだ。それからだった。
部活にそれぞれ行きだ。その後でだ。
一緒に下校する。外はもう暗くなろうとしている。
その中でだ。公園の前を通るとだ。
そこにだ。出て来たのだった。
見ればだ。巨大な蛇だ。それを見てだ。
樹里がだ。こう言ったのだった。
「あの蛇は確か」
「普通の大蛇じゃないの？」
「あれじゃないの？牡羊座の毛皮を護っていた」
黄道十二宮のそれである。
「あの竜なんじゃ」
「蛇じゃないんだ」
「何か違うと思うわ」
とぐろを巻く十メートルは優に超えるそれを見て話す樹里だった。
見ればそれは赤く血走った目をしている。その目だけを見れば悪霊に見える。しかし悪霊にはない生気をたたえてだ。それはいたのだ。
それを見てだ。樹里は話すのである。
「多分だけれど」
「そうなんだ。あれは」
「竜だと思うわ」
「けれど。手足はないし」
上城はその蛇そのままの巨体を見て話す。
「それでもなんだ」
「はい、そうです」
ここでだ。聡美の声がした。それと共にだ。
彼女が上城の隣に駆けてきた。そうして話してきたのだ。
「あの、まさかとは思いましたが」
「あれっ、銀月さん？」

「どうしてここに」
「たまたま通り掛かったんです」
そうだというのだ。
「まさかと思いましたけれど」
「ああ、それでなんですか」
「それでここに」
「そうです」
聡美は二人にこう話した。そのうえでだ。
あらためてだ。二人に目の前のそれを見ながら説明した。
「あれは竜です」
「蛇じゃないんですか」
「手足も翼もない竜もいます」
そうだとだ。聡美は上城に話した。
「それがあの竜です」
「あれっ、竜って」
「竜といっても色々です」
聡美が話すのはこのことだった。

第六話　上城の初戦その七

「様々な種類の竜がいます」
「そういえばそうですね」
聡美の言葉にだ。先に気付いたのは樹里だった。
それでだ。こう彼女に話すのだった。
「西洋の竜と中国の龍も違いますし」
「そうですね。ですから」
「だからあの竜はああした外見なんですね」
「はい、そしてあの竜は」
どういった竜なのか。聡美は話した。
「樹里さんがお話された通り」
「羊の毛皮を護っていた竜ですか」
「そうです」
まさにその通りだというのだ。
「あの竜です」
「大物ですね」
上城はここまで聞いてこう言った。
「それはまた」
「手強いです」
聡美も言う。
「ただ巨大なだけじゃないです」
「火でも吹くんですか？」
「はい、吹きます」
竜に付きもののだ。それもあるというのだ。
そしてだ。さらにだった。
「しかも。見て下さい」
「んっ？」
樹里は竜の口を指し示した。見ればだ。

小刀の様な大きさと鋭さを持つ牙が三列になって連なっている。その一つ一つから禍々しい黒さの唾液を垂らしている。それを見せてだ。

それを指し示してだ。上城に話すのである。

「牙に。毒です」

「毒ですか」

「しかもあの牙ですから」

「噛まれればそれだけで」

「命の危険があります」

このことをだ。上城に忠告するのだった。

「ですから」

「じゃあ炎と牙と毒に注意して」

「闘って下さい」

「わかりました」

上城も頷く。それでだった。

左手にだ。あの青い刀を出した。すぐにそれを両手に持ってだ。

怪物に向かう。その彼に背にだ。

樹里と聡美がだ。こう言ったのだった。

「死なないでね」

「御気をつけて」

「わかってるよ」

背中越しにだ。彼は樹里に笑顔を向けて。

そうして言ってだ。それからだった。

あらためて怪物を見てだ。刀を構えた。中段だ。

その段で構えそれからだ。

一気に突き進む。その彼に。

竜は首をもたげさせだ。上からだった。

上城に炎を吐きかけた。紅蓮の帯が迫る。

だが彼はだ。本能的に。

その青い刀を下から上に一閃させて。炎を消したのだ。

それを見てだ。樹里が驚きの声をあげた。
「どうして炎が！？」
「水だからです」
驚く彼女に聡美が話す。
「水だからできたのです」
「水は火を消す」
「はい、だからです」
消せたというのだ。竜の炎を。
「それだからこそです」
「そうなのですか」
「ただ。それでも」
「それでも？」
「上城君は凄いですね」
見れば聡美も驚く顔だった。その顔でだ。

第六話　上城の初戦その八

それでだ。こう言ったのである。
「まさかもう術を使われるとは」
「そういえば。術でしたね」
「はい、それぞれの剣士の術です」
上城はもうそれを使っているというのである。
「それを使われてですから」
「それができているからですか」
「竜の炎を消せました」
それ故にだというのだ。
「本能的にそうされているのですね」
「そうしたことはできるのでしょうか」
「最初の戦いでは中々できないものですが」
「できないですか」
「はい、できないです」
文献の話ではないが樹里は気付いていない。聡美も自覚しないまま話していく。
ですがそれでもです」
「上城君はそうしてですか」
「闘っています」
目の前ではだ。その彼が。
刀を手に竜の炎、それに牙と毒をかわしながらだ。左右に動いていた。
動きながら刀での突きを竜の巨大な身体に突き刺していっている。
その動きはまさに闘い慣れた、そうした者の動きだった。
その闘いぶりをみながら。聡美は樹里に話す。
「あそこまでの動きができるとは」
「それもですか」

「中々ないのですが」
「じゃあ上城君この闘いは」
「いけます」
勝てる、聡美は言った。
「順調にです」
「勝てますか」
「はい、ですから」
聡美は樹里にだ。微笑んでこうも告げた。
「御安心下さい」
「わかりました」
樹里もだ。その聡美の言葉に。
頷きだ。そして言ったのだった。
「それなら」
「あの竜は確かに巨大ですが」
それでもだというのだ。
「巨体故に小回りが利きませんから」
「そこを突けばですか」
「ああして互角以上に闘えます」
ただしだ。やはり竜だった。
かなり攻撃を入れても倒れずだ。さらにだった。
尻尾を繰り出してくる。それが。
上城を打った。その一撃を受けてだ。
上城は大きく吹き跳んだ。それこそ七メートル程だ。それを見て
樹里は思わず叫んでしまった。
「大丈夫!?」
「普通の人なら死んでいます」
聡美も言う。ただしだ。
樹里の声がうわずっているのに対してだ。彼女の声は冷静だった。
それでだ。
こうだ。また樹里に言うのだった。

「剣士になれば耐久力も強化されます」
「だからですね」
「あの程度の攻撃では死にません」
そうだというのだ。
「ただ。あまり酷いダメージを受け続けると」
「やっぱりまずいんですね」
「人は。不死身ではありません」
例え剣士になってもだ。このことは変わらないというのだ。
「ですから」
「だからですか」
「はい、あの程度では死にませんが」
「それでも攻撃を受け続ければ」
「死にます」
聡美は顔を俯けさせて樹里に話した。
「そうなってしまいます」
「わかりました」
聡美のその話を聞いてだ。樹里は。
こくりと頷きだ。そうして言うのだった。
「それが戦いなんですね」
「剣士の戦いです」
「そうして最後の一人まで戦うのですか」
樹里は吹き飛ばされアスファルトに叩きつけられる上城を見た。
アスファルトはまるで豆腐の様にだ。上城の背に削り取られ壊れていく。そして彼は。

第六話　上城の初戦その九

何メートルも吹き飛ばされアスファルトを壊してだ。それからだ。
立ち上がりだ。こう言うのだった。
「これで死なないなんて」
「まだ死にません」
聡美は驚きを隠せない彼にも話した。
「貴方はこの程ではまだ」
「そうですか。死なないんですね」
「はい、ですから」
「わかりました。それなら」
刀を両手に構えてだ。そうしてだった。
再びだ。竜に向かいだ。
今度はだ。跳んだ。そのうえで。
上から下に一気に振り下ろす。それで。
竜を切った。だが。
頭部をだ。幾分か切っただけだった。竜はまだ健在だった。
そしてだ。竜は。
逆にだ。その口からだ。
炎を吹いてきた。それに対して。
上城は空中で刀を前に一閃させてだ。水の壁を出してだ。
炎を防いで。そして着地した。それからだ。
首をもたげさせる竜を見上げてだ。言うのだった。
「何て硬いんだ」
「竜の骨は尋常な硬さではありません」
聡美はその彼にまた言った。
「ですから」
「そう簡単には真っ二つにはできませんか」
「はい、そうです」

まさにだ。そうだというのだ。
「ですから。戦い方はです」
「考えなければいけませんね」
「どうされますか、ここは」
「真っ二つにできないのなら」
少なくともだ。頭からはだ。
それがわかった。しかしだった。
彼は諦めてはいなかった。それでだ。
首をもたげさせ見下ろす竜にだ。こう言ったのだった。
「閃きました」
「閃かれたのですね」
「はい、それなら」
こう言ってだ。刀の構えをだ。
「こうします」
「一体何をされるのですか?」
聡美に答えるより前にだった。彼は。
刀を右に構えなおしてだ。その刀を。
一気にだ。投げたのだった。
「刀を?」
「投げた?」
これにはだ。聡美だけでなくだ。樹里も驚いた。
それは剣道ではなかった。しかしだった。
彼はあえてそれをやった。しかもだ。
それだけではなくだ。彼は。
刀を投げてからだ。前に、竜のいる方にダッシュしてだ。
竜の腹に突き刺さった刀を再び持ってだ。それから。
刀を上から下にだ。一気に引いた。それによってだ。
竜の腹は大きく引き裂かれた。そうしてだ。
この世のものとは思えぬ絶叫を出してだ。竜はその巨体を。
ゆっくりと地面に崩れ落ちさせた。まるで糸の切れた人形の様に。

鈍く重い音が響き。竜は倒れた。そして。
巨体がゆっくりと消えてだ。後に残ったのは。
黄金の棒が数本。それだけが残っていた。戦場には。
何もなかった。全てだ。
壊れた筈のアスファルトもだ。元に戻っていた。それを見てだ。
樹里はだ。首を捻って聡美に尋ねた。
「何時の間になおったんでしょうか」
「戦いが終わればです」
「それで元に戻るんですか」
「はい、そうです」
そうなればというのだ。
「戻るのです」
「それはどうしてなんですか？」
「文献には書かれていないので」
ここではだ。聡美は文献の存在を巧みに出せた。
「それは」
「わからないですか」
「そうです」
その通りだとだ。聡美は樹里に話した。
「わからないことも多いのです」
「そうですか。この戦いには」
「文献の解読は進めていますので」
聡美はそういうことにした。今回は成功した。

第六話　上城の初戦その十

「その様に」
「では文献のことは御願いしますね」
「はい」
「それでなんですけれど」
樹里は聡美の話に頷いてからだ。それからだ。
あらためてだ。彼女にこのことを問うたのだった。
「怪物を倒したら黄金が出て来ましたけれど」
「そのことですね」
「あれは手に入れてもいいんですか？」
「はい、そうです」
それでいいとだ。聡美はすぐに答えた。
「剣士への報酬ですから」
「報酬ですか」
「勝利には報酬があるものです」
その摂理をだ。聡美は今度は話したのだった。
「だからです」
「それであの黄金が出て来たのですか」
「そうです。あれは手に入れられてです」
「使ってもいいんですか」
「その辺りは剣士それぞれの判断になります」
もっと言えば手に入れるのもだ。そうだというのだ。
「そういうことなので」
「後は上城君次第ですか」
「そうなります」
「戦い勝てば黄金が手に入る」
このことについてだ。樹里はさらに考えた。
そしてだ。顔を暗く変えてだ。聡美にこんなことを話した。

「あの、剣士の人達の中にはです」
「戦う理由はですね」
「黄金を手に入れる為にという人もいるのでしょうか」
「実際に過去に何人もいました」
「いたんですか」
「はい、いました」
聡美はここでも失態を犯してしまっていた。そうした剣士達を見てきたと言ってしまったのだ。だがだ。樹里はここでも気付かなかった。
それでだ。気付かないまま言うのだった。
「それじゃあ上城君は若しかしたら」
「お金の為に戦う様になるかも知れないというのですね」
「そうなってしまう危険もあるのですね」
「人は変わるものです」
聡美はまた真理を話した。
「ですから。その可能性はです」
「全くないとはですね」
「言えません」
そうだというのだ。
「それはどうしても」
「そうですか。それなら」
「ただ。お金には色々な使い方がありますので」
「色々なですか」
「はい、よい使い方もあれば悪い使い方もあります」
ここでもだ。聡美は真理を話した。
「それはその人それぞれです」
「いい使い方を選ぶのか悪い使い方を選ぶのか」
「それぞれですから」
こう樹里に話すのである。
「ですからそれ程です」

「このことは深刻に考えることはありませんか」
「上城君は大丈夫です」
聡美の言葉は確信のものもあった。それがこれだ。
「彼は悪いことにはです」
「なりませんか」
「ならないです」
その闘いを終えた彼を見ての言葉だ。
「ですから御安心下さい。いえ」
「いえ？」
「信じて下さい」
こうだ。聡美は言葉を言い換えたのだった。
言葉を言い換えてだ。そうしてだった。
上城にもだ。こう声をかけたのだった。

第六話　上城の初戦その十一

「その黄金はです」
「これですよね」
「上城君がされたいようにされて下さい」
「そうしていいんですね」
「全てはお任せします」
そうするとだ。あえて彼に任せるというのだ。
「貴方がされたいように」
「黄金は」
「勿論ですが売ればです」
「かなりのものになりますよね」
これは当然のことだった。何しろ黄金だ。言うまでもなかった。
彼も実際にだ。その黄金を見てだ。
手に取りだ。自分のものにして色々と使う、それが悪いことには思えなかった。
だが、だ。ここでこう言ったのだった。
「少しだけ貰って」
「少しですか」
「僕が必要なだけ貰います」
そうするというのだ。
「そして残りは」
「どうされますか？」
「寄付でしょうか」
考える顔でだ。彼は答えた。
「そうした方がいいでしょうか」
「寄付ですか」
「学生にはこれ一本でも凄いですよ」
上城はその黄金の棒の一本を手に取って述べた。

「これだけでも百万はしますよね」
「二百万でしょうか」
「それだけあればどれだけのことができるのか」
そしてだ。こんなことを言うのだった。
「マクドナルドも吉野家も行けてラーメンも食べられて」
「他には？」
「カラオケに甲子園行ってゲームセンターでＵＦＯキャッチャーやって」
「それだけですか」
「はい、それこそ一年というか」
彼はだ。さらに話すのだった。
「高校卒業まで遊ぶお金には困りませんよ」
「貴方はお金については」
「遊ぶか。後は」
「寄付ですか」
「これだけあったら貯金してもいけますし」
中々堅実なところも見せる彼だった。
そしてだ。さらにだった。
「これだけあったら充分ですから」
「そうよね。私もそう思うわ」
樹里もだ。ここで言う。
「お金は。必要なだけあったら」
「いいよね」
「そうよね」
眉を少し曲げてだ。樹里は上城の言葉に応える。
「別に」
「沢山あっても」
「何か。ぴんとこないし」
「少なくとも今のところ使いみちはないです」
上城はだ。やはりこう言うのだった。

「ですから」
「では他の棒は」
「銀月さんにお渡ししましょうか。それとも」
上城は考える顔のまま聡美に話す。
「僕がお金に変えて」
「直接寄付されるか」
「そうしましょうか」
「そうですね」
聡美もだ。考える顔になっている。
そしてその顔でだ。上城に離した。
「そうされた方がいいと思います」
「じゃあ。一本は頂きます」
本当に一本だけだ。上城は己のズボンのポケットの中に入れた。
しかし他の数本の棒はだ。どうするかというと。
その手に取ったままでだ。こう言うのだった。
「明日お金に換えて」
「それでよね」
「寄付するよ」
こう樹里に話した。
「八条グループって寄付する先あったよね」
「あるわ。あのグループ慈善事業も沢山やってるから」
「赤十字もあるし」
寄付する先も様々なのだ。世の中にはそうした団体も数多くあるのだ。
「それなら」
「そうよね。そうしましょう」
二人で話しだ。黄金の残りの使い道を決めた。だが、だ。
ここでだ。もう一人が出て来たのだった。
中田だった。彼が不意に姿を現わしてだ。
そうしてだ。上城に話すのだった。

「ちょっと待ってくれるか？」
「中田さんですか？」
「ああ、俺だよ」
人懐っこい笑みでだ。上城に言ってきてだ。
彼のところに来てだ。こうも言ってきた。
「その黄金寄付するんだな」
「そのつもりです」
「まあいいことだな」
中田は上城の説明を聞いてだ。
頷きはした。しかしだ。すぐにこんなことを言ってきたのだった。

第六話　上城の初戦その十二

「ただな。俺としてはな」
「何かあるんですか？」
「金が必要なんだよ」
笑みは軽いものだ。だが。
目は光っていた。その目で言うのである。
「だからな。ここはな」
「貴方が。この金を」
「貰いたいんだがな。駄目か？」
「それは」
「ちょっとした理由があってな。金が必要なんだよ」
笑みのままでだ。中田は上城に話していく。
「だからだよ。いいか？」
「僕は決めましたから」
上城はその彼に対してだ。
毅然とした口調になりだ。こう返したのだった。
その目でだ。中田を見返してだった。彼は言った。
「寄付します」
「だよな。じゃあ俺もな」
「中田さんも」
「やるしかないよな」
お互いにだ。言いだった。
対峙をはじめる。上城はまだ刀を手にしている。だが中田は。
まだ刀を出していない。しかしだ。
今まさに出そうとしていた。気配がある。
それを見てだ。聡美はだ。樹里に言うのだった。
「危ういです」
「そうですね。このままだと」

「闘うことになります」
「あの。剣士同士の闘いは」
「この戦いの主なものですが」
魔物との闘いではなくだ。人間同士のそれがだというのだ。
「それが今はじまるとは」
「どうしたらいいんですか？」
「残念ですが私達は」
聡美はだ。その言葉を曇らせた。
そしてだ。こう言ったのだった。
「どうしようもありません」
「見るしかできないんですね」
「はい、できません」
まさにだ。そうだというのだ。
「あくまで。剣士同士の闘いなので」
「じゃあ。後は」
「上城君は剣士同士の戦いを終わらせると言いました」
上城を見てだ。聡美は今言った。
「ですから。後は」
「上城君次第ですか」
「そして中田さん次第です」
もう一方の相手もだ。外せなかった。
「ですから。今はもう」
「私達ではどうにもならない」
「そうなのですか」
その通りだった。二人はだ。
今は見守るしかできなかった。もう一つあるとすれば祈ることだ。
そうしたことしかできないことにそれぞれ歯痒さを感じ歯噛みもしながらだ。対峙する上城と中田を見ていた。水と炎が対峙していたのだ。

第六話　完

2011・8・22

第七話　中田の言葉その一

久遠の神話

第七話　中田の言葉

聡美と樹里が見守る中でだ。上城と中田は。
対峙していた。その中でだ。
中田はだ。自分の前にいる上城にこう尋ねたのだった。
「やるつもりか？」
「そう思われますか？」
「そう見えるけれど違うか？」
こう上城に言い返した。
「それは」
「僕は決めたんです」
「決めたって？」
「怪物達とは戦います」
毅然としてだ。こう言ったのだった。
「彼等とは。しかし」
「俺みたいな剣士とかとはかい？」
「戦いません。絶対に」
「それはどうしてだい？」
「剣士と剣士。人間と人間ですよね」
「ああ、そうなるな」
その定義はだ。中田も把握していた。それを承知のうえで剣士になっているからだ。
それをわかったうえでだ。今目の前にいる上城の話を聞いているのだ。
「それはな」
「それならです。僕は」
「人間同士の戦いはしないってのかい」

「止めたいです。それどころか」
「止めるのさらに上のランクだな」
上城の話がそこにいくと察してだ。
中田はだ。上城より先に言ってみせた。
「となるとな」
「はい、終わらせます」
そうするとだ。上城は言った。
「そうします」
「なら俺とはどうするんだい？」
「闘いません」
毅然としてだ。上城は中田に告げた。
そしてその証にだ。彼は。
今左手に持っている青い刀をだ。消してみせたのだ。
そうしてだ。こう言ったのだった。
「貴方とも。他の剣士の人達とも」
「青いねえ。水だから青いのは当然にしても」
上城の話をここまで聞いてだ。中田は。
まずは軽い笑いを浮かべて。それからだ。
目をだ。闇の中で光らせてだ。そのうえでだ。
こうだ。上城に告げたのである。
「若しも俺がな」
「中田さんがですか」
「今の。刀を持っていない君に刀を出す」
実際にだ。それは今すぐにでもできる。剣士だからだ。
「それで君を斬ればどうするんだ？」
「その場合はですか」
「どうするんだい？その場合は」
「その時は」
「闘うかい？そうするのかい？」
「闘いません」

こうだ。上城は毅然として言い切った。
「決めましたから」
「絶対にか」
「絶対にです」
自分より少し背の高い彼を見上げてだ。そしてだ。
彼にだ。また言ったのだった。
「闘いません」
「言うね。辛いぜそれは」
「わかっています」
それでもだとだ。上城は返し続ける。
「僕はそうします」
「言うね。まあ俺もな」
「中田さんも？」
「あれだよ。戦うのは魔物以外にはな」
どうした相手なのか。上城に話すことは。

第七話　中田の言葉その二

「剣を持っている相手だけなんだよ」
「じゃあ今は」
「君は剣を抜かないだろ？」
軽い口調だが問うたことは真剣なものだった。
「そうだよな」
「はい、今は」
「ならいいさ。闘わないさ」
笑ってだ。上城に告げたのだった。
そしてだ。さらにだった。
「その黄金もいらないさ。好きにしなよ」
「黄金もですか」
「確かに欲しいさ」
このことは否定しなかった。
「けれどそれでもな」
「闘わないとですか」
「闘って勝って手に入れるのはいいんだよ」
中田の考えではそうだった。報酬という考えなのだ。
「けれど盗みはよくないよな。強盗も」
「だからですか」
「ああ、いいさ」
上城が持っているその黄金をだ。いいというのだ。
「君が持って好きに使うといいさ」
「そうしていいんですか」
「俺が手に入れるものは戦って手に入れるものなんだよ」
あくまでそういうものだというのだ。
「奪うものじゃない。そうだからな」
「じゃあ今は」

「帰させてもらうさ」
明るく笑ってだ。踵を返した。
そのうえで上城に背を向けた姿勢で右手を振ってだ。
彼はだ。別れの言葉も出したのだった。
「それじゃあまたな」
「本当にいいんですか？」
「何度でも言うぜ。俺は戦って手に入れるんだよ」
つまりだ。奪わないというのだ。
「そういうことさ。まあ闘いたくなったら何時でも呼びな」
「僕は絶対に」
「心変わりしたらだよ」
その場合はだというのだ。
「その場合は呼んでくれよ。それじゃあな」
「はあ。じゃあまた」
「お茶でも飲もうぜ。今度は」
屈託のない別れ言葉を送ってだ。中田は消えた。
そうしてだ。残った上城は。
釈然としない顔で樹里達のところに戻ってだ。そしてだ。
彼はだ。こう二人に言った。
「終わったけれど」
「そうね。これで」
「はじめての戦いは終わりましたね」
「覚悟はしていたよ」
中田と会っただ。その時にはというのだ。
「けれどそれでもね」
「そうね。闘わずに済んだわね」
このことをだ。樹里も言った。
「よかったわよね」
「うん、よかったよ」
上城はほっとした顔で話す。

「闘わなくて」
「中田さん言ってたけれど」
「闘うのは刀を持っている相手だけだって言ってたね」
「ええ、言ってたわ」
その話をだ。二人はするのだった。
「何か。そうしたところは」
「しっかりとした考えを持っておられるのね」
「あの人ですが」
二人にだ。聡美が言ってきた。
「決して悪い人ではありません」
「そうですね」
上城がすぐに聡美に応えた。

第七話　中田の言葉その三

「あの人は」
「むしろ正しい心を持っておられます」
「だからあの時退いてくれたんですね」
「世の中には己の欲の為に平気で奪い取る人もいます」
これもだ。人間なのだ。己にある欲望に耐えられない輩なのだ。
「ですがあの人はです」
「そうしたことはありませんね」
「あの人はわかっているのです」
「何をですか？」
「人も。そしてこの戦いも」
「剣士同士の戦いについてもですか」
「わかっておられるのです」
そうだというのだ。中田は。
「全てです」
「そういえば何か」
樹里もだ。ここで言った。
「達観した感じがありますね」
「この戦いは不毛です」
そうした戦いなのだともだ。聡美は話した。
「そのことをわかっておられるのです」
「あの人もですか」
「しかしです」
「しかし？」
「あの人はそれでも戦われます」
そうするというのだ。中田はだ。
「そうしないといけませんから」
「あの人には事情があるんですか」

「あの人にとっては絶対の」
事情があるというのだ。聡美は上城だけでなく樹里にも話していた。
「それがあります」
「そうですか」
「そうです。ですから貴方が刀を持てば」
そうなればだ。どうなるかというのだ。
「あの人は貴方と戦われるでしょう」
「そうなるんですね」
「そうなります。絶対に」
そしてそれはだ。絶対だというのだ。
「貴方は剣士同士との戦いを終わらせたいのですね」
「はい」
これが今の上城にとっての絶対のことだった。
「そうです。ですから」
「刀は。剣士に対してはですね」
「出してはいけません」
これが聡美にとっての絶対だった。絶対に告げることだった。
「そしてそれはです」
「それは？」
「他の剣士達に対してもです」
中田だけではないのだ。剣士は。
「貴方とあの人を含めて十三人の剣士がいるのですから」
「僕以外の十二人の剣士に対しては」
「戦いを終わらせたいのならですね」
「絶対に刀を出してはいけません」
そうしろというのだ。
「何があっても」
「わかりました」
上城は強い声でだ。聡美のその言葉に答えた。

「そうさせてもらいます」
「戦いを終わらせることは難しいですが」
これはもう既に確めていることだった。他ならぬ上城が最もだ。
聡美はそのことを上城に話してだ。そうしてなのだった。
そのことを確かめ合い。さらにだった。
聡美は樹里にも話した。
「貴女もまた」
「私もですね」
「この戦いを終わらせたいですね」
「はい」
その通りだとだ。彼女もこくりと頷いて答えたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2979v/

久遠の神話

2011年11月22日03時11分発行